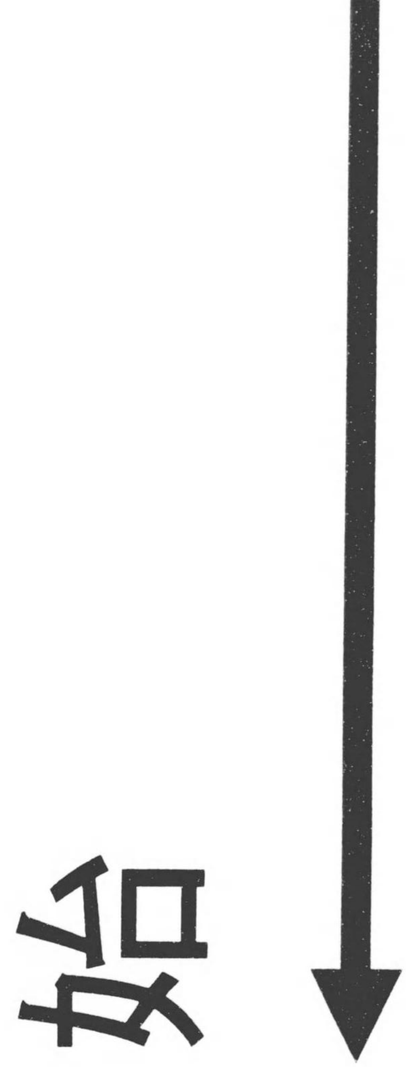
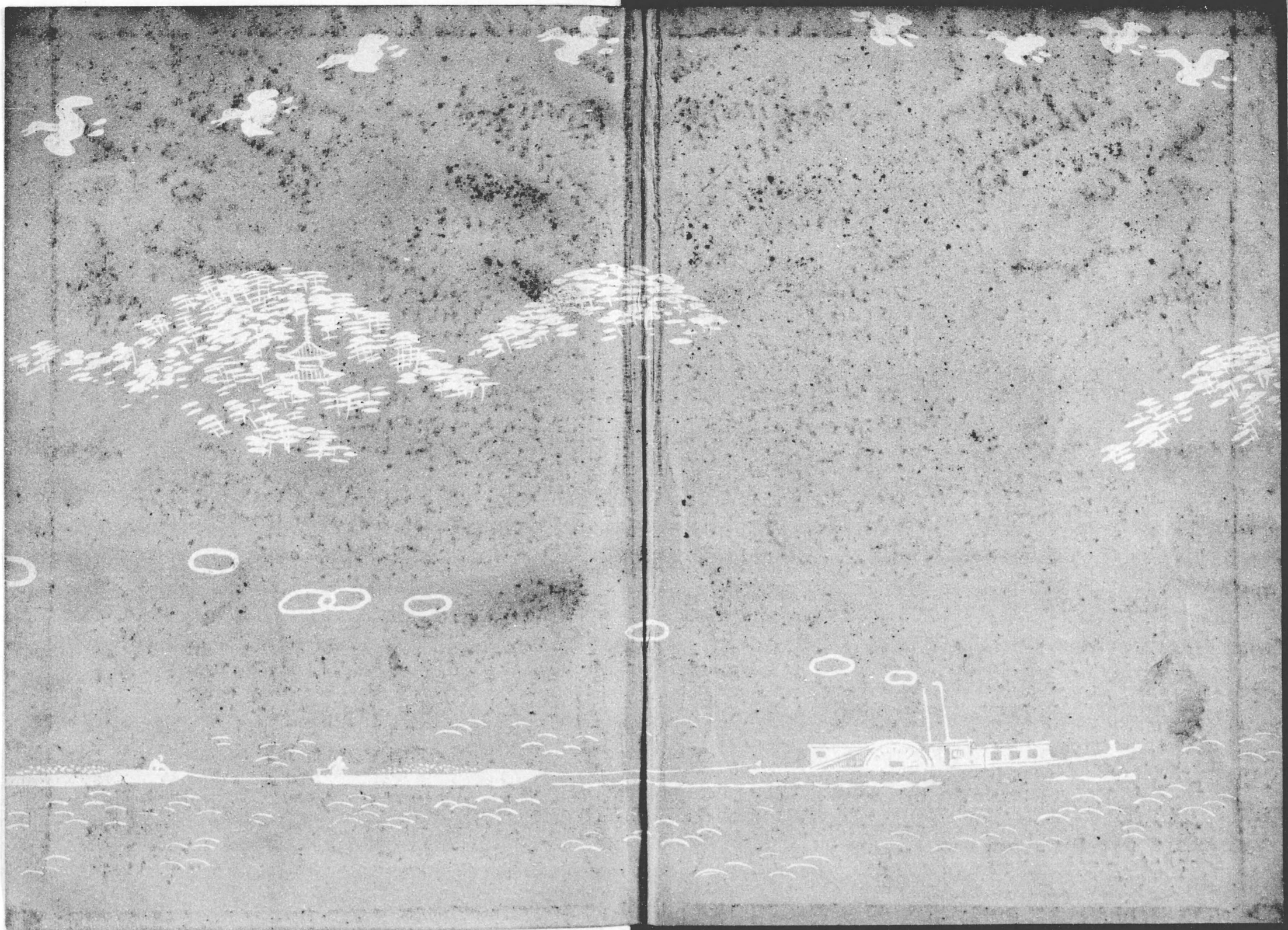
538
55





太平野好卿本集

大正
14. 3. 30
内交

538-55

大平野虹脚本集第二卷目次

求むる平和（五幕）……一
曉の勝利（五幕）……二四七
（附錄）解說　興行年表　劇評……一

（無断興行を禁ず）
本集の脚本によりて上演又は轉載せんとする場合は松竹合名社並に京都府下八幡町平谷一番地大平規の許諾を經るを要す。

求むる平和

五幕

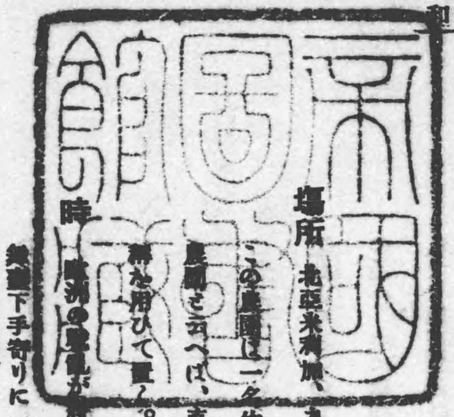
序幕

北米サクラメント農園

人物

一サクラメント農園主　佐川慶治
一日本野村紡績合名社主の倅　野村秀彌
一野村合名社技手工學士　藤田欽哉
一秀彌の秘書元不良少年　倉田惣吉
一元密航婦秀彌の内縁の妻　山崎お芳
一元水夫　農園勞働者　小泉準之助
一　お芳の情夫　赤間辰三
一サクラメント農園農夫　池田富吉
一同　鱶村吉次
一同　志田二郎
一同　森山末吉
一同　三谷喜代松

一同　千駄木直次
一同　關根太郎
一その他勞働者　大ぜい



場所　北米米利加、カリフォルニヤ洲、サクラメント附近に於ける農園の一部分を描寫せしもの。

この農園は一名佐川農園もいって、日本人佐川慶治の經營になるものであるが、サクラメント農園と云へば、直ちに佐川農場たる事は、在米日本人間にも限なく知られてゐるので、特に俗稱を用ひて置く。從って農園の使用人も日本の出稼人が大部分を占めてゐる。

時　晩秋の黎明が樹に脚かれんとする年の、少し以前の出來事。

美麗下手寄りに一條の細い道路があって、上手奥の方に灣曲したる背景、その道路の兩側にはずっと彼方にまで、ポプラやアメリカ杉の木立が、美しい絲葉を淡く染出したやうに茂ってゐる。そして、道路の左右は凡て收穫後の畑地が曠々と連續して、處々に土も新らしく掘起された跡がある。

遙か彼方にはシエラネバダ山脈の峰巒が聳い立なば、蒼色の大空にヌーと聳えて、その中腹より下手斜めに文藝復興期時代風の古風な白堊色の人家が散亂して、其の中央に合衆國の國旗が靡つてゐる。

舞臺中央より、すツと上手に寄せて稍荒廢した木造（木造は丸太木を組合せたるもの）の建物を設く。これは農具類を仕舞つて置く、謂はゞ日本の納屋に等しきもの。建物の上手寄に一間ほどの入り口、三分の二ほど引戸が開いてゐて、そこから内部に仕舞つてある農具が見える。そして入り口の上部には、白いペンキ塗りの板に墨で "Tools" とゴシックに誌してある。これは農具置場といふ意味なば、米國流に簡單に表示したもの。

道路より建物の背面につゞいて、ポプラとアメリカ杉が、まばらに樹立してゐる。そして、その邊——主に建物の周圍にチューリップ、ヒヤシンス、三色スミレなどが咲亂れてゐる。

凡て、舞臺裝置は一見して北米の農場たる事を首肯せしむるやう努むるを要す。

日本の氣候にして、恰うど秋の午後のやうな弱い光線が、樹木の影を亂して斜めに照輝やいてゐる。

序幕のみに限り木頭を用ひず、開幕二分間前に鈴を鳴し、看客を靜肅にせしめて、徐ろに——

幕開く。

或る週間の土曜日の午後。

雲雀が荐りに囀つてゐる、この雲雀の啼聲は閉幕にいたるまで、時々あいだを置いて啼聲をほがらかに響すこと。

板つき、日本出稼人坂井三藏、須村駿助、八田久次郎の三名は各自に馬鈴薯を大きなヅックの袋に入れてゐる。

三　藏。（袋に入れ込んで了つて）さアこれでごうやら今日の分だけは仕舞つたな。

駿　助。あ、午後からの分で幾袋ほどになるかな。

久治郎。大方六百ばかしだらう。

三　藏。まあ、ざつとそんなものだらう、しかし今年のやうに馬鈴薯の收獲の多いことは、この四五年にないといふ話だぜ。

久治郎。うんそうだつてな、このサクラメントの馬鈴薯を、どうしてかうも喰べるかと思ふほど毎日〳〵市場へ出してゐるがそれでもまだ足りねえといふぢやないか。

駿　助。あはゝゝゝ、亞米利加は廣いからな。（ト袋を肩にして）どうも重いなア、さアこいつを仕

舞つたら一服休まうぜ。

ト一同拾壷詞にて各自袋を肩にかけて上手に入る。上手より米國人二人（農夫姿）にてさつさと無言にて下手に入る、下手より米國老婦人（コッ〃風）大きな籠を肩にかけて上手に急いで行くと、間もなく下手より、日本の出稼人、赤間辰三、坂井三藏、池田富吉、織村吉次、志田二郎、森山末吉、三谷喜代松、千駄木直次、須村駿助、關根太郎――其の他大ぜい、各自思ひ〳〵の農夫の扮裝にて、いづれも手に鋤や鍬などを持つて、疲れ切つた表情にて出づ。

注・意　出稼勞働者の服裝及び演出法は特に舞臺監督に從ふべし。

辰三。　まあ、皆な此處で一服休まうぜ。

富吉。　あゝ、それが可いや。この頃のやうに日が長くなると可成疲れるなあ。

末吉。　まつたくだ。

語り乍ら一同は適宜の場所に足を投出して休息する。富吉がポケットから金口の煙草を出して、一本吸ひかけると、

喜代松。　おゝ、池田の野郎い、煙草を持つてるなあ、俺に一本寄越せよ。

富吉。　あゝ、喫むがいゝや。

煙草を投げて渡す。四五人がざや〳〵と取巻いて、「俺にも一本吳れい」と云ひつゝ、忽ち煙草は空になつて了ふ。

富吉。　（驚いて）おい〳〵、さう取つちや俺が喫むのが無くなつて了ふぢやねえか。

喜代松。　富公！吝臭い事を云ふない、ごうせ手前だつて、テワンテンメンのあの娼婦から稼いて來たんぢやねえか。

富吉。　おい串談云つちや不可ねえぜ、今朝農場へ出かけに買つたばかしよ。

喜代松。　へゝん！旨く云つてら、俺らより二年も後に渡つて來やがつた癖に、テワンテンメンの看板娘を情婦にするなんて、手腕がよ過ぎるぜ。富公！

辰三。　何に、池田がテワンテンメンのナアタリアを情婦にしたつて？、

喜代松。　そうだよ、手前まだ知らねえのか、酒場の定連にも似合ねえな、しつかりしろい！

辰三。　そいつは一番出抜れたわい。あの女の女振にや、こゝにも大分ござつてた連中があるんだからなあおい富公！一週分の給料位は奢らなくちや不可ねえぜ。

富吉。　辰さん、皆な冗談だよ、俺がナアタリアを情婦に持つ甲斐性があるくらゐなら、一日二弗半で亞米利加くんだりまで來て百姓はしねえよ。ナアタリアの奴！誰にでも調子のいゝ事を云やがつ

て、日本人の稼いだ金を絞り上げては自分の好きなものを買つてやがるんだ。

喜代松。　さう怒るなよ、富公！日本だつて亞米利加だつて、最初は野郎から打込んで行くのは、色男になる御定法ぢやねえか、あはゝゝゝ。

一　同。　あはゝゝゝ。

その時一番年老つた千駄木直次（六十前後）は一同の話を面白さうに聞き乍ら、

直　次。　なあ、亞米利加くんだりまで來て、情婦の一人や嬶でもなかつた日にや、迚も暮して行けるものぢやねえや。若い時や二度ねえ、うんこやるがえゝだ。だが何んだぜ、いつも云ふ事だが。

太　郎。　おや、爺さん、またお説教を始め出したな。

直　次。　お説教ぢやねえ、若い人達の爲を思ふから云ふだ。俺等亞米利加へ來てから最早十八年にもなるだがなア、誰だつて最初日本の土を離れる時にや、力限り根かぎり働いて、ごつさり金を儲けて日本へ歸る料見で汽船に乘ちねえ奴ァねえよ。處がこの亞米利加の土に刷れて來るこ、女は買ふ、博奕は打つ、酒は飲む、この三拍子が揃つた日にや、日本で安い金で働いて居る方がよつぽど割がいゝだぞ。外國で稼いだ金を外國の肥料にしたんぢや何んにもならねえ。終には俺のやうに頭が禿げても矢張り勞働してるなくちやならねえ。俺が可い手本だ、日本へ歸り損ふうこ一生外國の土に化つて終

らなくちやならねえぜ。

辰　三。　そりやさうだこも、爺さんのいふ通りだ。なあ誰だつて亞米利加くんだりまで來て、一生涯土をほじくつて終ちうこ思つて渡つた奴は一人もありやしねえ。

太　郎。　それがよ、皆なかう見えても日本の隅々まで殘らず喰ひ詰めた揚句の果てが、こんなにごつさり集つたんだ。

喜代松。　そうだこも、日本を喰詰めて亞米利加へ來てまで百姓すりや世話がねえや。

太　郎。　うむ、しかしこの北米まで喰ひ詰めた日にや俺達は、これから先きは全體ごうなるのだらうな。

喜代松。　もう、さうなつた時にや生命がねえや。

直　次。　（起き上りつゝ）しかし皆なは生命々々つて云ふけれぎな、人間の生命なんてものは飴見てえなもんだ。舐つてる裡になくなつて了ふよ、あはゝゝゝ。

喜代松。　爺さんは相變らず面白い事を云ふな。あはゝゝゝ。

一　同。　あはゝゝゝ。

下手奥より小泉準之助薄汚れた農場服を着て、汚ない帽子をあみだに冠り、馬鈴薯を一杯いれ

たゞツ〻の大きな袋を重さ背うに負つゞて出。（やゝ疲勞の体）

辰　三。　おゝ、小泉ぢやねえか。

富　吉。　準公！まあさう稼がねえで、一服したらどうだい。

準之助。　おゝ、皆な此處にゐたのか、まあ是を什舞つて來てから一服しようよ。

直　次。　何んだい、その袋は？また馬鈴薯か？

準之助。　ふむ、そうよ、先刻收獲れた跡を見て歩いたら、こんなに零れてゐたんだ。腐らしても勿體ねえと思つて、遑に一寸拾つて置いた。まあこれでも市場に出せば皆金になるんだ。

（ト準之助は云ひつゝ上手に入る、一同呆然として準之助を見送る。）

直　次。　彼奴はいつも感心に働くなあ。

喜代松。　本當だ、休む遑も休まねえで、こつちこらこはわけが違ふよ。

辰　三。　しかし、あんなに働いても全體何が樂しみで生きてゐるんだらう。それが不思議でならない。

太　郎。　全くだ、あんな毛色の變つた出稼人は、この廣いカリフオルニヤ洲でも、あの小泉一人だらう。

直　次。　本當に珍らしい男だ。何んでも彼奴は元は加奈陀汽船の水夫でしやうのねえ奴だつたさうだが——ごう慳道を開きやがつたか、陸上へ上つてからすつかり發心して、今ぢや一生懸命に金ばかり貯めてゐるこいふ事だ。

末　吉。　さうだつてな、だが河童が陸へ上りや生命が無え筈だが、こいつあ少し寸法が違つたかな。

一　同。　あはゝゝゝ。

直　次。　さあ、串談云はねえでもう一稼ぎだ。（ト起つ）明日は日曜だぞ、悠り休めらあ。

富　吉。　さうだ、俺らも小泉の眞似をしてウンこ稼いで金でも貯めるかな。

直　次。　へん！お前が金を貯める？

富　吉。　そうよ。

直　次。　駄目なこツた。そんな料見は止すがいゝや、ナアタリヤに厭はれるぜ。

富　吉。　あはゝゝゝ。

一　同。　さあ、早く行かう。

（農夫一同捨臺詞にて下手に去る、入れ代つて下手より工學士藤田欽哉、倉田惣吉の二人出づ。）

惣　吉。　ねえ藤田さん、今のうちに充分若日那に意見をしなくちや、全く私共が歸朝して野村さんに申譯が立ちませんからなあ。

欽　哉。　さうだとも。本當に困つたものさ。何者とも知れぬあんな妖婦のような女に夢中になつて了つて、肝腎の工場視察などは丸てそつちのけの有樣だが、しかし倉田君考へて見ると、巴里で吾々が四ケ月間も無意味に滯在したといふ事が、仰々今度の禍根を植附けたんだね。

惣　吉。　え、、そりや全くさうなんです。あれ迄は若旦那だつて眞面目に方々の工場を視察して、熱心に研究をして居られたのですがな。

欽　哉。　さうだつたね。あの精力（エナージー）には吾々も叶はなかつた位だが、女に懸ると男は弱いもんだ。

惣　吉。　（嘆息して）仰有る通りです。あの時リヨンから巴里へ出ずに、直ぐ馬耳塞（マルセイユ）へ出て、この佐川さんの監督の下に置いたら、かうした失敗もなかつたのでせうが、それも後の祭りで詮方がありません。しかしね、藤田さん！

欽　哉。　うむ。

惣　吉。　あなたはあのお芳と云ふ女をどう思ひます。

欽　哉。　ふゝむ。どう思つて？そりやあれ位の美人は日本へ歸つたつて一寸見付かるまいよ。その點から云へば秀彌さんが戀（ラブ）するのも無理はないがね。丁度あの時は横濱を出帆してから丸一年目で、誰でもホーム・シックに罹る時だからな。

惣　吉。　いや、私があなたにお伺ひしたいのは、さう云ふ意味でなく、あの女の過去についてのあなたの御觀察を伺ひたいのです。

欽　哉。　あの女の過去のこと？

惣　吉。　え、、彼女の過去の生活です。

欽　哉。　そりや人間も過去の生活なんて判るもんぢやないよ、現在の事ですらなか〳〵判らんのだからな。

惣　吉。　さうあなたのやうに一口に仰有られて了えばそれ迄ですが、つまりあの女の過去の經驗です。

欽　哉。　そりや僕達には迚も判らないね。

惣　吉。　僕にはよく分つて居りますよ。

欽　哉。　あはゝゝゝ、成程な、君は世間の實際には明るい人だつたね。一つ君の明確なる觀察を聞かして貰ふかな。

惣　吉。　あれは魔の女ですよ。

欽　哉。　魔の女？（思はず叫ぶ）

惣　吉。　あの女は立派に處女（ヴァージン）だなんて云つてますがね、決してそん女ぢやありません。男こいふ男にはあらゆる洗練されて來た妖婦に違ひありません。

欽　哉。　ふゝむ。こいつは面白い。

惣　吉。　第一あの眼を御覽なさい、男の心を惑に弄んで自分の肥料に仕盡さねば置かない怖しい心が閃めいて居りますよ。醜惡な心も、かの美しい肉體と、それを纏ふ美服と、久しい經驗から洗練された彼女の技巧に擁つて凡てを掩隱してゐるのです、あの魔に魅入られた若旦那こそお氣の毒なものです。

欽　哉。　あはゝゝゝ、まあそれほどの女でもあるまいが、君のようにさうセンチメンタルに考へても困るよ。

惣　吉。　いや、私の觀察は決して間違つてゐない意りです。

欽　哉。　まあ、さう昂奮しなくつても可い、秀彌君だつてもう子供ぢやなし、慶應出身の理財科ぢやなか〳〵秀才だつたのだから何ごか考へても居られるだらう。

欽哉は木の根に腰を却してビルドックパイプに煙をつめて喫す。その時上手から準之助が足早に出でツカ〳〵と二人の前を通り過ぎ惣吉を目顧つて、少時互ひに顔を凝視してゐるが

双方から飛付いて握手する。

惣　吉。　おゝ、小泉ぢやないか！

準之助。　ね、倉田か！

二人は少時顔を視詰合つて夢のやうな思ひに言葉も出でず、嬉しさうに緊と握手を交す。

準之助。　おいどうしたい、久しく逢はなかつたがまあ達者で何より結構、（ちッと惣吉の姿を眺めて）大層立派になつたな。

惣　吉。　いや、さうでもないがね、しかし小泉僕は君の事ばかりは一日も忘れなかつたぞ、便りをしやうにも、何しろ横濱（ハマ）であんな具合になつて別れたきり、生きてゐるこも死んでゐるこも君の行衛は分らないし、本當に心配したよ。

準之助。　や、有難う。

惣　吉。　そうして君はいつ亞米利加へ來たのだい。

準之助。　あれからな或る事情の下に濱にも居られなくなつて僕は亞米利加航路の汽船（ふね）に乘つて水夫をやつて居つたが、些し考へた事があつて汽船を脱走して、今ぢやまあ僕もこの農場で、この通り眞黑になつて働いてゐるよ。

惣吉。ふむ、それは何より結構、まあお互に無事で會へて、こんな嬉しい事はない、僕もね君と別れてからすつかり心を入換えて感化院へ歸つて、是迄の事を謝罪して、その後こいふものは生命がけで勉强をした、そのお高庇で院長にも可愛がられる、後には東京の奥田男爵のお世話で、今ぢやそら紡績界で可成り派ぶりのいゝ野村合名社のまあ秘書みたいな事をしてゐるのだ。今度若主人の隨行を命ぜられて、歐洲を經て此(こちら)土へ廻つて來たのだ、しかし悦んで呉れい、僕もごうにか眞人間の仲間入りが出來たこいふものだ。

準之助。うゝむ、さうか、それは何より目出度い事だ、お互に感化院を脱走した仲のいゝ友達が、こんなに出世をしたかと思ふと、僕は全く涙が零れるほど嬉しいよ。

惣吉。おゝ、僕もこんな欣しい事はない、さうだ、嬉しさに身が入つて、紹介するのを忘れてゐた。

ト惣吉は欽哉に向つて、

惣吉。藤田さん。

欽哉。あゝ。

惣吉。そら私がよく自分の少年時代の破亂な生涯をお話した時に、よく引合に出してお話した男です。

欽哉。あ、さうかね、それは奇遇だ。

惣吉。小泉君、こちらが會社の技師で始終お世話になつてゐる工學士の藤田さんです。

準之助。あ、そうですか、私はこの倉田君の少さい時からの友達で小泉準之助と申します、何卒よろしく。

欽哉。いや、君の事は時々倉田君から聞いて居りました、僕が藤田です、何卒よろしく。

準之助。いや私こそ。御覽の通りの勞働者では御座いますが、何分よろしくお願ひをいたします。

欽哉。いや〳〵、僕も矢張り勞働者の一人です、貴君(あなた)はずツとこの佐川さんの農場にお働きですか。

準之助。はい、こちらの園主にも色々面倒を見て戴いて居ります。

欽哉。それは大變に結構です、この佐川さんと私の方の野村社長とは内地で洵に親密な間柄だつたさうで、今度私共がかうして北米に來たについても色々と佐川さんの御配慮に預つて居る次第です。

準之助。はア、左樣で御座いますか、それは尠しも存じませんでした。

惣吉。さうして君は現今住宅(すまい)は何處にゐるんだね、この近くに家でも借りて。

準之助。うむ、(下手を指示して)この道をずツと南へ行くと十字街(よつじ)があるだらう。

惣吉。うむ〳〵。

準之助。　あの十字街を左りへ曲るこ村の入口だ、そこにメソジストの教會堂が建つてゐるよ、その裏手のシエッチーこいふ家に居るのだ。

惣　吉。　うむ、さうか――何かいもう妻君でも貰つて。

準之助。　あはゝゝゝ、冗談ぢやない、相變らず獨身で、屋根裏生活さ！

惣　吉。　ああそうか、そりや氣樂で可い、ごうだ差支がなければ、これから晩餐でも一緒にやつて悠り話さうぢやないか。

準之助。　いや、有難う、是非一晩話したいが、僕はまだ時間中だから、今から直ぐこいふわけには行かない。ぢやかうしやう、さうだ六時半過ぎたら、僕の方からお訪ねをしやう。まだ當分は此地に滯在だらう。

惣　吉。　うむ、主人の意嚮次第でいつ出發こも分らないが、まだ五日や十日はこゝに居るよ。主人は佐川さんの別宅に居るがね、僕こ藤田さんはサクラメントのフウワーストホテルに居るよ。

準之助。　ああ、フウワーストホテル、うむ分つてる、ぢや農場が退け次第にお伺ひしやう。

惣　吉。　是非來て呉れ給へ、待つて居るから。

準之助。　ああきつこ行くよ。

二人は握手を交して、藤田こも握手をして、

準之助。　藤田さん、ごうも失禮いたしました。

欽　哉。　やあ、いづれ又晩ほごお目に懸ります。

準之助。　は、是非お伺ひ申します。

惣　吉。　や、ぢや何れ晩ほご、、、、。

準之助下手奥に入る、惣吉は其の後姿を少時見送つて、

惣　吉。　北米であの小泉君に邂逅ふこは思はなかつた、昔しの札附の不良少年があァして眞面目に働いてゐるのを思ふこ、あの頃は丸で夢だつたなあ。

欽　哉。　いや、小泉君も君の事を思つて同じような事を考へて居るだらう。

惣　吉。　そりやさうでせうな、しかしあの男も眞人間に立還えるには余程の動機があつたに違ひない。僕が横濱の野毛で月の夜に家から洩れる睦じさうな琴の音を聞いて、あァした樂しい平和な世界も人生にはあるものかこ、自分の暗黑な脅かされた犬のやうな生活こ比較べた瞬間に、まるで彈力の強いバネが跳反るやうに、僕の全身に始めて眞人間の血汐が漲つた時こ、矢張り同じやうな動機が彼の過去にもあつたのだらうか。

欽　哉。　そりや無論あつたらうさ、人間に良心のないものはないからなあ。

惣　吉。　さうですねえ、性は善とか云ひますからな——しかし彼は僕等よりもずつと剛直な人間だつた、血も涙も一倍強かつた。何しろあの男の過去の生活を聞くのは、今夜はアンドレーフの小説を讀むよりも面白いに違ひない、あゝ愉快だ、こんな愉快な事はない、いやすつかり緊張して了つた。

欽　哉。　あはゝゝゝ、昔しの親友に會ふほど愉快なものはないよ。秀彌君のことで氣を腐らしてゐた君が、まあこれで埋合がついて結構だ。さあ餘り遲くならない裡に佐川さんに會つて來ようか。

惣　吉。　えゝ、愚圖々々して居つてすつかり遲くなつて了ひました。あなたには飛んだ御迷惑でした。

欽　哉。　いや、そんな事はない。

（二人は上手に行かうとすると、其處へ野村秀彌は愛人のお芳を連れて出づ。（お芳はホワイトのポンネットに瀟洒な散歩服）

欽　哉。　おゝ、只今倉田君と一緒にお伺ひしやうと思つて居つたところです。

惣　吉。　何方かへ御散歩ですか。

秀　彌。　うむ、大分日が傾いて來たから、少し農園を見て歩かうと思つて、君達はもう見物をしたかね。

惣　吉。　いえ、餘り廣いものですから、まだ或一部分に過ぎません。

秀　彌。　うむ、そうか、どうだ流石に大仕掛だらう、米國の大農法は日本の農業に比較すると全くお話にならんね、小作人がコツ／＼草鞋穿きでやつて居るのとはわけが違ふ。

欽　哉。　いや、全く話に聞いて居つたよりも曠大なのには驚きました。

秀　彌。　ふうむ、矢張り大規模な事業は見ただけでも壯快だよ。かうして歐洲各國を廻つて來ると、迚も日本へ歸るのは厭になつて了ふねえ。

惣　吉。　それでも、あなたは巴里へゐらつしやるまで、オルレアンの都市なぞでは孝りに早く日本へ歸りたいと、口癖のやうに仰有つたぢやありませんか。

秀　彌。　うむ、あの時は、まゝアさうだつたがね、巴里へ行つてすつかり元氣恢服したよ。

惣　吉。　あはゝゝゝあなたのホームシックを慰藉するに充分な悅樂が巴里の都市には落ちて居りましたからね。

お　芳。　（この時始めて惣吉の前に出でゝあら倉田さんは相變らず口が惡いわねえ。覺えてゐらつしやい！

（お芳は妖艶な視線で惣吉らしく睨むようにする。

秀　彌。　まあ可い、この倉田はね、惡氣があつて毒口を云ふのぢやないのだから、氣にかけるには及

ばん、かう云ふ瓢輕な男なんだから、一々倉田のいふ事を氣に止めないで置いてお呉れ。

お　芳。あなたの愛を受けてゐる妾が、あなたの使用人に對して、氣を悪くする道理もありませんけれど、しかし歐洲へゐらつしたら少し氣を付けないと不可ませんわ、日本人が婦人を扱ふやうに、、、輕々しく女に接しては、迚も歐洲では交際が出來ないことよ。

惣　吉。僕は歐洲へ來ようが、北極へ行かうが、女なんかの靴の紐は結びたくない、僕はさうだ、マリネッチー主義だ、太陽を愛せよ、女を侮辱せよ！

お　芳。え、？

秀　彌。こら！（靴音をさせて制するやうに）い、加減にしないか！

惣　吉。はい。

秀　彌。藤田君、早く倉田と一緒に佐川さんに挨拶をして來て呉れ給へ。

欽　哉。はい、ぢや倉田君行かう。

惣　吉。は、參りませう、ぢや一寸行つて來ます。

二人は上手に行かうとする。ふと秀彌が思ひ付いたやうに、

秀　彌。あ、一寸待つて呉れ給へ。

惣　吉。は、何か御用ですか。

二人は立止る。

秀　彌。あのねえ、佐川さんに會つたならば、あのう、このお芳は日本を發つ時から連れて來た僕の妻だと話してあるのだから、その意りで、い、か。

惣　吉。そ、それは不可ませんよ。

秀　彌。どうして不可ない。

惣　吉。どうしてと仰有つても不可ません、假にあの方を奥樣としてもですな、お里が何處だとか、いつ結婚したなど、話でもひよツとして持上つて御覽なさい、大いに面喰ふぢやありませんか。

秀　彌。其處は巧く君の處世術で調子を合して呉れ、ばい、のだ。

惣　吉。幾ら處世術だつて、そんな調子は脱線しますよ。

秀　彌。君は主人の命令に從はんのか。

欽　哉。まあ可い〳〵、まあ御安心をなさい、僕に任してお置きなさい、さァ倉田君行かう。

欽哉は惣吉を促して上手にゆく。秀彌はキッとなつて後を見送る。

秀　彌。あの倉田は正直で勤勉家で面白い男だけど、巴里以來こいふものは、何かにつけて理屈を並

べる。

お　芳。　それは妾こいふものが、かうして御一緒に歩くやうになつたからですわ、妾も何んだか、あの倉田さんに凝こ見られるこ、胸の底まで見透されるやうな氣がして、氣味が悪くてしやうがありませんわ。

秀　彌。　あはゝゝゝ、そんな馬鹿な事はないよ、多寡が僕の從者だもの、吾々の生活や自由に對して容喙する權利はありやしない。

お　芳。　でもねえ、あの倉田さんは氣が輕くつて可い人なんですけご、妾には何んこなく無氣味ですわ、それにあの眼が凄いのね。

秀　彌。　そんなにあの倉田がお前に無氣味なのなら、解雇をしても可い。

お　芳。　そりや餘りに殘酷ですわ、あなたこいふ人がそんなに狹量に見られて不可ない事よ、それよりもねえあなた。

秀　彌。　えゝ

お芳は甘えるやうに寄添ふて、凝と秀彌の手を握る。この時、準之助は急ぎ足に下手より出でこの狀を見てハツと驚き、木影に忍ぶ。

お　芳。　あなたは、あのう、、、、。

秀　彌。　何んだね。

秀彌はお芳を抱えるやうにする。

お　芳。　あの復活祭の晩でしたわね、二人がすつかり昂奮して了つて、巴里の街を夜通し歩いた事がありましたわねえ。

秀　彌。　さうだつたね、おゝあの晩の月夜は忘れられないね、まるで美しい瑠璃のように輝いてゐた。

お　芳。　その月の光りを浴び乍ら戀に燃えきつた二人は、セーヌの河畔を夢のように歩きましたわねえ。

秀　彌。　さう、あの時櫻酒をお前の柔かな掌中に受けて飲んだッけな、、、、あの時の悦びは僕は一生忘れられないよ。

お　芳。　その時あなたが妾に仰有つた事を覺えてゐらつして。

秀　彌。　僕が云つた事。（ト考込む）

お　芳。　そうら御覽なさい、あなたはもう忘れて了つてゐらつしやるんだもの、そんな薄情な方は妾厭ひよ。内地へ御一緒に歸つたつて、きツこいゝ奥樣か何かあつて、妾は横濱の棧橋でお拂ひ箱にな

るかも知れないわ。

秀　彌。　冗談いつちや不可ない、そんな薄情な男ぢお前は思つてるのかい、僕のこの熱烈な戀を捧げてゐる事が、あのお前にはまだ分らないのかい。

お　芳。　それは分つてますけど、ねえもう一度考出して云つて御覽なさいよ。

秀　彌。　もう一度云つて見よ、、、、（少時考へて）さうだ〳〵、出來得る事ならばお前と僕の身體も魂も一つの肉體に結び付けて了ひたいつて？かうなんだらう。

お　芳。　おほ、、、、、さうですわ、その言葉がもう一度あなたのお口から聞きたかつたの。

秀　彌。　それで無理に云はしたのかい。

お　芳。　え、。

秀　彌。　あは、、、、、人が悪いね。

お　芳。　でもその心持を一生忘れずにゐらつして下さいな。

秀　彌。　忘れるものか、死んだつて忘れるものぢやない。

お　芳。　死んでもつて、死ぬ時はあなた一人で死ぬおつもり。

秀　彌。　うむ!?

お　芳。　（極めて靜かに濃艶に）妾も一緒に死んでよ、、、、。

とお芳は秀彌の胸に顔を埋めるようにする、秀彌は接吻をする、その木影より準之助躍り出づ

秀彌とお芳は驚いて身を離れる。

準之助。　おい！お芳。

お　芳。　（駭然として）え、。

準之助。　加奈陀汽船のホワイト●スターに乘組んでゐた小泉準之助だ!!

と準之助は叫んで帽子を脱つて地上に叩き付ける。

お芳は愈々屹驚するが、駭ろく胸を制えて漸く亂れた心を鎭める。

お　芳。　（態と平然として）お前はまあ何んですね、妾はお前なぞの勞働者風情に知己を持つような女ぢやないよ、はアンお前は何んですねえ、氣狂ひなんだね。

準之助。　（激怒の色を泛べて）何んだ！氣狂ひだと!?

ト叫んでお芳の前に行かうとすると、秀彌は慌てゝ準之助を遮切り。

秀　彌。　こら！何んだ貴樣は、、、これは僕の妻だよ。

準之助。　何んだ手前の妻だ、誰に斷つて女房にしやがつたんだい。

秀　彌。無禮な事を云ふな！おい、お芳、お前はこの男を知つてるのかい。

お　芳。いゝえ、一向に存じません。何か人違ひでもして居るのでせう。

準之助。何に！人違ひだ。

秀　彌。おい、人違ひをしては不可ん、お前はきつと氣でも狂つてるのだ。僕でも僕の妻でも、お前なごのような稼人なごに交際は勿論言葉を懸けられた記憶もないのだ。さあ早く行け！

準之助。行くも行かないも俺の勝手だ、手前こそ邪魔しやがるこ承知をしねえぞ！

秀　彌。何んだこ失敬な。

準之助。何を!!

こ準之助は秀彌を突退けて、お芳の手を取り、

準之助。さあ、貴樣は俺の面を忘れたのか！不貞腐女。

お　芳。、、、、!?

秀彌は驚いて双手を上げて、

秀　彌。おーい、早く誰か來て呉れい！

こ高聲に叫ぶ、下手上手より、どや〳〵こ農夫出づ。農夫達は準之助を見て、

二三の農夫。お、準公ぢやねえか。

他の農夫。全體どうしたこいふのだい。

これにて準之助お芳の手を離し、舞臺中央に面目無げに起つ。永い沈默。

秀　彌。いや、諸君どうも有難う、君達が來てくださるのがもう一足遲かつたら、この男は僕の妻に對して、どういふ危害暴行を加えたかも知れません、この男は確かに氣違ひです。

二三の農夫。何に、準公が氣が狂つたこ？

一同は驚いて準之助の顏を覗詰める。

準之助。いや、氣が狂つたかも知れん。（獨白して嘆息を吐く）

一同の裡より辰三はッカ〳〵こ準之助の傍に寄つて、

辰　三。おい、全體まあどうしたこ云ふんだい、手前が氣違ひにならう道理もなし、何か深い仔細があるなら俺達に打明けねえ、なあかうしてお互に日本を離れて稼ぎに來てるりや、皆なが力になり合ふのが人情だ、なあ同胞シッカリして呉んねえ。

ト準之助を勞る。準之助は無言のまゝ感慨無量――遂にハラハラこ熱涙を流す。

辰　三。おい手前泣いてるぢやねえか、おい、しつかりしろよ、しつかり！

準之助。　、、、、!?

辰　三。　なあ、平素から愚痴一つもいつた事のねえ男が、この大勢のなかで涙を流すのは、よく〳〵辛抱の出來ねえ事情があつての事だらう、お前の涙は矢張り俺達の涙も同じ事だ。なあ打明けて呉んねえ、お互に苦樂を共にするのが日本人同仕の交誼ぢやねえか。

準之助。　おゝ、よく云つて呉れた。

準之助は緊かと辰三の手を握緊める。其の時上手より園主佐川慶治出づ。

その姿を見て、出稼人は一様に顔を見合はせつゝ、

農夫の一。　おゝ日那だ。

農夫の二。　丁度いゝところだつた。

ト捨臺詞しつゝ遙か下手に退つて居並び、地に跪づいて、會釋をする、慶治は鷹揚に一同を見遣つて、

慶　治。　何か騒々しいようだつたが、どうかしたのか。

農夫一同。　へえ。（ト叩頭する）

秀　彌。　おゝ佐川さん、何んですこの男が僕の妻に向つて怪しからぬ振舞をいたしましたので、己む

を得ずこの人達の應援を仰いだわけです。

慶　治。　何に、この男が怪しからぬ振舞をする。

ト慶治はぢつと準之助に眼をそゝぐ。

秀　彌。　はい、實に無禮な眞似をいたしますので、、、、、多分氣違ひだらうこは思ひますが。

慶　治。　ふゝむ、（準之助に向ひ）お前は小泉さかいつた男だな。

準之助。　へえ、小泉準之助で御座います。

慶　治。　全體どうしたのぢやな。

準之助。　（地に伏して）へえ、まだ時間中にも關らず、お騒がせ申しやして、何共申譯もございませんが平に御勘辨を願ひます。

慶　治。　いや、そんな事はまあ可いとして全體どうしたのぢや、この御婦人は此處にゐらつしやる野村さんの奥樣ぢや、その方にお前は何か用事でもあつたのか。

準之助。　はゝゝい、何共面目次第も御座いません。（ト涙を啜る）

慶　治。　唯、謝罪つて居つてはわからぬ、うむ、お前はこの方を以前から知つて居るのか

秀　彌。　いや、佐川さん、この男が僕の妻を以前に知らう筈がありません、現に妻も知らんと申して

居るのですから。

慶　治。　ふうむ、不思議な話ぢや喃、小泉默つて居つては分らんぢやないか。有體に云え！

準之助。　はゝゝゝい。

慶　治。　この奥樣に用があるなら、その事情に據つてはまた取計つてやらんでもない。

準之助。　はゝゝゝい。

準之助苦悶の狀、辰三少し出で、

辰　三。　日那樣、横合から餘計な事を申上げますやうですが、この小泉は先刻から泣いてゐるやうなわけですから、餘程何か深いわけがあるに違ひ御座いませんです。

慶　治。　お前達は默つてゐるが可い。

辰　三。　へえい。

慶　治。　まだ時間中ぢやないか、早く彼方へ行つて規定の仕事をせんか！

辰　三。　へえ、何共相濟みやせん。

一　同。　へい〳〵。

辰　三。　ぢや準公、俺ら農場へ行くからしつかりやんねえな。日那の前に遠慮するにや當らねえから

なあ。

喜代松。　また都合によつちや俺達が力を藉すから安心しろよ。

慶　治。　こら、早く行かんか！

一　同。　へい、御免ください。

農夫一同叮嚀に會釋をして去る。

慶　治。　さあ、小泉何か話があるなら何事も包まずに話すがいゝ。

準之助。　へえ、有難う存じます。どうもお騷がせ申して申譯も御座いません、私は決して氣も何も狂つちや居りません。日那樣これは私が一生のお願ひで御座います、どうか十分か二十分の間、こちらの奥樣と二人限りで話をさして戴き度う存じます。そりや成程こちらの奥樣にしては私のやうなものはえゝ御存じのある筈も御座いませんが――申上げるにも申上げられない或る事情の爲に、私から奥樣に是非共お話をいたさなくてはならぬ事が御座います、それは私の一生に取りましては一番大切な事で、その話をしたいばッかりに、私は日那樣の許でまあ面倒を見て戴いて、今日まで一生懸命に働いて居つたので御座います。決して亂暴な眞似などはいたしません、先刻は奥樣のお姿を見て餘りの嬉しさに、心にもない失禮な事を申上げました。ホンの十分間ほどでよろしう御座いますから、私が

話をするだけの時間をお許しを願ひ度う存じます、日那様！これは私が一生のお願ひで御座います。

慶　治。　うむ、そりや話をする位の事は容易い事だらうが（少時考へて）秀彌さん。

秀　彌。　はい。

慶　治。　この男は俺の農園に來て彼是四年にもなるが、唯の一度も不都合があつた事なく、洵に實直に働いて、出稼人のうちでも模範と目されて居るものぢやが、この男に限つて誓つた言葉を違へるような男でないといふ事は俺が保證をします、その男がかうして泣いてまで訴える事ぢやから、餘程何か深い事情があつて奥様にお頼み申したい事があるのかも知れん、兎に角俺が保證をしますから、この男の頼みを聞容れてやつてくださらんか。

秀　彌。　そりや話をさせる位の事は雑作もない事です、先刻は餘りに態度が氣違染みた遣り方ですから、僕もつい腹を立てたのですが、、、、（お芳に向ひ）ねえ、お前にこの男が話したい事があるさうだが、訊く訊かないはお前の自由にある事だから、どうするねえ。

お　芳。　はい、折角佐川御老人のお言葉添もある事ですし、それに何か頼み事といふ話でございますから、それを頭から聞かないと申すのも、何んだか德に缺けたようにも思はれますから、兎に角一通り話だけは聞いてやる事にいたしませう。

秀　彌。　ああさうか、ぢや聞いてやるが可い、多分何んだらう、お前の噂でも聞いて居つて、内地に女房でも殘して居つて、それの保護でも頼みたいとでも云ふのだらう。

お　芳。　えゝ、まあそんな事で御座いませうよ。

慶　治。　いや、聞いてやつてくださるか、それは忝けない、それぢや小泉、話したいと思ふ事をお話しをするがいゝ。

準之助。　へえ、どうも有難う御座います。

慶　治。　それぢや、野村さん、少し農園の作業でも御覽ください、内地へ歸られてお父上様への土產話ぢや、あはゝゝゝ。

秀　彌。　は、お供をいたしませう、それぢやお芳。

お　芳。　はい。

秀　彌。　佐川さんと御一緒に農園を見て來るから、話はなるたけ簡單に聞くがいゝよ。

お　芳。　はい、畏りました。

慶　治。　それぢ一寸行つて來ます。

お　芳。　御免遊ばせ。

慶治。あのう、藤田さんも倉田さんもこれから一氣に取上げる馬鈴薯の收穫を見に、向うの道から廻つて行かれた筈ぢや、多分會ふだらう。

秀彌。は、さうですか。

ト二人は語り乍ら下手に入る。舞臺暫時沈靜。やゝ夕陽輝やく。準之助は上手を見込み、お芳は下手を見送つて、傾て二人は顏を合す。

準之助。お芳。

お芳。準さん！

準之助。、、、、！

二人は少時沈默の後、お芳は前後に注意しつゝ、

お芳。お前さん、腹も立つだらうが、先刻の事はごうぞ勘忍してお呉れな。

準之助。だが、俺は何から話していゝか、、、、、胸がいつぱいだ、大抵こんなことだこは思つてるたのだ。

準之助嘆息を洩らす、お芳は眸面惡さうに俯向く。舞臺再び沈靜。

お芳。妾だつて、かうしてお前さんに逢つて何から言譯をして可いか、、、、（云ひ澁む）

準之助。まさか俺がサクラメントの農園に働いてるやうこは思はなかつたらう。

お芳。、、、、!?

準之助。もうお前の言譯なんぞ今更聞いた處が始まらない、サンデーゴーであれ位堅い約束をして別れてから後の、お前の樣子は聞かなくつても、大概分つてるるさ。

お芳。だけど、準さん、妾がいまかうなつてるるに就ては深い仔細のある事だから、どうか腹も立たうけれど一通り聞いてお呉れよ。

準之助。その事情を聞けば俺この約束を履行するこいふのかい！（ト怒鳴り付けてキツとなり）おい、お芳！貴樣は俺を踏台にしやがつたのだな！

お芳。まあ、（慌てて打消すように）決して、決して、そゝそんな事はありやしない事よ。

準之助。（次第に昂奮の狀を現はして）貴樣が密航婦の群に這入つて、ホワイト・スターの船底に潛込んだ時の事を忘れたのかい、息も通はぬような、あの眞黑な石炭倉庫のながで、空腹じい思ひもせず太陽の光りも受け、無事に目的地に上る事が出來たのは誰のお高底だこ思つてるるのだ。

お芳。そりやあの時のお前さんの親切は、妾死んでも忘れやしないわ。ですから妾もお前さんの自由になつたのぢやないか。

準之助。（思はず お芳の顔を視遣つて）それぢやあの時の事は、最早あれで報償がつけてあるこいふのか、この賣色めー（ト叫ぶ）

お芳。えゝー

お芳は準之助の叫聲に流石に青やかされ、思はず四邊に氣を配つて、準之助の胸にすがるようにして、

お芳。まあ、そんな人聞の悪い事を云はずと、腹も立たうけれど、心を鎮めて妾の話も聞いてお呉れよ。

準之助。お芳ー俺はな、あの時は自分の生命を的にして、貴樣の身を庇護つてやつたのだ。船乘生活の長い航海のあいだには、そりや海外へ稼ぎに行く密航婦は幾百人潜込んで來たか分りやしない。だが大概は天草か房洲玉の、内地にゐちや幾ら女日旱だつて手もつけられねえ奴等ばかりさ、そんな奴は荒くれた水夫ごもに、散々責弄さまれて一生外國の土に化るのだ。その揚句俺はお前を見た時に、や、慓然こするほどこの世の中こいふこころが淺猿しくなつた。あゝあ是程の器量を有つた女がごうして密航婦なごになつて海外へ渡らんけりやならねえのかこ、自分が親に捨られた事なごは忘れて了つて、お前を其程までに墮落させたこの世のなかが憎らしくなつた。

お芳。（しんみりさした語調で）えゝ、そりや妾だつて幼さい時から苦しめられた世の中の讐を取りたいばつかりに、自分から進んで危い橋を渡つたのですもの、お前さんでも妾でも同じような月日の下に生れて來たんですわねえ。

準之助。さうだ、俺がお前に挑んだのもそこにあつたのだ。強ちに獸物みてえな欲望を遂げるだけの望みぢやなかつたのだ。ごうせ一生を送るなら、年中潮水の滓を洗つたり、船底の蝕びを落したりする水夫の足を洗つて、お互に不幸な運命を以て生れて來たお前こ俺こが、せめては人間らしい氣持になつて、のごかな春のような一生を送つたら、ごんなに樂しからうこ、丁度汽船がミッドウエーの沖に差蒐つてゐた時だつた、俺は自分が歩いて來た道を回顧つて見て、つくゞく淺間しくなつたのだ。つまり今迄の事を捨てゝ了つて新しく生れ變りたかつたのだ。赤道直下を通る時、お前を氷庫へ連れて行つたのも、食料品を盜んでお前に與えたのも、それもこれも規則の嚴しい汽船のなかでは生命がけの仕事だ。生命を投出してまでも俺はお前こいふ力強いものを握つて、俺は眞人間の世界に這入りたかつたのだ。

お芳。え、そりやもうお前さんの心情はよく解つてゐるよ。しかし準さん。

準之助。（お芳の顔を覗き込むようにして）いんや、まだ云ふ事があるぞー（お芳の言葉を遮ぎるように）

お前はサンデーゴーに上陸する時、きつと俺と夫婦になるから、五千弗の金を貯めて呉れ、その金が出來たら、何時でも一緒にならうと云つたな、俺は貴樣に瞞されるとは知らず、その言葉を信じて好きな酒も煙草も、女も博奕も廢めて了つて、一生懸命に働いて、今ぢや四千六百弗の貯金も出來た。もう後四百弗のことだ。そればかりぢやねえ、金ばかり出來たところが、少しは敎育がなくちやしようがあるめえと思つて、日曜毎にや敎會へ行つて說敎も聽き、幼稚園の生徒と一緒になつて書物も習つた。そのお高庇で碌に手紙も讀めなかつた俺だけど、今日ぢやどうにか書物の一冊も讀めるようになつた、これも皆なお前と夫婦になりたい一心にやつたんだぞ。

お　芳。（涙ぐんで）準さん、どうか勘忍してお呉れ、妾や濟まなかつた。しかし妾は決してお前さんとの約束を忘れたわけでもなく、瞞したと云ふわけでもない、だがね、物心のつく時分に僅かな金の爲に田舍酌婦に賣られて、それから方々漂泊いてどゝの結局は密航婦にまでなつて海外へ出稼ぎをする迄にや、そりや尋常普通の苦勞ぢやなかつたのよ。現在吾が子をお金の爲に賣る親も、賣られた妾がかうして人の慰み物になつてゐるのも、皆なお金の爲なんだもの、金が敵の世の中とは妾や幼さい時からお腹に泌みきつて、何んでもいゝから男を片端から瞞して、一日でも榮華な生活をして死にたいと子供の時から心願を籠めてゐたのです。その裡にこれと目星をつけたのが先刻の野村の若日那さ、

巴里で散々妾の手管に乘つて、是非内地へ連れて歸つて結婚をするとまで云つて、今ぢや有頂天になつて、あの通りの有樣、どうやら内地で相當な金持だといふ事だから、まあ買被つたところが滿更でもあるまい、これから日本へ歸つて、あの男の奥樣になつて、散々我儘をして、是迄の入合せをする料見なのさ、そして親や一人の弟にせめては人間らしい生計をさしてやりたいのだから、どうか後生だからその目的を遂げるまで妾の自由にさしてお呉れよ。例ひ三日間でも女の意地を立てた曉には、きつと妾はお前さんの云ふ通りになるから、それ迄のあいだ一旦お前さんに上げた妾の生命だけど、もう一度妾に預けて置いてお呉れでないか。

準之助。（激しく悶えて）お芳！（ト叫んで起ちお芳の手を握る）

お　芳。お前さんの腹立ちは分つてゐるよ。（お芳は奥奮した準之助の顏を怖る〳〵凝視する）

準之助。お前がさう思ふのは無理もねえが、しかし人間は金ばかりに生きて行けるものぢやねえぞ！お前からさういはれて、、、、これが昔しの俺だつたら、お前の生命はこの寸刻に俺の右手に奪ひ、左手を翳して思ふ存分貴樣を弄んでもやらうがな、、、、現在の俺にや迚も出來ねえ！あゝあ心の怒りは昔しの己れに還つても、そんな事をしちや神樣に濟まぬ！。

準之助はお芳を突離すようにする、お芳はヨロ〳〵と蹌踉めく、ハツとして再び準之助の傍に

寄淫ふさ、準之助は悲痛な聲を顫はして、

準之助。 尤も俺はあのホワイト・スターでお前こいふものに逢はなかつたら、やつぱり悪い事ばかりして、迚も今日まで生命はなかつたかも知れねえ。それを思ふと、お前も俺の恩人だ。いやお前こいふもの、動機に依つて、俺は人間の眞實こいふ事を與えられたのだ。寧ろお前のいまの自ら欺かれた心が不愍さうでならない。幾ら金滿家の奥樣になつても眞實を缺いた虚偽の結婚はいつか破れる時が來るのだ、今ま醒めても遲くはない、この上に世の中に罪を作らずに、もう一度心を取直して信仰のある眞實の生涯に這入つたらごうだ。いかに貧しい生活をしても心に憂りのないのが一番幸福だぞ

—眞實の懺悔は最上の幸福だこ神樣は仰有つてるらつしやる。

お芳。 え、、お前さんのいふ事はちつこも解らないわ、信仰つて？全體ごんなもの。

準之助。 (情なさうに) いや、今のお前には迚も解るまい、涙を以てパンを得たる人、涙を以て幾夜かを泣明した人間でなくちや、眞の信仰は得られないよ。

お芳。 え、それやお前さんの云ふ信仰こやらが妾の胸に響いた時には、お前さんこ一緒になつて樂しく暮しませう、それ迄は例ひ虚偽の生活にもせよ、暫時妾の思ふ通りにさせてお呉れな。

準之助。 何故お前の心には神樣が宿らぬのだらう。

ト準之助は緊かこお芳の手を握る。

お芳。 妾の胸には神も佛もないんです、男こいふ男を呪つて〳〵、自分の肥料にするばかりでさア ねえ。

準之助。 ぢやお前は心から悪魔になつたのか。

お芳。 え、、みんな世の中がこんな風にさして了つたんですもの。(ト下手を見込んで) あ、、もう野村さんや佐川さんがこつちへやつて來る、ぢや妾行つてよ。離して——

ト嘆息をつく

準之助。 あ、あ、もう用はない行け。

お芳。 ぢや、準さん、御機嫌よう。

お芳は下手に行きかける。ト お芳はふりかへる、準之助は苦悶の狀あつて、

準之助。 (腹の底より) お芳！

お芳。 え、。

準之助はぐつここお芳を戚んで、

準之助。 それぢやお前はごうあつても俺こ一緒になるのは厭なのだな。

お　芳。　えゝ女の意地を立てるまではねえ。

準之助。　これほど言つても矢張りお前は虚榮に生きたいのか！

お　芳。　自分の好きな男と一緒になるよりも、それが妾の心願だつたのですもの。

準之助。　よし！それぢやお前の目的を果した曉にはきつと生命は貰ひに行くぞ。

お　芳。　えゝ、可い事よ、その時は妾の身體も魂もきつとお前さんにお返しするわ。

準之助。　うん可し。ぢやそれ迄もう一度俺はお前に瞞されてやらう。

お　芳。　えゝ、ぢや左樣なら。

お芳去る、起る夕日木間を洩れて射す。準之助腕組をして突起つたまゝ、凝とお芳を見送る。舞臺森沈——哀調漲る。準之助は一足二足ふら〳〵と下手に行きかけて、つとポプラの木影に身を支え。

準之助。　（悲痛なる語調にて）暗黒より生れて暗黒に終る人の一生のあいだには、時の運命はこの人間を何處まで弄ぶのだらう！ひと度眞人間の血汐を潤がれたこの俺は、再び惡魔となつて祖國の土を踏にやならねえか（漸次昂奮して）あゝあ呪しい心の叫び！怨えに怨えし惱みも嘆きも、、、（決然さし）うむ！復讐の焔は、この全身に物怪じみた餘響のやうに響いて來た!!　永年おれを眞人間に錬えて與

れた北米の大晨も、もうおさらばだ！

讃美歌淋しく聞ゆ。

ハラハラと木の葉散る。

夕陽あかあかと輝く。

梵鐘しづかに響く。

準之助は呪しげに佇ずみ、手にせる帽子をパタリと落す。

—（靜かに幕）—

第二幕　野村家觀櫻會

人物

一野村紡績社主　野村源兵衛
一源兵衛の妻　濱子
一仲　秀彌
一濱子の兄　志方重三郎
一重三郎の娘　嘉代子
一重役　細川滿
一滿の娘　初枝
一社員　藤田欽哉
一同　倉田惣吉
一同　橋本啓三
一野村家小間使　中田お花
一準之助の父　中田熊二郎
一千住の熊二郎の弟分　島田民治
一河童の民　小泉準之助
一　山崎お芳
一藝者　新大阪家三代治
一お芳の母　山崎喜久
一お芳の弟　山崎一彦

その他、來賓、藝者、職工。

野村家本邸の庭園。

無量奥深く築山の遠見、一二ケ所に四阿を見せ、其の邊一帶は櫻の植込み、花ざかりの狀よろしく。

木立のあいだには適所に緋の毛布を敷き、中央正面に幔幕を張る。其の前に床几二三臺置くこと。

上手寄にビヤホール、すし、下手におでんの模擬店を設く。樹の木々には「野村紡績合名社」と

書いた小旗を吊しておく。

華やかなる樂隊の音色、燃立つように起つて幕開くと。

觀櫻に招待されし來賓、假裝の者或はおどけ姿——思ひ〳〵の服裝千鳥足にて、藝者と打交りて何れも捨臺詞にて陽氣に樂しく深川を踊る、段々興に乘じて亂調子になる頃、上手より野村源兵衛、及び夫人濱子出づ。夫婦は笑ひ乍ら暫時この狀を見る。

源兵衛。あはゝゝゝ、皆ななか〳〵達者なもんぢやの。

濱　子。おほゝゝゝ、本當にお上手ですこと。

來客乙。やあ、こりや日那樣ですか、イヤごうも。

來客甲。おや、社長樣ですか。

ト野村夫妻に氣附きたる二三の者は鉢卷を取りつつ捨臺詞にて、やや恐縮の體。他の者も氣付いて踊り止む。

源兵衛。いや、構はずこ大いにやつて下さい、今日は一年に一度の花見ぢや、遠慮なく遊んで貰はんこ困る。

來客甲。ごうも恐れ入ります、お高庇樣でこんな愉快な事は御座いません、持命が十年も二十年も延

びますですよ。

來客乙。先刻から、もう遠慮なく頂戴いたして居りますので、もうそのへゞのれけなんですよ。日那！

源兵衛。あ、それが可い〳〵、十二分に遊んで下さい、遠慮をしちや不可ん！

來客丙。はい、有難う存じます。

濱　子。本當に妾共に遠慮は要りませんわ、今日は無禮講ですもの。

來客一同。へぇ〳〵有難う存じますで。

この時、笛太鼓三味線の音俄かに起ると、一同は聞耳を立て、

來客甲。おやア。

來客乙。ありや何んだらう。

濱　子。え、あれは今日の餘興に、あちらでよし町藝者の鎗踊がこれから始るんですよ。

來客丙。はア、左樣ですか、そいつは結構！

來客甲。俺らの踊こは段が違ふよ、是非見やう。

濱　子。え、見てるらつしやい、そりや綺麗ですよ、それにまだ新派のお芝居もありますし、松井源水の獨樂まはしも引續いてあるのださうですから。

來客丙。そうですかい、そりや面白いこツた。

來客乙。さあ早く見に行かう。

ト一同拾臺詞にて野村夫妻に會釋をして上手に退場。

濠　子。まあ、あんなに皆なが樂しさうに遊んで呉れますこ、花見を開いた甲斐か御座いますわねえ。

源兵衛。うん、職工なごは年に一度の今日が無上の快樂こして、平素は眞黑になつて働いて居るのだ、それを思ふこ勞働者こいふ者は無邪氣なものさ。

濠　子。本當にさうて御座いますわね、何處かの會社ではお花見をしなかつた爲に職工がストライキを起したこか、この間新聞に出て居つたぢや御座いませんか。

源兵衛。うむ、そんな事があつたようぢやな、瓦一枚惜しんで棟木を腐らすの醫へて僅かな金を吝むこ却つて大きな損を招くものぢや、兎に角無智な人間を多く使用して行く商賣ほこ厄介な氣骨の折れるものはないよ。

濠　子。本當にさうですわね、しかしあなた。

源兵衛。うむ。

濠　子。あの、秀彌が居りませぬようですが、どうしたので御座いませう。

源兵衛。おゝ、さうぢやつた、一向姿が見えぬようだが、また何んぢやないか、あの女の許へでも行つて居るのぢやないか。

濠　子。まさか、今日はそんな事も御座いますまい、他の重役方も今日の花見だけは秀彌の歸朝を祝ひかたゞ〳〵充分景氣を添えて、華美にしやうこ仰有つた事も承知をして居る筈で御座いますから。

源兵衛。ふうむ、ぢやまだ自分の書齋に這入つて居るのだらう、秀彌も今年からは會社の副社長になるのぢやから、重役の機嫌を損ふような事もあるまいよ。

濠　子。でも、何處の娘か知りませんが、佛蘭西からあんな女を連れて歸つて本當に困つて了ひますわねえ、洋行中に女が出來て、一緒に歸つたなご、噂が擴るこ、第一細川樣に對してだつて面目がありませんからねえ、それが一番心配でなりませんよ。あなたから一度よく訊糺して戴かなければ、、、、迚も妾共の申す事は、馬の耳に風で、聞き容れもいたしません。

源兵衛。一つ安心をすれば、また一つ苦勞がふえる、こんなここなら洋行なごさせるんぢやなかつた。

濠　子。本當ですわ、藤田さんもついて居つて餘りだこ怨んでるますわ。

源兵衛。いや、他人は恨まぬがよい、やつぱり一人子で、甘く育てた俺らの罪だ。

上手より野村家小間使お花（實は準之助の妹）四邊を吟しつゝ出づ。

お花。　お、、日那様こちらにお出でゞ御座いましたか。

源兵衛。　う、む。

漾子。　お、、お花か、陽氣の加減であんまりぼかぼか逆上るようだつたから一寸失禮をして居るのだが、何か用事でも。

お花。　はい、あのう重役様方があちらで大變に若日那をお探し遊ばしてゐらつしやいますので、妾は方々お探し申して居るので御座います。

漾子。　おや、さうだつたかい、妾も實は秀彌の姿が見えないので、氣を揉んで居る處なんだが、（源兵衛に向ひ）ねえ、あなた、ごうしたのでせう、何處へも出かけた樣子はありませんでしたのに。

源兵衛。　うむ、こいつて何處も探しようもないが、ちえつ何をして居るのかな。

お花。　ごう御挨拶を申して置きませう。

漾子。　まあお待ちよ、今日こいふ日に他へ參つて居りませんこも云へないし。

其の時、下手より社員橋本啓三急ぎ足に出づ。

啓三。　お、、皆さん、こちらで御座いましたか。

源兵衛。　お、、橋本、い、處へ來た。

啓三。　はい、何か御用事でも、、、、。

漾子。　あのう、秀彌が見えないのですが、ごうしたか知りませんかね。

啓三。　はい、私は今日この會場係りになつて居るものですから、朝早くから忙しくして居りますものですから、若日那樣は一向見受けませんでしたが。

漾子。　まあ、さうですか、重役の方が大層先刻からお待ちになつて居られるのだが、妾達もつひ秀彌の姿を見ないものですから、何んこ御挨拶をしていゝか、途方に暮れて居るのです。

啓三。　そいつは困りましたね。

源兵衛。　あ、橋本。

啓三。　はい。

源兵衛。　まさか、秀彌は今日に限つて宅に居らぬこいふような事はなからうな。

啓三。　さあ、そんな事も御座いますまいが。

其の時、上手に「おゝー秀彌君は何處だ〳〵」と群衆の叫聲がする。

漾子。　お、、皆さんが秀彌を呼んでゐらつしやる。

お花。　まあ、奥樣ごういたしたもので御座いませう。

源兵衛。あゝ、詮方がない。橋本。

啓　三。はい。

源兵衛。皆さんに、秀彌は些しのつぴきならぬ用事があるので、一寸外出をいたしましたが、もう追つけ歸りますこと、一寸執なして置いて呉れ。

啓　三。はい、畏りました。

ト啓三急いで上手に入る。

漾　子。ああ、お花。

お　花。はい。

漾　子。お前もあちらへ行つて、お顔刷染の方にはよく御挨拶をして置いてお呉れ、姿達も後から直ぐに行きますから。

お　花。はい、畏りました、では御免遊ばせ。

ト花會釋をして上手に退場。ト入違ひに上手より志方重三郎（漾子の兄）やや酒氣を帶びて出づ。

重三郎。やあ、野村君！夫婦でこんなところへ逃込んぢやつては吾輩一人で、あの厄介な重役連の守

は迚もやりきれないねえ。

漾　子。まあ、兄さん濟みません。何ね、逃込んで居るわけではありませんが、餘り先刻からぼか〳〵逆上せて仕樣がないものでしたから此方に避けて居つたのですよ。

源兵衛。あはゝゝゝ、それに俺は一向酒がやれん方で、かう云ふ席へ來るさいつも閉口をするのぢや、まア、酒豪のあんたに酒の相手を任して失敬して居つた。

重三郎。いや、酒の相手だけなら何十人でも相手にするが、あの口八釜し屋の細川ださか、ほじくり屋の小西の爺さんなぞゝ來たら、迚も煩さくて機嫌が取つて居れんよ。

源兵衛。あはゝゝゝ、それはさうだらう、あの二人に懸つちや全くやりきれんよ。

漾　子。でも會社のお爲にや、なくてならない方達ですから、粗末には出來ませんね。

重三郎。時に、漾子。

漾　子。はい。

重三郎。秀彌は顔を見せないようだがごうしたのぢや。

漾　子。はい、それがね、兄さん只今良人（たく）ども心配をして居る處なんですが、實は何處へ參つたのですか、邸には見えないんですの。

重三郎。　え、ゐない。

濠　子。　え、さうなんですよ。

重三郎。　ごうも呑氣千萬な話ぢやないか、秀彌を今度副社長にする事だつて、今日あたり重役の機嫌を取つて置くと大變に都合がいゝのだが。

濠　子。　え、さう思つて妾も心配をして居るんですの。

重三郎。　お前が少ししつかりせんと不可んな、うゝん。

濠　子。　えゝ。

重三郎。　大體、洋行をさせるのも俺は餘り賛成はしなかつたのだ。近頃は學校を出ると直ぐ洋行をするのは、一種の流行風のやうになつて居るが、あんな青二才が洋行して來たつて、そりや碌な事は覺えて來やしないよ、唯生意地になるばかりぢや。

濠　子。　でもさう兄さんのやうに一概にいふものぢやありませんよ。矢張り百聞一見に若かずとか申して何か覺えて來ますからね。

重三郎。　それが不可んのぢや、お前がその料見だから、秀彌が漸次生意氣になるばかりだ。外國へ一寸小便をしに行つた位で、何を覺えて來るものかい。

源兵衛。　まあ可い〳〵、兎角お濠は理屈が强くつて不可ん。

濠　子。　だつて兄さんの仰有る事は餘り極端なんですもの。御自分の娘の事も考へて御覽なさい、嘉代子だつて隨分生意氣でお轉婆ぢやありませんか。

源兵衛。　まあ可いといふのに、これも皆ながかうして身内の爲を思ふから兄さんもお前に吐言が出るのぢや。

重三郎。　さうですとも、俺は全くあの秀彌の事は、自分の子供よりも大切に思つて居るんでしてな、可愛いと思えばこそ云ひたくもない吐言もいふのぢや、濠子はごうも殁くなられたお母さんに似て理屈が强くて困る。

濠　子。　まあ、今度は妾の方へお鉢が廻つて來ましたねえ、危ない〳〵。

三人一同。　はゝゝゝ、

ト苦笑する、重三郎令壌志方嘉代子（快活な女）上手より歩り出づ。

嘉代子。　まあ、お父さんも伯父さんも叔母さんも、皆なこちらへ逃げちやつたのねえ、何を秘密會議してらつしやるの。

三人顔を見合して苦笑する。

重三郎。　こら、嘉代、何をいふのぢや。少し言葉を慎しまんか。

嘉代子。　はい、でもお父さん、秘密主義は不可ない事よ、何んでも開放主義でないと、直ぐ暗闘を生じますからねえ、お父さんなどは、二言目には嘉代には内密だ。聞かさぬが可いつて、お母さんとも、いつもコソ〳〵話をしてゐらつしやるでせう、あの心得が第一悪いわ、不愉快で、、、、。

重三郎。　馬鹿な事をいふな！

漾　子。　おほ、、、、嘉代ちやん、しつかりお父さんの油を取つてお上げなさい、叔母さんは先刻から隨分お父さんに苛められて居つた處ですから。

嘉代子。　あら、さうですの、叔母さんが――お父さんに。

漾　子。　えい。

嘉代子。　意久地がないのねえ。

漾　子。　まあ。

嘉代子。　お父さんは家にゐらつしやると、いつでもお母さんに遣り込められてばかりゐらつしやるのに、外へ出ると本當に難しい顔ばかりして、姿本當に可笑しくなるわ。

漾　子。　おほ、、、、。

源兵衛。　嘉代にかゝつちや、お父さんも叶はんな、あは、、、。

嘉代子。　でも叔父さん本當なんですもの。あ！お喋舌をして居つて、すつかり忘れて了つた、あの皆さんがゐらつしやいつて叔父さんにもお父さんにも。

源兵衛。　あ、さうか。

重三郎。　直ぐ參りますと申上げて置いて呉れ。しかし、嘉代。

嘉代子。　はい。

重三郎。　誰の前でも餘りお喋舌をするのぢやないぞ、少し女らしく慎んで居らんと不可ん！

嘉代子。　はい〳〵。

其の時下手より野村秀彌並びに藤田欽哉出づ。

源兵衛。　お、秀彌。

漾　子。　まあ、お前何處へ行つて居つたのです。そりや皆さんがお前をお待兼なんです。

秀　彌。　おや、さうでしたか、どうも濟みませんでした。（重三郎に向ひ）こりや叔父さん、どうも今日は御苦勞樣です。

重三郎。　うむ、今日らは家に居つてくれんと困るな。

秀　彌。　いや本當に申譯もありません、一寸友人の處へ參つて居つたものですから。

源兵衛。　藤田君も一緒だつたのかな。

欽　哉。　いや、私は今日工場の方に是非行かねばならぬ用事があつたものですから、その方へ參つて居つて遲くなりました。

源兵衛。　さうか、そりや御苦勞ぢやつた。

欽　哉。　ごういたしまして。

嘉代子秀彌の前に出で、

嘉代子。　あなた、妾を忘れてゐらつしやるのね、覺えてゐらつしやい。

秀　彌。　おゝ、嘉代ちやん、さうごうも皮肉に申されちや恐縮しますねえ、あはゝゝゝ、あなたのやうな美しい令孃を忘れて堪るものですか。

嘉代子。　西洋では婦人が第一位てせう。洋行なすつた方にも似合ない。

秀　彌。　あはゝゝゝ、こりやごうも失禮いたしました。嘉代ちやんはすつかりハイカラになりましたねえ、さア握手をしませう。

ト嘉代子と握手をする。

嘉代子。　藤田さんも。

欽　哉。　えこりや恐縮々々。

ト欽哉とも握手する。

この時上手より重役細川滿は令孃初枝をつれて出づ、源兵衛夫妻はやや周章の體にて、

源兵衛。　おや、細川さんですか。

濠　子。　まあゐらつしやいませ、只今そちらへ參らうと存じて居りました處で。

滿。　いや〳〵、今日はなか〳〵盛大な事で結構。

重三郎以下一同は滿に叩頭をする。

源兵衛。　おい秀彌、細川さんが先刻から大變にお前をお探しになつて居られたのぢや。

秀　彌。　は、左樣ですか、（ト滿に向ひ）早速御挨拶に上る筈で御座いましたが一寸用事がありましたので失禮をいたしました。

滿。　いやごうして、實は洋行中の話もゆつくり聞かして貰ひたいし、それに何んぢや初枝も是非あちらの話を聞きたがつて居るのでな、今度ゆつくり遊びに來て貰ひたい。

秀　彌。　はッ、有難う存じます、初枝さん、ようお出で下さいましたね。

初　枝。　大層お賑やかな事で結構で御座いますわ、それにこちらのお庭には全く櫻が澤山に御座いますのでお羨しう思つて居りますの、（嘉代子に向ひ）ねえ嘉代子さん。

嘉代子。　え、本當に九段の櫻などよりはお立派なのですもの。

秀　彌。　はゝゝゝ、そんな事もありませんが、まァ昔しの大名屋敷の跡だつたさかいふので、こんなに庭が充分なのでせう。

滿。　あ、藤田さん。

欽　哉。　はい。

滿。　あんたも是非秀彌君と一緒に宅の方へ一度遊びに來て下さい、是非あちらの工場の具合なども承りたいからの。

欽　哉。　は、有難う存じます、その内是非お伺ひ申します。

滿。　うん、それに何んぢやこの初枝もな、あんた方が洋行中に秀彌君の妻に娶合せやうと野村さんとも約束をしたので。

欽　哉。　は、さうでしたか、それは結構な事です。

滿。　まァこれ迄は單に會社關係だつたが今後は一家も同樣親戚の間柄となるわけで、自然あんたにも倘一層親密に願はんけりやならぬ。

初枝はきまり惡げに俯向く。

欽　哉。　いや私こそ宜しくお願ひを申します。

嘉代子。　まあ、初枝さんお芽出度ございますこと、今迄はお友達でしたが、今後は姜さあなたさはやつぱり從兄弟同仕ですわね、仲良くしませうね。

初　枝。　え、姜こそ。

嘉代子。　ほんとうに秀彌さんはお仕合せですわ、學校を卒業遊ばすと洋行なすつて、お歸りになればお初枝さんのやうな美しいお方が奥樣にお決りになつてるらつしやるし全く幸福なお方ですわね。

秀　彌。　はゝゝゝ、人間の幸不幸などは、そんな事で決るものぢやありませんよ、あはゝゝゝ。

重三郎。　まあ、しかし秀彌などは幸福な頂上ぢや、お前の代になつてこの野村家は盛大にならうといふのぢやからな、今後はシツカリと働いて貰はんと困る、いゝかな。

秀　彌。　はい。

滿。　いやさうだとも〳〵、その爲に洋行までして來たのだから、今後の野村紡績の盛衰は全く秀彌さんの手腕次第による事ぢやシツカリ頼みますぞ。

秀彌。はい。

漾子。まあ、細川さんの仰有る通りですよ、今迄と違つて副社長となつて責任のある身體ですから ね、學生時代のやうな暢氣な事では困りますよ。

秀彌。はい。

滿。まァ今日は園遊會ぢや、あまり堅くるしい話をしても興を殺ぐぢやらう。さァあちらで皆さんと一緒に一つ祝盃を上げやうかな、のう、野村さん。

源兵衛。はい、さういふ事にお願ひ申しませう。

其の時上手にて激しく拍手の音起り、留太鼓賑ぎやかに響いて止む。

嘉代子。まァ賑やかだこと、初枝さん行つて御覽にならない。

初枝。は、お供をいたしませう。

漾子。大方第一回の餘興が濟んだのでせう。

嘉代子。叔母さんこの次は確にお芝居があるのでしたわね。

漾子。え、そうです。

嘉代子。まあ、嬉しい、さあ初枝さん參りませうよ。

滿。ぢや皆であちらへ行かう。

ト一同捨臺詞あつて上手に退場をする、同時に上手より模擬店係りの藝妓二人出づ。

藝妓甲。まあ、本當に綺麗だつたこと。

藝妓乙。本當にさうねえ、それおさだ姐さんの立唄がやつぱり可いわね、どうしてあんない、聲が出るかと思ふやうだわ。

藝妓甲。全くだわ、さァ又これからおでん屋の姐さんだ、迚も忙しくてやりきれないのね。

藝妓乙。そこへ行くとお汁粉の方は樂よ。あんまり食べる方がないし、酔つぱらひが來ないから。

藝妓甲。そこへ行くと妾の方はやりきれないわ。お花見は本當に叶はないわね、明日はまた荒川なんでせう、かう毎日だと全く厭になつちやうわ。

藝妓乙。本當ねえ、まあ詰方がないわ、お茶を引いて親方に苦い顏をされて居るよりは氣樂だわ。さアまた皆さんやつて來てよ。

ト藝妓は捨臺詞にて各自受持の模擬店に入る。

この時、野村秀彌君！萬歲！萬歲!!と叫聲起る。ト再び群衆出で千鳥足花唄にて何れも捨臺詞おでん屋に入るもの、ビヤホール、汁粉屋に入る者などありて、蓐りに喰ふ。但しおでん屋が

一等の繁昌なり。暫らく踊りさんざめいてゐる。

ト上手より惣吉並に欽哉疲れた表情にて出づ。

欽　哉。　ごうもかういふ日には吾々は忙しいばかりで全くたまらないね。

惣　吉。　ほんごうですよ藤田さん、それに僕は來賓係りこ來てゐるから餘計にたまらない、あゝすつかり草臥れちやつた、おいビールを呉れ。

藝妓乙。　はい〳〵只今。

欽　哉。　あ、僕も貰はう。

惣　吉。　都合二杯だ。

藝妓乙。　畏りました。

藝妓ビールを持つて來る。二人はそれを飲み乍ら、

欽　哉。　時に君、ごうも秀彌君の問題にも困つたな、あァして細川さんの令孃が妻君にきまつてゐるのだこするこ尚更あのウーマンの問題は早く解決をつけないこね。

惣　吉。　いや僕もその問題を心配して居るのですよ、だが若日那はあのウーマンには百二十度の米突を上げて居るのですからね、迚も僕たちが言つた處で承知をしやう筈もなし、全く男の甘いのも困りますな。

欽　哉。　あァまで夢中にならうこは思はなかつたが、ごうも驚いちやつた。

惣　吉。　だから僕がサクラメントで注意をしたのです。何んですぜ、こんなここが萬一細川さんの耳にでも這入つた日にはそれこそ野村さんこ細川さんこの仲にごんな事が起るかも知れませんからな。

欽　哉。　しかし洋行中に本人には無斷で妻君をきめて了つたこいふのも早計だが、得體の知れぬ女を連れて歸つても今日迄その解決をつけずに置くこいふのも、一つは野村さん夫婦の罪にもあるよ。

惣　吉。　そりや無論さうですがな、一人子こいふものには何處の人でも甘くなり易いですから、無理はないです。まだ志方さんの叔父さんが嚴格だから幾らかいゝやうなものゝあの叔父さんでもなかつた日には、若日那は何處まで我が儘に流れるかも知れませんよ、それに何んですぜ、若日那は今日の園遊會にあの女をば來賓にまぎらかして邸内へ呼ぶ算段をしてゐるんですぜ。

欽　哉。　え、あのお芳をかい。

惣　吉。　え、そうです。

欽　哉。　驚いたね、そいつは、、、、、なんの爲にそんな事をするんだらう。

惣　吉。　つまり自分の邸宅はこれだけ立派なもので、來賓もこれだけあるこいふ、要するに見得坊の結

果てすよ、そうして女の歓心を買ひたいのです。

欽　哉。　あはゝゝゝ、詰らない事だ、甘いにもほどがあるよ、萬一そんな事をしてそれが爆露した曉には僕達まで迷惑をしなければならぬ。

惣　吉。　まァしかしいくら心配をしても本人があれては詮方がありません、運命に任せるんですねえ。

其の時上手より秀彌は藝者新大阪家の三代治に手を取られて厭や〳〵乍ら捨臺詞にて出づ。

惣　吉。　若日那！

秀　彌。　おゝ、藤田君一緒に居るのか。

欽　哉。　全體この狀はどうしたのですか。

秀　彌。　どうも飛んでもないものに引かゝつて閉口をしてゐるのだ。

三代治。　な、なんですつて、飛んでもないもの、もう一度言つて御覽なさい、本當に。

惣吉と欽哉は呆然として横を向く。

秀　彌。　おい、倉田君！

惣　吉。　はい。

秀　彌。　君はあちらへ行つて父や伯父の手前をつくらつて置いてくれ給へ、僕は一寸この女に話をしなければならぬ事があるから、どうか賴む。

惣　吉。　どうもいつもそふいふ御用ばかりは困りますね。

秀　彌。　だがしかしかういふ風に突然に起つた事は仕樣がないぢやないか、僕だつて豫期してゐなかつた事なんだからな、厭味をいはずにやつてくれ給へ、賴むから、藤田君もどうか賴むよ。

欽　哉。　はゝゝゝゝ、色男にはなりたくないものですね。

秀　彌。　まァそんな事をいはずにさ。

惣　吉。　まあ、可いです、さァ藤田さん參りませう。

欽　哉。　あ、行かう。

秀　彌。　ぢや賴むよ。

欽哉と惣吉は上手に去る、秀彌ホッとして、

秀　彌。　どうも本當にお前の解らぬにも困つて了ふな。まァあの男達は僕の腹心の部下だから可いやうなもの、他の者にこんなところを見付られたのだつたら大變だよ、噂がひろまつて。

三代治。　でも若日那妾の顏を見たからつて、さう急に逃廻さなくつても可いぢやありませんか、どう

せ妾は厭はれた女ですけれど、それぢや餘り薄情でせう。

秀　彌。　いや、決してそんなわけではないが、今日は知つての通り、親父や伯父も來て居るし、謂はゞ僕の一家一門の園遊會だから全く具合が悪いよ。ねえだから明日の晩きつと行くといつてるぢやないか。

三代治。　いえ、あなたの仰有る事は少しも的にはならないわ。ねえ洋行なさる前日何んと仰有いました。あれだけ堅く約束をして置き乍ら、最初の裡こそ消息をくださいましたが、途中からはまるでいたちの道きりぢやありませんか。

秀　彌。　いや、それにはその色々と事情があつたので、（四邊に氣配しつつ）何しろ今日だけは勘辨をして呉れ、賴む、後生だから。

三代治。　いえ、離しませんよ。ねえ、あなたのお宅の園遊會によし町の藝者が來る事になつたのも、又妾も烏森からよし町へ住變えて、今日こゝへ參れるやうになつたのも、やつぱりまだ御緣があつたのですわねえ。

秀　彌。　いや判つた、判つたよ。判つたから今日だけは勘辨をして呉れ、えゝ、苦勞して來たお前にも似合はないよ。

三代治。　あら、またあんな旨い事を云つて妾を瞞さうと思つたつて、もうその手には乘りませんよ。

秀　彌。　あゝあ、もう判つたよ。（ハラハラしつつ）ぢや何んだ今晩きつと檜物町へ行つてお前を招らすよ、ねえその時悠りと話をしやうぢやないか。

其の時下手より山崎お芳華美な日本衣裳にて出で、この狀を見遣る。

三代治。　え、本當に來て下さる？

秀　彌。　あ、きつと行くよ。

三代治。　若旦那ほんとうですねえ。

秀　彌。　本當だよ。

三代治。　まあ嬉しい、ぢやかうして頂戴な。ねえ、あのお花見が濟んだら妾と直ぐ一緒に自働車で參りませう、可いでせう、どなたにも判らないやうにして——。

秀　彌。　そ、そんな譯には行かないよ。親父やあの頑固な伯父にでも見付かつて御覽な、それこそ首尾を悪くして了ふぢやないか、三代治お前は本當に判らない人間になつたね。

三代治。　え、これも皆なあなたの所爲ですわ。あなたが洋行なすつてからと云ふものは、妾や全くヒステリーになつちやつたの、今にキ印になつて了ふから本當に、、、、。

秀彌。あゝ、本宮に困つて了つた（ふとお芳を顔を見合して咳然とし）あッ！お芳、お前いつ來たんだい。

お芳。え、先刻から參つて居つたのですけれど、一寸御遠慮して居つたの。

三代治は屹驚して嫉妬と憤怒に燃えつゝお芳を見る。お芳は悪と冷然と三代治を視遣りつつ。

お芳。あなたも粋なお眞似をなさいますこと。

秀彌。うゝん、いや何にその、、、、。

お芳。こちらの御婦人は、あなたの御親戚なの、お友達？

秀彌。いや、何んでもないよ。花見に招んだ藝者だよ。

お芳。まあ、藝者！（蔑すむやうに三代治を見遣つて）さうですか。（皮肉に）妾やまた何處かの御夫人か知らんと思ひましたわ。でもあなたは日本の立派な紳士なんでせう。

秀彌。うゝん。

お芳。巴里でブル・ヴワールあたりの夜會にもお出入をなすつた事のあるあなたですから、少しは御自分の體面も重んじなさいまし。こんな下等な藝者風情に馴々しく遊ばしては、あなたの信用を傷つけますからねえ。

三代治。何んですつて？妾が下等ですつて。えゝそりやごうせ下等ですよ。下等でも上等でも、またいゝつてお方があるんだがら、（ト叫びつつ秀彌の側に寄り）ねえ、若日那、何んこか言つて頂戴よ、全體この方はあなたのなアに。

秀彌。うゝん。

お芳。（慌てゝ三代治を遮ぎり）まあ止して下さいよ。

三代治。えい。

お芳。こちらはね、妾の大切な御亭主なんです。人の夫に向つて、餘り失禮ぢやありませんかー

三代治。ひえい！

お芳。またね、妾が退屈な時には邸宅へ招んで上げるから、遊びにおゐでな。さアあなた參りませう！

ト お芳は秀彌を擁して上手に退場、三代治は凝然と其の後を見送り、ワナ〳〵と顫へて、

三代治。あゝ、口惜しい、、、、。

ト泣伏す、おでんやすしやの模擬店より藝妓二人出で三代治を勞はる。

藝妓甲。三代治姐さん、まアどうなすつたの。

藝妓乙。　さあ、姐さんそんな處へ臥ちやつては仕樣がないわ、まア此方へゐらつしやいよ。

三代治。　あゝ、口惜しい〳〵、妾やこれから若日那の處へ暴れて行つて言ひたいだけの事を云つてやらなくちや胸が晴れない。

藝妓甲。　え、そりやもうよく解つてますが、云ふ事は何時でも云へますからねえ。

藝妓乙。　今日は大勢お客もある事ですから、兎に角辛抱をして、こちらへゐらつしやいよ。またこんな處を新聞記者に見られて、三面記事の埋草にでもされちや詰らないわ。

ト捨臺詞にて二人は三代治を下手の模擬店のなかに連れて這入る。上手より渾名千住の熊中田熊二郎（準之助の實父）醉眼になつて上氣嫌にて出づ。

熊二郎。　や、こりや〳〵、花は咲いても、咲かいでもだ、畜生！こらッ姐さん！

模擬店の藝者甲。　はい〳〵。

熊二郎。　おゝ、おでんを呉んな。

藝者甲。　はい、畏りました。

熊二郎。　すじかちくわが可いな。

藝者甲。　え、それならもうお生憎さま。

熊二郎。　何んだこ、お生憎さまだ、畜生！なけりや取寄せて來い！俺はまだおでんは一つも喰はねえんだ。

藝者甲。　え、でももう先刻から皆さんが召上つたものですから。

熊二郎。　髭を生やしがつたり、洋服を着やがつたりしても、皆な川流れの褌ばかり揃つてやがつて、俺の喰分まで平げやがつたな、畜生！誰だこ思つてやがるんだい、千住の熊さん、知らねえか！

藝者甲。　おほゝゝゝゝ、まあ面白いお爺さんだこと。

熊二郎。　何を、お爺さんだ、へん！笑はせがら。頭は禿げてもな、若い情婦の一人や二人にや不自由はしねえんだい。

藝者甲。　おほゝゝゝゝ、まア己惚の強い事、呆れて了ふわ。

熊二郎。　やい、何が可笑しんだい、ゲラゲラ笑つてばかりゐねえで、早くおでんを持つて來やがれ。

藝者甲。　だつてそんな無理な事を仰有つても、ないものは詮方がありません。

熊三郎。　何に、無え！無えものをなんだつて、おでん屋の看板なんか出して置きやがるんだい！

藝者甲。　そんな無理な事を仰有つても、此處は模擬店ですよ。

熊二郎。　何に、もぐりだ、コン畜生いつ俺がもぐりをしたい、やいもう一度吐して見ろ!!

藝者甲。　まあ、

ト藝者は怯えて模擬店のなかに逃げ込む、熊二郎は捨臺詞にて店の前で亂暴を働く、藝者は叫ぶ。又一同もこの狀を眺めてゐると、上手より慌たゞしくお花出づ。

お　花。　まあ、お父さん、また酔ぱらつて亂暴をしてゐるんですね、後生だから歸つてお臭れよ。

（藝者に向ひ）どうも本當に濟みません。

藝　者。　いえ、どうしまして。

熊二郎。　たゞ誰だい！

お　花。　え、お父さん、どうしたんですね。

熊二郎。　うゝむ、お花か。あ、そう――か。

お　花。　さあ、もういゝ加減に歸つてお臭れよ、大きな聲で怒鳴つて歩いて、本當に妾が困つて了ふぢやないか。

熊二郎。　箆棒奴！今日は何んだと思つてゐやがるんだい、花見ぢやねえか、おい花見だよ。

お　花。　お花見は分つてゐるよ。今日はどんな事があつてもいつものやうに酔はないといふ約束で、招待券を上げたのに、これぢや妾が日那樣に申譯がないよ。

熊二郎。　馬鹿云へ！花見に酔はねえ頓馬な奴があるかい。やい、お花、手前だつて一人の親を花見に招んだのなら、なア充分酔ぱらふまで飲ませるのが、娘の役ぢやねえか、それになんだ顏を見るなり歸つて臭れとは、何んといふ云ひ草だ！よう、野村の大日那にさういつて來い、花見に招んだのなら招んだらしくしろつて、父がさう云つてゐるからつて云つて來い。

お　花。　お父さん、後生だから歸つてお臭れよ。そんな情ない事を云はないでね。

熊二郎。　いや、歸らねえ、今日は一つ思ふ存分酔ぱらつて、歸りにや千住へでも繰込むんだ。

お　花。　まあ、妾どうしたら可いだらう。

お花泣出す、藝者お花を勞る、群衆のなかより職工十吉出て、

職工十吉。　なア父ん、まア温順しく歸つてやんなよ、娘さんが心配をして泣いてるぢやないか。

熊二郎。　何んだい、手前は横合から出やがつて、泣かうが笑ふが、大きなお世話だい。

職　工。　大きなお世話かも知らねえが、娘さんが可哀相だから云ふんだよ。いゝ年をして若い者に心配をかける者ぢやねえよ。

熊二郎。　何を、コン畜生！よう俺を誰だと思つてやがるんだい。

職　工。　誰だとも思つてるないよ、酔つて亂暴をするから云つてるんだ。

熊二郎。何を！何が亂暴だい。

職工。お前さん、俺に喰つてかゝるのか。是程云つても分らんのか！

熊二郎。なんだこ青二才奴！千住の熊こ云や、大概の奴は道を除けて通つた俺を知らねえんだな。

職工。何に！

兩人摑合になる、その時より倉田惣吉上手にてこの狀を眺めてゐる、形勢愈々不穩ならんさすると時、

惣吉。まア可いから兩人こも止さんか。

兩人尙捨臺詞にて爭ふ。惣吉は職工を後ろへ廻し、

惣吉。まあ、老人の體で怪我でもしちや詰らねえ、止し給へ。

熊二郎。何に、年は老つても、昔し鍊えた腕は手前達の五人や六人！さあ來い！

惣吉。まあ、可い〳〵君の腕の強い事はようく解つたから、ねえ、温和しくしてくれ給へ、それでは折角の樂しい花見が興が醒めるぢやないか。

お花。まあ、倉田さん色々ごうも有難うございます。

惣吉。おゝ、お花さんか、君の、、、、、

お花。え、父なんです、毎年この通りの有樣で妾はもう本當に困りますのですよ、（熊二郎に向ひ）お父さん〳〵。

熊二郎。何んだい！畜生！

お花。畜生ぢやありませんよ、いつも御世話樣になつてゐる倉田の旦那樣ぢやありませんか。

熊二郎。えい！倉田の旦那！（やゝ恐縮の態にて）こりやごうもさうでげしたか、つい酒の機嫌でウツカリいたして居りまして申譯がありません、實は何分に今日は何んでも喰ひ次第飲み放題だといふ事だこ聞いて居りましたのに、この女アがねえこ申しやすものですから、つひその持前の癇癪玉が簇然こ起りやしてなごうも飛んだ處を旦那に。

惣吉。あはゝゝゝさうだつたのかね、（藝妓に向ひ）おいもうおでんはないのかね。

藝妓甲。え、もうみんななくなつたので御座いますよ。

惣吉。さうかそりや不都合だな、お父アん、もう少しのあいだ辛抱をして居つて呉れ給へ、僕はよい御馳走を持つて來て上げるからな。

熊二郎。へえ、ごうも恐れ入りやす、何に別に喰意地が張つて居るわけでもごわせんからごうぞ御心配なく、つひものは云ひやうで角が立つて、頭からねえいこやられるこ何んだ持つて來いこ云ひたく

なるぢやござんせんか、ねえ日那さうでせうが。

惣　吉。　あ、そりやさうだこも（と云ひつつお花に向ひ）こゝは可いから僕に任して彼方へ行つて居り給へ。

お　花。　さうですか、ぢや恐れ入りますがごうぞ宜しく。

ト お花は上手に入る、

惣　吉。　さあ、僕こ一杯飲んで機嫌を直してくれ給へ、おい正宗を一二本こゝへ持つて來てくれ。

藝　妓。　はい畏りました。

ト 藝妓はビヤホールへ行つて正宗を持つて來る。

惣　吉。　さア一杯グッこやつてくれ給へ。

熊二郎。　イやこりやごうも日那のお酌ぢや恐れ入ります。俺にも（指折かぞえて）さうだ今年居りや旦那位の悴がさうだもう少し年を老つてゐるかな、働きざかりの悴があつたのですがな。

惣　吉。　うむ、お花さんの兄さんがあつたわけだな。

熊二郎。　へえ、お花こは腹違ひなのですが、俺の先の嬶ァの子で。

惣　吉。　ふうむ、さうするこその息子さんは歿くなられたのかね。

熊二郎。　いやそれが日那、歿くなつたのなら、また諦めやうもありやすがな、實は俺も若い頃からやくざな仲間に這入つて、ふこした事からその悴や嬶を置去りにして東京へ出て、謂はゞ捨てたも同然なんで。

惣　吉。　ふうむ、そりや可哀相な事をしたものだね。しかし子を捨てる親は君一人でもないやうだよ。

熊二郎。　そうか知りやせんが、あんな慘めな事はするものぢやありやせんぜ、かうして年を老るにつれて、悴の事を思ひ出しやしてな、雨が降るにつけ、風が吹くにつけ思ひ出さねえ事はごわせんよ、その罰あたりでこの通り年を老つて苦勞しなくちやなりやせん。

惣　吉。　まあ、しかし死んだのでなければまた何處で邂逅ふにも限らんからね、さう心配したものでもないよ、僕だつて長いあいだ逢はなかつた、たつた一人の親友に思ひも寄らぬ亞米利加で會つたからな、お互に生命さえあればいつか會ふ機會は來るものだ。

熊二郎。　へえ、さうでせうかな、俺やもうこの世の望みに準之助に一目會つて死にたいこそればかり祈つて居りやすよ。

惣　吉。　えッ、準之助！（驚いて）君の息子さんが準之助こいふのかい。

熊二郎。へえ、準之助こ申しやすが、日那は御存じなのですか、確か俺の昔の姓ですから小泉こ申して居る筈ですがな。

惣吉。えゝ、小泉！

熊二郎。日那御存じなんですか。

惣吉。（少時して）いゝや、知つてるわけでもないがね、やはり僕の友達にも小泉こいふのがあつたからだよ。

熊二郎。さうですか、だが日那方が俺共の悴を御存じの筈は御座いませんよ、ごうせ滿足に學校なぞへ上つて居つたわけぢやありませんからな、日那方こお友達になれる位立派になつて居つて呉れゝば俺もまア安心ですが、ごうせ親に捨てられる位の子ですもの、今頃は生きて居つた處が、ごんなものになつて居るか分つたものぢやごわせんよ。

惣吉。（苦笑しつゝ）あはゝゝゝ、だがあながちに親に捨てられた子がツマラない人間になるこいふわけのものでもない、ごんな事で君の息子さんの準之助さんが立派な人間になつて居るこも限らんからね、世の中の事こいふものはさう一概には云へないよ、あはゝゝゝ。

熊二郎。まあさう仰有つて下さりや、俺も本當に心丈夫ですが、達者に生きて居つてくれば有難いこ

しなくちやなりません。

惣吉。うむ、しかし飛んだ事から話が理に落ちて折角の酒もさめたやうだ、さアもう一つぐうつこ飲り給へ。

熊二郎。へえい、ごうも恐れ入ります。

熊二郎は盃を受ける。

惣吉。僕はまだ他に用事があるから、これで失敬をするから、機嫌よく飲んで歸つてくれ給へ、まだお花さんが心配をするこ不可ないからね。

熊二郎。へえ、有難う存じます、ごうも飛んだ御心配をかけて相濟みません。

惣吉。いやごうして、ぢや失敬するよ。

熊二郎。へえごうぞお構ひなく。

熊二郎は叮嚀に見送つて、惣吉の退場した後姿を眺め。

熊二郎。あの日那は感心な方だ、あアして優しく云はれや、ごんな悪い虫だつて納らずにやるられねえ、狂人も一人は狂はねえこいふからなあ。

ト熊二郎は煙草をふかしつゝ、

熊二郎。ごれ、そろ〳〵歸らうかな。

ト熊二郎獨言しつゝ尻端折ると、上手より山崎お芳出でゝ、何か思案に暮れつゝ行き過ぎやうとする、熊二郎はふとお芳の横顔を見て、ハッと思つてお芳の傍に行く、お芳は氣味惡がつて急ぎ足に下手に退場。

熊二郎。はてな、彼女ア確かにお芳らしいがな。

ト凝つと見遣つてゐる、上手より渾名河童の民島田民治出で、

民治。(熊二郎の肩を叩いて)おい、兄！何をぼんやり考えてるんだい。

熊二郎。おゝ、誰かと思つたら民かい、おい〳〵。

民治。えゝ。

熊二郎。あの向ふに行く綺麗なハイカラの女を見てみな。

民治。うゝむ、うん、あれがごうしたんだ。

熊二郎。彼女ア七年前に何處かへずらかりやがつたお芳の女アに違えねえんだがな。

民治。え、お芳。

熊二郎。うむ。お前も知つてるだらう。

民治。うむ、だが、幾らお芳が別嬪だからつて、あんな立派な女になつてるるものかい、人違ひだよ。

熊二郎。いやさうぢやねえ。お芳に違えねえ、おゝさうだ。手前あの女を判らねえようにつけて見ろい何處へ行きやがるか。

民治。よし！合點だ。

ト民治は行きかける。

熊二郎。おゝ、待てよ。

民治。えゝ。

熊二郎。間違ひなくお芳だつたら、構はねえから首縄かけて引張つて來い。

民治。よし分つた。

ト民治は下手に退場、

熊二郎。ふゝゝ、こいつは可い金儲の網にありついたわい。

其時模擬店のなかより、三代治出る、熊二郎ハッとして鼻唄に胡魔化す、この體宜しくあつて(道具廻る)

第二場　山崎一彦宅

東京場末貧民窟の一角。

舞臺中央に長屋の一番突端の家を示したる六疊の部屋、薄汚なきすべての調度、部屋の上手に机、机の上には書籍五六册、部屋の正面よりやゝ下手に三尺の入り口、（引戸を開ける毎に、外景の夜氣部屋のなかに射し込む）

家より上手奥に續いて、長家の裏口ずつと續き、そこには、家毎に、物干竿或は、荒くれた臺所道具など見ゆ、隣家の緣側には、つぎはぎの股引、袢纏など呆してある。

家の下手には郊外の遠見、そこは十字街の心持にて下手奥に電柱を設く、淋しげに遠く家々の灯見ゆ。

お喜久荐りに針仕事をしてゐる、上手露次のあいだより、一彦の朋輩職工木村藤助、堅田眞の二人、手に櫻と折詰を持つて出づ。

藤助。　おばさん、今晩は。

眞。　今晩は、あゝ疲れちやつた。

喜久。　（針仕事を下に置いて）おや、木村さんに堅田さんですか、（眼鏡を外して）ゐらつしやいまし、

今まお花見のお歸り。

藤助。　え、さうなんですよ、

眞。　どうも盛んなものでしたぜ。

藤助。　それに今年は野村さんの若日那が洋行から歸られた歡迎會を兼たのですから、去年のお花見よりは、ずッと華美でしたよ。

喜久。　まあ、さうでしたか、一彦も行けば可いのに、相變らず遍窟で妾も本當に困りますよ。（茶を雨人に出す）さア粗茶ですがお一つ。

眞。　は、有難う。

藤助。　（茶を啜り乍ら）しかし、山崎君は何處かへ出懸けたんですか。

喜久。　え、今日はお花見の代りに、一日圖書館へ行つて本を讀んで來るこか申して朝早くから出懸けましたよ、大方上野へ參つたのでせう。

藤助。　さうでしたか、

眞。　あゝ、本當に山崎君は感心ですな、一日工場でえらい勞働をして、その歸途にや神田の正則まで夜學に通ふなんて、全く山崎君一人ですよ。

藤　助。本當だな、工場でだつて僅かな晝の休み時間にも、本ばかり讀んでゐるんだもの、ごんな目的があるか知らんがあんなに勉强をして、病氣にならなければ可いがと案じてゐる位ですからな。

喜　久。（不安らしく）え、妾もそれを心配して居るのですよ。稀には皆さんと一緒に淺草あたりへ出懸けるとか、又は今日のやうな會社のお花見などには、何を置いてもお交際をするやうだと可いんですけど、一彦ときたらそんな事には一向頓着なしで、妾も皆さんが御親切に仰有つて下されば下さるほどお氣の毒でねえ。

眞。いや、どうしまして。

喜　久。まあ、放蕩をして呉れても、心配には心配ですが、あんなにひねくれて本ばかり讀んでゐる悴の後姿を見ると、時々妙な心配が湧きましてな、どちらにしても親ごいふものは樂は出來ないもので。

藤　助。あはゝゝゝ、そりや取越苦勞ですよ。今に山崎君が偉くなりや、おばさんは安心なものですよ。

喜　久。まあ、どうですか的にはなりません。

眞。さあ、木村君失禮しやうか。

藤　助。あ、行かう。

喜　久。おや、もうお歸りですか。

眞。え、また今度休みの日に、悠り寄せて戴きませう。

喜　久。おや、さうですか、何もお愛想がありませんでしたわね。

藤　助。いや、どうしまして、（櫻の枝を折詰を出して）あ、おばさん。

喜　久。はい〳〵。

藤　助。こりや、お花見の土產です。

喜　久。まあ、美事なこと。

眞。山崎君が歸られたら上げて下さいよ。

喜　久。まあ、有難う御座います、こんなに頂戴して可いのですか。ごんなに喜ぶ事でせう。

藤　助。それぢやどうもお邪魔しました。左樣なら。

眞。左樣なら。

喜　久。あ、さうですか、またゐらして下さいな。

兩　人。有難う。

ト藤助眞は上手に入る。喜久は櫻を持つて、

喜　久。　まあ、こんなに美事に花が咲いたのかな、世間に出ずに暮すこ、花の咲いたのも知らずに暮れて了ふ。

ト花を折詰た机の上に置く。下手より家裏へ、「え、鍋やきうどん！」と叫び乍ら、うどん屋が行く。

喜　久。　あ、あのうどん屋が來れば、もう九時過だが、一彦はまだ歸らないのか知らん。

ト喜久獨言しつゝ、火鉢の火を起す。下手より山崎一彦憮しげな顏付にて悄然と出づ。

一　彦。　おつ母さん、只今。

喜　久。　あ、お歸り、大變に遲かつたぢやないか、今迄圖書館にゐたのかい。

一　彦。　え、さうです、恰ど十五日ぶりで好きな本を充分に讀んで來ましたよ。

喜　久。　まあ、そりやよかつたね。

一　彦。　（机の上の花を見て）この櫻はどうしたのです、おつ母さん。

喜　久。　あ、先刻ね、木村さんこ堅田さんがゐらして、お花見のお土產だこ仰有つて下すつたのだよ。

一　彦。　さうでしたか、上野はもうそろ〳〵散りかけましたがね、野村さんのお庭は恰ど盛りだつたでせう。

喜　久。　そりや隨分盛んな事だつたこ言つてらしたよ、お前も來ればよかつたのにつてね。二人で仰有つてらしたよ。

一　彦。　え、花に浮れたり、世の中の樂しみを享（うけ）入れて行かれる人達は全く幸福な人ですね。

喜　久。　おほゝゝゝ、お前は自分勝手に拗ねて樂しい場所にも出ないのぢやないか、いつも云ふ事だが、もう少し世間樣こ交際つて行かないこ、段々世間から憎れて、終にはお前一人ぽつちの淋しい人間にならなければならないよ。

一　彦。　え、僕は努めてその淋しい人間になりたいのです、いや生れた時から既に淋しい人間になり切つてゐるのかも知れませんよ。（櫻を眺めて）この花だつて眺めようによつては淋しいものですからなあ。

喜　久。　（淋しく笑つて）おほゝゝゝ、またあんな事を云つて、お前は本當に妙な子だよ。だが、お前お腹が空いたらう。

一　彦。　いえ、歸途に坂本の通りでうどんを食べて來ましたから大丈夫です。

喜　久。　でも一膳食べたら、どう、先刻なんだか折詰も貰つてあるのだし。

一彦。まあ、おつ母さんお食りなさい、僕は充分です。

喜久。そうかい。では熱いお茶でもいれようかね。

一彦。えゝ。

喜久は臺所に行く。一彦は讀書に耽る。支那そばの喇叭の音、淋しく物憂げに響く。

喜久、茶盆を持つて出で、一彦の後ろ姿を見て、少時打眺めて、愁はしげに溜息を吐く。

喜久。（怯々しつゝ）あのう一彦や、一彦。

一彦。はい。（答へたまゝ書見する）

喜久。あのう、この間から一度聞かう〳〵こは思つてゐたんだがね。

一彦。何をです、お母さん。

喜久。お前が毎日讀んでゐる本のことをさ。

一彦。え、本のこと？　僕が讀んでゐる本の事と仰有いますと。

ト一彦は書籍を閉じる。

喜久。お前は去年の春からこいふものは、年中本ばかり讀んでゐて、碌々口も利かずまるで人間が變つて了つたぢやないか、それが妾には心配でならないんだよ。

一彦。ごうしてです、僕が讀書する事が、おつ母さんにはごうして御心配なのです。

喜久。え、ごうこいつて、かうだこハツキリした事は妾にも云へないんだけれど、おつ母さんは何んだか近頃のお前の樣子を見ると、妙に胸騒ぎがしてねえ、矢張り若い者は若い者のようにしてゐて呉れないと、親こいふ者は何につけても心配をするものだからねえ、そんなに本ばかり讀んで、まァごうしやうと云ふのか、お前の料見が聞きたいんだよ。

一彦。（厳肅に）おつ母さん！

喜久。えゝ。

一彦。僕は世の中の眞實の事が知りたいんです！

喜久。えゝ。

一彦。この本には、世の中の眞理こいふものを敎えてあるのです。

喜久。お前のいふ事は、何んだか難しくておつ母さんにはよく分らないけれど。

一彦。え、そりやおつ母さん一人ぢやありません、多くの人は大抵わけが分らずに夢のように生きて來たのです、お母さんはもう今年五十でせう。さうでせう。

喜久。（默つて首肯く）

一彦。（深刻に）五十年間の生涯に、これはこいふ樂しい日がありましたか、お父さんはいつもお母さんを寂じめ通して來ましたね。お母さんのその額の傷は、矢張りお父さんがつけたのです、自分の寂しい生活の記錄をば、お母さんの肉體に刻みつけて行つたのです。

喜久。まあ、、、、（喜久過去を追想して涙ぐむ）

一彦。お父さんはいつもお酒ばかり飲んで、年中お母さんを擲つたり蹴つたり、殘酷な事ばかりしてゐましたねえ、お父さんは何故自分が苦しまなければならぬのか、何故かう世の中こいふ處はせちゝ辛いのか、それも知らずに、唯世の中から受ける苦痛を、いつもお母さんの身軀の上で響をこつてゐたのだこいふ事が、近頃漸く僕の胸に解つて來たのです。

喜久。（ハッとして）まあ、お前はそんな事を考へてゐるのかね。

一彦。え、考えてゐます。考へなければならないのです。

喜久。それでお前はどうしやうこいふのかえ。

一彦。出來得る限りの勉強をして、愍れな人間に敎えてやります。

喜久。まあ、なんのお前にそんな事が出來るものかね、まるでお前は坊さんの云ふやうな事を云つてゐる。

一彦。いえ、さうぢやありません、人は人類の爲に人間を救ふ事を知らなければならないのです。お父さんはそれを知らなかつたのです、姉さんはお父さんの酒の飲料の爲に、犧牲こなつて肉を賣りました、その間にお父さんの行衛は知れず、噂に聞けば何者かの手に殺されたこかいふぢやありませんか。今になつて思へばお父さんの一生は、恰ご泥濘に歩み込んだような、哀れな生涯に終つたのです。

喜久。（涙に咽びつゝ）お前にさういはれるこ、永いあいだ苦しんで來た道が歴然こ眼に泛ぶやうだ。まだ生若いお前にそのやうな事を考えさせるやうになつたのも、皆なお父さんが惡かつたのだよ。

一彦。いえ、お父さんが惡いのではありません、お父さんは無智だつたのです。その無智な人間を不幸な運命に導いた世の中が惡いのです。

喜久。あゝあ、こんな時にせめて姉さんでもるてくれたらいゝのに、それも死んでるるこも、生きてるるこも行衛が知れず、是ほご不幸な母子があるだらうか。

一彦。それも運命なら詮方がありません。これから不幸な運命を乘越えて、明るい平和な世界に入るだけです。

喜久。でも一彦。

一彦。はい。

喜久。もう何んにも愚痴はいはぬが、お前も餘り考え過ぎて突飛な事をしておくれでないよ。可いかい、妾はこの廣い世の中で、手賴りにするのは、お前一人なんだからねえ。

一彦。は、、、、い。

喜久。まあ、お喋舌をして居つて、お茶をつぐのを忘れて了つた。もう冷めたかも知れないよ。

一彦。は、有難う。

喜久はお茶をついで一彦にすゝめる。下手より中田お花急ぎ足に出で、手に風呂敷包を持つてゐる。

お花。今晩は。

喜久。おや、(トやゝ驚いて)お花ちやんぢやないか。

お花。え、遲くから濟みません。

喜久。いえ、さ、お上んなさい。

お花。有難う、一彦さん、今晩は。

一彦。あ、ゐらつしやい。

お花上る。

喜久。よくまあ來られたわね、お花ちやんもお花見のお手傳ひだつたのでせう。

お花。え、そりや忙しくて困りましたわ。

喜久。さうだつたでせうともね、大勢さんの事だから。

お花。これ、お花見のお辨當の殘つたので失禮ですけれど、べん松のお辨だから持つて來ましたの。

喜久。まあ、さうですか、それはどうも有難う御座います。(風呂敷を解いて)まアこんなにごつさり。

お花。おばさんと一彦さんのよ。

喜久。さうですか有難う存じます。

喜久は折詰を載いて臺所にゆく。

お花。ねえ、一彦さん。

一彦。えゝ。

お花。どうして今日ゐらつしやらなかつたの、妾本當にどんなに待つてゐたか分りやしなかつたわ。隨分ねえ。

一　彦。　え、、花見に行くよりは圖書館で好きな本を讀んでゐた方が、ごれだけ愉快かも知れません。それに僕は大ぜいの人の居る處へ行くのは餘り好みませんからねえ。

お　花。　まあ、だつて妾が行つてゐるぢやないの、あなたは本當に人の氣も知らないで、（ト慢めしけに秋波を送る）

一　彦。　あはゝゝゝ、そんなわけぢやないんですが、僕の今の心持は迚も花に浮れるやうな、のびやかな氣分にはなれないのです。

お　花。　でも人が浮れる時には矢張り浮れるものよ。

喜久出づ。

お　花。　ねえ、おばさん、一彦さんも今日ゐらつしやれば、ごんなによかつたのに、、、、。

喜　久。　え、今もそれを言つて居つた處なんですよ、一彦のやうに小難しい理屈ばかり言つて居ると、終ひには誰も交際つて下さる方がなくなつて了ひますからね。鄉に入れは鄉に從へて、矢張り職工は職工らしくして居りませんごね。

お　花。　え、さうですわ。

一　彦。　だつておつ母さん、キリストだつて矢張り私生兒で職工の子ぢやありませんか、職工の家に

生れたからつて、何も職工に終らなければならぬごいふ道理はありません。

喜　久。　またあんな難しい事を云つて、お花ちやん、本當にこれだから一彦には困つて了ふのですよ。

お　花。　おほゝゝゝ、一彦さんはうちの工場で學者つて云はれてゐらつしやるさうですから。

喜　久。　いや〳〵、人間は身分相應、蛙の子は蛙の子で滿足をしてゐないご、ものが違つて來ますよ。

お　花。　あ、しかしおばさん、、、、今日は妾大變に嬉しい事があるのよ、それを知らしに來たの。

喜　久。　まあ、嬉しい事つて、お聟さんでもきまつたのですか。

お　花。　まあ厭だ、おばさん、そんな事ぢやない事よ、あのう、そらこの間からよく妾がお話をしたでせう。

喜　久。　えい、何んだつたけね。

お　花。　あら小母さん厭だわ、もう忘れちやつて、そら若日那のことですよ。

喜　久。　あ、はアん、若日那樣のお嫁さんのお話ですか、確か細川さんのお嬢さんにおきまりださいふ大變な評判でしたが。

お　花。　え、それがかうなんですよ、若日那さんはごうしてもあの外國から連れてお歸りになつたお方ご一緒になるのだご仰有つて、實際お家のなかは大ゴタツキなのですよ。

喜久。まア若日那様も物好きな方ですわね、毛唐人と一緒になられるなんて。

お花。おほゝゝゝさうぢやありませんわ、やはり日本の方で長いあいだあちらへ行つてらしたそりや美しい方ですわ。

喜久。（漸く合點して）はあん〳〵さうですか、ぢちらにしても若日那さんの奥さんにならうと仰有るからにはいゝお家のお嬢さんなんでせうね。

お花。え、お里はよく知りませんが、その方が今度別宅の方へお這入りになるので妾はその方のお附に代るかも知れませんわ、さうしたら、おばさん一度遊びにゐらつしやいな、そりや氣のいゝ方ですから。

喜久。はい〳〵、でも私共は迚もそんな立派なお邸宅へは、、、、

お花。でも妾が行く事になれば構はないわ。おや、お喋舌をしないで、早く歸らないと、また女中頭にお叱言を頂戴するわ。

喜久。おや、さうね。

お花。いま、ほんの隙を見てやつて來ましたの。

喜久。それはぢうも有難うございました。

お花。いえ、ぢや失禮しますわ、一彦さん、左樣なら。

一彦。あ、お歸りですか、左樣なら。

喜久。ぢやまた遥に骨休みにゐらつしやいな。

お花。有難う、また寄せて戴きますわ。

喜久。ぢや、氣を附けてね。

お花。左樣なら。

（お花下手奥に退場。）

喜久。まあ、あのお花さんは、いつも變らず親切なお方だね。

一彦。え、左樣ですね、あの人のお父さんも矢張りお酒ばかり飲んで隨分お花さんを困らせるといふ話ですがねえ。

喜久。さうだつてね、でもお花さんはその父によく孝行をするといふのだから、感心なものだよ。

一彦。え、さうですつてねえ、それにしても姉さんだつて何處かに生きてゐるような氣もしますねえ。

喜久。そりやさうだとも、まあ〳〵神信心でもして無事を祈るのです。しかし一彦もう寢ないと、

また朝が早いんだからね。

一彦。 は、今日はもう寢みませう。

喜久。 え、妾もお父さんの位牌にお念誦をして寢みませう。

一彦兩戸を繰る、舞臺うす暗くなる。御詠歌を誦する厚のなかより淋しく聞え、鉦の音聞ゆ。

揚幕よりお芳四邊を眄しつゝ出づ、徐かに、其の後を忍び〳〵、河童の民、島田民治つけて出る、七三にてお芳愈々氣味惡がつて、舞臺に入る、民治一二度附廻して、

民治。 おい、お前！本塚にゐたお芳ぢやねえか。

お芳。 ひえい！

民治。 あはゝゝ、矢張りさうだつた。おい〳〵ごうしたんだか知らねえが、大層素晴らしい女になつたな、實は何んだごうもお前に似てゐたようだつたから、ずツと附けて來たんだが、あ、すつかり草臥れちやつた。

お芳。 まあ。（駭然とする）

民治。 おい〳〵、さう濟すなよ、手前まさか俺の面忘れやしめえ。えゝん、何處を怎う潛つて、旨くやつてゐやがるのか知らねえが、なア近所ぢう借金を踏倒して、何處かへずらかるなんて、餘り甚

えや、何んだぜ手前がゐなくなつたんで、あの松葉家の客はバッタリ落ちる、ごゞの詰りがあの店だつて疊んで了つたんだ、まア何んでも可いから熊アの家まで俺と一緒に來いよ。

お芳。 （傲然ト）妾やもうお前さん方と口を利くような身分とは身分が違ふんですから、止して下さいよ。

民治。 なんだと、身分が違ふ？へん！大風に灰を散くような事を云ふな！やい〳〵誰も人がゐねえと思つて、餘り生をいふねえ、さア一緒に來い。

お芳。 止してお呉れよ、煩さい！

民治。 ぢや、手前ごうあつても來ねえな。よし、女アの一匹や二匹や小指にかけて雜作はねえ、來ねえつていふのなら、俺が引張つてゆくから、さう思へ!!

ト民治はお芳の手を取つて行かんとする、お芳は行くまいと悶掻く、下手奥より小奥準之助出づ。準之助は民治の襟を掴んで突退ける、お芳は準之助を見て二度吃驚！

お芳。 まあ、準さん。

民治。 （驚いて）やい、何んだ手前は、、、、何んだつて邪魔をするんだ。

準之助。 手前こそ人の女房に向つて何をするんだ。

民　治。何に、人の女房だ？

準之助。さうさ、この女は俺の女房だ。

民　治。ひぇー

準之助。人の嬶にふざけた眞似しやがるこ、こちらこそ承知しねえぞ。

民　治。おい、手前の女房か知らねえがな、この女にや、以前に金の貸があるから連れて行くんだ。

準之助。何に、金の貸がある、全體ごんな貸があるのだ。その金の貸しやう次第によつちや俺が代つて拂つてやらう。

民　治。何に、お前が代つて拂ふ、へん！おい拾圓や貳拾兩の端金ぢやねえんだよ、大枚百五拾圓だ。

準之助。その百五拾圓がごうしたのだ。

民　治。この女に貸してあるのだい、だからその金を返して貰ふまではこの女を連れて行く權利があるんだい！

準之助。いや權利があるこいふが全體その百五拾圓はごういふわけで貸したのだ、何か理由があるだらう。

民　治。あるこも無うてごうするものか、ようまだ平塚で飯屋を開いてゐた時さ、この女の身躰にそ

れだけの金を貸したのだ、分つたかい。

準之助。可し分つた、しかしそのあいだには無論この女を相當に稼がしたらう。

民　治。あたりめえだい、誰が金をかけた女に一日だつて遊ばして置く馬鹿があるかい。

準之助。それぢやこの女によつて儲けた利益をこつちへ先きに寄越せ。

民　治。うゝむ。

準之助。さうしたらその百五拾兩も拂つてやらう、それまでは指一本でもこの女に觸つて見ろ！尋常ぢや置かねえから。

民　治。（愕然として）やい、大きな口をきゝやがつて！先刻から聞いてゐりや、何んだこ、餘り嘗めた事を云ふナ、おい誰だこ思つてゐるんだい、かうなりや手前達の一人や二人雑作はねえ、腕づくでもこの女は連れて行くからさう思つてろ！

ト民治はお芳を捕えんとする、準之助は無言にて民治の胸倉をグッと掴む民治到底力及ばず、

準之助。おい、腕づくなら丁度幸ひだ、願つたり叶つたり俺も暫らく昔しの生地を出さねえでゐたからむづ〳〵してゐた矢先だ！さア手出しをするならして見ろ！！

民　治。うゝむ、何に!?

準之助。おい〳〵鳩ぢやあるめえし、眼玉ばかりパチクリさせやがつてごうしたのだ。

民　治。うゝむ！畜生！

準之助。手前のような意久地なしは相手にしても始まらねえ、今日は勘辨してやるから、さツさこ歸れ！

ト準之助は突放す、民治はよろめいてホッと息つき、

民　治。怖しい力のある野郎だな（忌々しげに）ごうするか覺えてゐろ！

準之助。何ァに！

準之助は民治を睨む、民治も始めて準之助を凝視しつゝ少時不審の思入れあつて後、

民　治。おーい、お前なんだな、横濱で小揚人足をしこつた、感化院を脱走して來やがつたあの野郎だな。

準之助。えゝ。

民　治。おい、俺だよ、俺だよ、河童の民だよ。

準之助。うむ、あの頃、、、、さうかい、ようし人の仕事の影をなめやがつて、飲料無心に來やがつたあの意久地なしか、はゝゝゝまだのめ〳〵生きてやがつたのかい。

民　治。えゝ、まゝ何んでも可いや、今日は今日として改めて出直さうぜ、なあ野毛の賭場爭ひの一件から、沖へ誘出した、ありやよもや忘れめえ。

準之助。ひえつ！（駭然とする）

民　治。天道樣知らねえでもな、河童の民は海の底から覗いてゐたんだ。その内ゆつくり逢ふぜ、ご免よ。

ト民治退場。

お　芳。（周章しつゝ）お前さん、まあ、いつ戻つて來たの、、、、。

準之助。てめえは日本へ歸つて安心したらうが、俺はなお前が何處の際涯に行かうとも、俺の目的の果す迄は、お前の身軀の影となつて、墓場までもついて行くのだ！

お　芳。ひえつ!?

準之助。お前の目的を果した曉は、即ち俺の目的を果す時だ、いゝかよく覺えておけ、汝の身軀には小泉準之助は皮一重肉の内部まで喰込んでゐる靈だぞ、その靈はな、俺の希望を遂げる迄は、お前の身軀を保護もし、汝の心の番もしてゐるのだ。暗黒に入る迄身軀の影が消えない如く、汝こ俺の仲も、暗黒に入るまでこの準之助は汝の影こなつて一生附纏ふのだ!!

お　芳。　まあ、準さん（ト準之助の傍に寄って）お前はそれほどこの妾のことをば。

準之助。　さうさ！人間になるかならぬかの動機を作つたお前だ、普通の色戀ぢやねえ、俺はお前さいふものを得て眞實の生涯に這入るか、それ共お前と一緒に再び還らぬ暗の世界に這入るかだ。

お　芳。　それぢやどうあつても妾の身體を許しては呉れないんですねえ。

準之助。　さうだとも、身體も魂も許さない、お前が終生の願ひとする婚禮、その喜びがお前の身邊に迫つた時、その影には小泉準之助といふ執拗な靈はな、その喜びも奪ひ、肉も靈も奪ふといふ事を片時の間も忘れるな。

お　芳。　あゝあ、妾はどうあつてもお前の手にかゝつて死なねばならぬ運命に陷ちて行くのか知らん

（獨白のやうに）女の意地に生きて死ぬのが本當か、、、お前の手にかゝつて殺されるのが本當だらうか？

準之助。　それもお前の心一つだ、意地の爲に片時の安心もない不安な生活を送るか、意地を捨てゝ純眞な生涯に這入るか、今まお前の眼の前には、虚偽と眞實の岐道に立つて居るのだ。

お　芳。（少時考へて）え、えい、意地の爲に生きます、妾は矢張り意地を張り貫して死にます、それが妾の目的だつたのですもの。

準之助。（決然として）可し！俺も男の意地だ！お前がその意地を貫くまでは我慢をして置かう、その代り美事目的を果して野村と婚禮の盃を上げた曉には、きッと生命は貰ひに行くぞ！

お　芳。　えい、よう御座んす、三度まで誓つた事は決して後へ引きません、その代り準さん。

準之助。　何んだ。

お　芳。　妾が野村さんの奥さんになるまでは、お前さんが妾の邪魔でもした時には、ホワイト・スターの約束もサクラ・メントの約束もまた此處での誓ひも、すつかり反古にしてよ、いゝこと？

準之助。　うむ、よし！さういふ約束をすれば尚更話が堅くッて可い、お前の影についてお前の身を護ればこそ決して邪魔はしないから安心をしろ！それぢや確かに約束をしたぞ！

お　芳。　えゝ、ようございます。

準之助。　よし、そのことばを忘れるなよ。

準之助は立去らんとして二足三足下手に行き、ちつと見据えて下手奥に這入る、お芳はツカ〳〵と家の前に來て暫らく煩悶の狀あつて溜息を吐く。

家のなかより再び御詠歌聞え、鉦の音淋して響く。お芳は家の周圍をば少時徒路々々して、

お　芳。　ご免ください〳〵。

ト雨戸を叩く。鉦の音やむ。

お芳。こちらは若しや、あの深川にゐらした山崎さんぢやご座いませんか。

家のなかより、「はいそうですが、どなた」と喜久の聲がして、雨戸一枚開く、明り射す。

喜久。どなた様ですかね。

お芳。あ、あの妾お芳で御座いますが。

喜久。えゝ。

お芳。おつ母さん!!

喜久。えゝ。

お芳。おつ母さん、妾ですよ、お芳ですよ。

喜久。ひえい!まあお芳!

お芳。おつ母さん!

喜久。、、、、。

ト二人は夢幻の如く、様々の思ひに沿れつゝ、舞と抱付く、少時無言、やゝあつて二人は離れ、

お芳。まあ、おつ母さん!お達者で何よりですわ、こんな欣しい事は御座いません。

喜久。妾や、本當に夢のような氣がしてならない、お前もまア大層立派な身裝(みなり)になつて、、、、

お芳。おつ母さん、委しいお話はゆつくり致しますが、兎に角お家へ上がらして戴きますわ。

喜久。さあ〈ごうぞお上り。

ト喜久は雨戸を明ける、佛檀に燈明が輝いてゐる。一彦は部屋の隅に寢んでゐる。お芳が四邊を眺しつゝ、坐ると、

喜久。一彦や、一彦や、これ一彦!

一彦。うゝん。

喜久。一彦、一寸眼をお醒しよ。

一彦。うゝん、はい。

喜久。これ一彦、お前がいつも懐しがつてゐる姉さんがゐらしたんだよ。

一彦。(床のなかにて)えつ、姉さんですつて?

喜久。え、姉さんが歸つてゐらしたんだよ。

お芳。一彦、お前もう妾を忘れたらうねえ。

一彦。え、姉さんですつて!?

ト一彦は床のなかから飛起きる、眠げな眼を瞠る。

お芳。まあ、一彦！

一彦。おゝ、姉さん！

ト姉弟は懐しさに迫つて少時は言葉も出でず、無言に手を取る。

お芳。（嬉しさうに）お前もまあ、こんなに大きくなつて。

一彦。あゝ姉さん。

喜久。えゝ、妾も本當に夢のやうな氣がして。

ト其の時、下手より民治駈出で、

民治。さア、お芳坊！先刻はあの野郎が居やがつたから默つて歸つたが、今度こそ連れて行くぞ！

ト云ひつゝ家の際まで行かんとする刹那に、準之助家路の影より躍り出でゝ、

準之助。まだこの野郎！出しやばりやがるな。

民治。えゝ。

準之助はグッと民治の襟首を押える、この狀を見た一彦は、

一彦。あッ、何んだらう。

ト叫んでツカ〳〵と土間に下り、準之助と顔を見合してハッとする。お芳は見て見ぬふり、喜久はこの狀を不審さうに眺めて、この體よろしく

—（幕）—

第三幕　野村家別邸

人物

一三越店員　安川
一玉寶堂手代　土屋
一小間使　お花
一　山崎お芳
一藝者　三代治
一　志方嘉代子
一　野村秀彌
一　細川滿
一令嬢　初枝
一　野村源兵衛

一夫人　澤子
一　志方重三郎
一　藤田欽哉
一　山崎一彦
一　中田熊二郎
一　倉田惣吉

華美灼爛を極めたる和洋折衷の應接間、すべての調度に成金臭味横溢たるべし。

平舞臺、下手に襖二枚、そこより正面中央へ向つて斜めに縁側、縁側には四枚立の障子戸、障子戸を透して庭園の遠見。庭園には春の日、のどかに照輝いてゐる。縁側上手に藤の安樂椅子を置く。正面上手に向つて二間の壁、その前には大きな化粧棚、續いて下手に床、床より上手斜めに四枚立の襖。鴨居の處々には洋畫の懸額、床には「蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身」、隨宮譲貴且歡樂、開口不咲是痴人」と尺八絹本に四段に書いた書の軸、その前に柴檀の香爐、青磁燒の香爐を置く。

舞臺中央にセ、シヨン式の大きな卓、椅子四脚、卓の上には鳳凰の花瓶、蓋掛な灰皿を置く。

床の上手襖の前にゴブラン織の寝椅子。その傍にも小さな卓を置く。ピアノの音ゆるやかに響いて幕明くと、三越呉服店々員安川及び玉賓堂番頭土屋の兩人下手の椅子に腰を掛して語つてゐる。

安川。近頃如何です、お忙しうございませう。

土屋。へえ、お高庇樣で、ごうにかまあ、(間を置いて)でも迚もあなた方のやうな具合には參りませんですよ。もうそれにお得意樣ご申すのが決つて居りますですからな。

安川。いや、さうでも御座いますまい、何しろ、あなたの方は袂の底へ這入るようなお品でも、もう直ぐ何千圓ごいふ高價なものですから、お結構ですよ。

土屋。いえ、ごういたしまして、しかし當時は何ご申しましても、三越樣に叶ふものは御座いませんからな、あなたの方のマークが附いて居れば何んでもお客樣が信用をするのですから、豪氣なもんですね、全く。

安川。あはゝゝゝ、そう限つたわけでもありませんよ。

トその時上手よりお花お茶を持つて出る。

お花。ごうぞ、お一つ。

安川。ごうぞもうお構ひなく。

土屋。こりやごうも恐れ入りますで、へえ。

お花。只今奥樣が直ぐお出で遊しますから、ごうぞ。

安川。へえ、別に急ぎませんで御座いますから、ごうぞ御悠りこ。(お花に見惚れて)しかし、あなたもいゝご器量でるらつしやいますな。

お花。まあ、三越さんはお口の旨いこご。

安川。いえ、全くですよ、如何です、徐々お給のお仕度に、お召か何か一疋。

お花。まあ、姿共がそんな上等なものを身體につけましたら、それこそ罰が當つてよ。おほゝゝ流石はお商賣がお上手だこご。

安川。へゝゝゝ、ごうも恐れ入ります。

お花笑ひ乍ら上手に去る。

土屋。ごうもあなたは旨いですな、あの呼吸(イキ)で商(あきな)ひをするんですなあ。そこへ行くこまだ手前共は客馴れなくつて、いつも主人から叱言を云はれて居るんですよ。あはゝゝゝ。

安川。あはゝゝゝ、御串談仰有つちや不可ません。

上手よりお芳出づ。兩人は慌てゝ椅子を離れ叮嚀に挨拶をする。

お芳。さア、遠慮なくお懸けなさい。

兩人。へえ、有難う存じます。

お芳が扉を却すと、土屋は扉をかける、安川は下手の側に入る。この間に土屋は包を解いて、貴重品のサックをお芳の前に並べる。

土屋。プラチナものこいふ御註文で御座いましたから、今日は金物を一切持つて參りませんで御座いましたが。

お芳。え、その方が結構、もう金類は流行らないからね。

土屋。へえ、全くで御座います、當節はごちら樣でも白金(プラチナ)を御註文で。

ト云ひつゝ、飾櫛、指輪、帶止を見せる。お芳は一々手に取つて見て、飾櫛を取り。

お芳。これは一寸形が變つてゐるわね。

土屋。へえ、それはもう最新流行の形で御座いまして、たつた二つ御座いましたが高輪の益田樣にお願ひをして、もうそれ一つになりまして御座います。

お芳。あ、さう。(ト自分の手許に除けて)それからダイヤの大きいのがありますか。

土屋。へえ、やはりお指輪で御座いますか。

お芳。あ、さう。

土屋。餘りずぬけて大きいのも御座いませんが、これではお氣には召しませんで御座いませうか。

お芳。あ、餘り立派でないが。

ト お芳は自分の指に嵌めて見る。

土屋。お指輪で御座いますこ、餘り大きいのよりは、それ位の方がお品(ひん)が宜しう御座いますが。

お芳。それもさうね、これはお幾ら。

土屋。それで御座いますこ、參千七百圓で御座いますが。

お芳。あ、さう、割に安いのね。

土屋。へえ、もう出來るだけ勉强して願つて居りますので。

この時より少し以前に安川は反物の包みを持つて出で、

安川。參千七百圓、へえ、豪勢なもんですな。

ト感心して見る。

土屋。へえ、商賣にやつては居りましても、何處にそれだけのお値(ね)ちがあるのかこ思ふ位で御座い

ますよ。えい、へ・・・。

お芳。でも參千や四千位のダイヤは、さう大したものでもないのよ。

土屋。へえ、成程なあ。

安川。尤もこちら樣方の御身分では、さう思召すのも、ご尤もで御座いますが、手前共では、ごうして〳〵なか〳〵のもので御座いますよ。

お芳。まあ、そんな事もありますまい、では玉寶堂さん。

土屋。へえ。

お芳。それぢや今日はこの指輪ここれを貰つて置きませう。

ト お芳は指輪を飾御を取る。

土屋。へえ、ごうも有難う存じます。ではお櫛の方が六百圓ご都合七千參百圓ごなりますで御座いますが。

お芳。あ、宜しい。ぢやお金はこの間のご一緒に月末に取りに來て下さい。

土屋。へえ、ごう致しまして、いつでも結構で御座いますこも。

ト 土屋は商品を片づける、安川は風呂敷包を解いて卓の上にひろげる。

安川。お氣に召しますやうにご存じまして、可成り苦心して撰んで參つたので御座いますが。

お芳。あ、さう。

ト お芳は幾反も手に取つて翳したりして見る、土屋は恰度荷をしまつて色柄を眺め。

土屋。へえ、ごうもお綺麗なものですなあ。

安川。それは如何で御座いませうか。

お芳。まあ、これでせうね。

安川。これはもうずッこ仕立晴が致しますから、さぞお似合で御座いませう。

お芳。ぢや、これに此間見せて貰つた夢をつけて、羽織に仕立て、來て下さいな。

安川。へえ、有難う存じます、今日は外に何も御用は御座いませんですか。

お芳。え、まあ今日はよう御座んす。

安川。へえ、左樣で御座いますか、ぢや早速仕立の方へ廻しまして、御屆け致しますですから。

お芳。あ、なるだけごうか早くね。

安川。畏りまして御座います。

上手よりお花書狀を持つて出づ。

お花。あの、志方さんのお嬢さんからだいつて男の方がお見えになりましたが。

お芳手紙を取つて、

お芳。あ、さう、

ト お芳は手紙を見る。この間に安川土屋の兩人は包を仕舞つて、

安川。これはごうもお邪魔をいたしまして。

土屋。また御用が御座いましたら。

お芳。あ、ご苦勞樣でした。

安川。毎度有難う存じます。

ト 兩人下手に退場。お芳荐りに手紙を考へ乍ら讀み返す。

お花。何んご御返事をいたしませう。

お芳。あ、一寸待つてお呉れ、（再び手紙を見る）お花や。

お花。はい。

お芳。妾や長くフランスに居つたものだから、日本の字はよく解らないんだが、一寸讀んで見てお呉れ。

お花。おほゝゝゝ、奥樣、まあ妾が字が讀めないご思召して、そんなお人のお悪い、お戯かい遊すものでは御座いませんよ。妾は尋常しか上らないので御座いますもの。

お芳。（愁然の色を隠して）まあそんな事はないわ、妾だつて、そりや學校ごいつたら、、、、（ハッとして）まあ、可いから一寸讀んでみてお呉れな。

お花。まあ、あんな事を仰有つて、妾に恥をお掻せ遊すんでせうよ。

お芳。おほゝゝゝ、そんな事があるものか。

お花。（摩低く）ですけれご、迚も妾共には讀めませんわ。

ト 手紙を見て、

お花。あ、これは何んごか劇場の新しいお芝居の切符を少し買つて上げて置いて下さいご、志方さんのお嬢さんからの御依頼狀でございますわ。さうなんで御座いませう。

お芳。（傲然として）えゝ、そうなのよ。

お花。まあ、お人のお悪いこご、何も彼も御承知遊ばしてるらつしやり乍ら、隨分ですわ。

お芳。（淋しく笑つて）おほゝゝゝ、ではね、三十枚ほご貰つて置いて下さいな。

お花。まあ、三十枚も、、、、。

お芳。　でも、五枚や十枚は見栄なくて、妾からこいつては買えないぢやないか。

お花。　それもさうで御座いますわね。はい、承知致しました。

ト お花上手に去る、お芳ダイヤの指輪を振廻すと打眺める。傾てそれも詰らぬといふ表情を泛べ急に淋しくなつて、腹の底より溜息を吐く。

お芳。　あゝあ、自分の思ふ事を八分までは漕付けたが、思ふようになるにつけても、親が教育をして置いて呉れなかつたのが、つくづく怨めしい、、、、。（何ものかの影を眺詰めるやうに眼を輝かして）いつぞや準さんこ、サンデーゴーで別れたあの晩、これからは三度の食物は粗末にしても、心の食物だけは大切にしやうこ言つた——準さんのあの言葉は、やつぱり眞實の事だつたか知らん？

ト 少時煩悶の狀あつて、靜かに起つて藤椅子に凭れ懸る。

程經てお花出づ。

お花。　あのう、奥様。

お芳。　あ、どうして、切符は貰つて置いたの。

お花。　はい、三十枚だけ貰つて置きましたが、大變に欣んで、奥様にも宜しくこ申して居りました。

お芳。　あ、さう、唯お金を捨るやうなものだけど、さうして置けば嘉代子さんに顔が立つからねえ。

お花。　左樣で御座いますこも、でも奥樣はお芝居を御覽にお出で遊すので御座いますが。

お芳。　何んの行くものかね、外國のお芝居なんか、書生上りの素人に出來るものかね、それに妾は巴里だの伯林で本場の芝居をウンこ見てゐるから、日本へ歸つてそんなものを見る氣には迚もなれないわ。

お花。　それはさうで御座いませうこも、でも切符をあんなにごつさりお買ひ遊して如何遊しますの。

お芳。　さうねえ、どうでも可いよ、面倒臭いから近所の子供にでもやつて了ふが可いわ。

お花。　まあ、勿體ない。

その時、下手にて「御免下さい〳〵」と三代治の聲聞ゆ。

お芳。　おや、誰か來たやうぢやないの。

お花。　あ、左樣ですね、妾見て參りませう。

ト お花は下手に行つて、直ぐ歸つて來る。

お花。　奥樣、また參りましたよ。

お芳。　え、誰が——

お花。　あの、そら、藝者の三代治さんが。

お芳。まあ、またやつて來たの、煩いのねえ。

お花。どう致しませう。

お芳。面倒臭いから、今日は留守だと言つて斷つてお了ひよ。

お花。はい、畏りました。

ト お花行きかけようとする。

お芳。あ、お花、一寸お待ち。

お花。はい。

お芳。あの女の話では若日那とは昔し餘程深い仲だつたといふし、若日那の話ではまた、ほんの氣まぐれに少時の關係だつたといふ事だが。

お花。おほゝゝゝ、奥樣まア如何遊ばしたの。

お芳。いや、別に妾や妬いてゐるんぢやないけれど、どちらの云ふ事が本當なんだか、今日は一つ閑ついでに、あの三代治をおもちやにしてやらうよ。

お花。まあ。

お芳。ひよッとしたら、若日那に撚を戻さうと思つてゐるのかも知れないから、樣はないから、此

方へ通してお呉れよ。

お花。はい、畏りました。

ト お花下手に行く、お芳ダイヤの指輪を眺め、一寸後ろを向いて、化粧棚の鏡に自分の姿を寫して見て、微笑えむ。髪飾の櫛を挿す。下手襖の外にて「さア、どうぞ此方へ」「は、有難う」と兩人の聲がして、お花三代治を案内して來る。

三代治。あら、奥樣、またやつて來てよ。

お芳。あ、るらつしやい、ようこそ。

三代治。お邪魔になるんぢやなかつたの、奥樣。

お芳。いえ、些ッとも邪魔ぢやないのよ。

三代治。そうでしたか、それなら宜つたわ。

お芳。妾も今日は退屈で仕樣がないものですから、こんな日にあなたでもるらつしやれば可いのにと、思つて居つた處なんですよ。

ト この間にお花上手に行き、コーヒを二つ持つて來て、默つて去る。

三代治。まあ、本當に奥樣のほどの可いのには、妾達商賣人でも叶ひませんわ、矢張り少さい時から、

外國にゐらしただけに、御交際がお上手ねえ。

お　芳。　おほゝゝゝ、さうでもありませんわ。妾共こそ、些しお前さんに教えて戴かなくちやならんこ思つてゐるんですよ、本當に。

三代治。　あれ、またあんな旨い事を云つて、あゝ〳〵危ない〳〵。

お　芳。　おほゝゝゝ、本當ですのよ。

三代治。　ごうですかねえ、しかしあの若日那はまだお歸りにならないの。

お　芳。　え、まだ歸りませんの、だが三代治さん。

三代治。　えゝ。

お　芳。　あなたは若日那こは隨分深い仲でゐらしたこいふ事ですが、餘程昔しから關係がおありなすつたの。

三代治。　（パッと顏を染めて）まあ、何かこ思つたら厭ですねえ、奥樣そんな事を仰有つて。

お　芳。　でも、妾はあなたよりも後のものでせう。それに若日那の身持に近頃些し氣になる事がありますから、本當に聞いて置き度いこ思ひますのよ、ですから本當に仰有つて頂戴な。

三代治。　まあ、それぢや奥樣は、妾こ若日那こが今でもごんなかこ疑つてゐらつしやるの。

お　芳。　いえ、さうでもないんですけご、しかしあなただつて、かうしてゐらつしやる處を見るこ、少し位何んこか思つてゐらつしやるのでせう、さうぢやなくつて。

三代治。　あら、厭だ、そんなぢやない事よ、そりや尤も若日那も洋行なさる以前には、、、、おほゝゝ氣を惡くなすつちや不可ませんよ、あなたの前ですけご、妾こはちよいこ深かつたの、そりや妾だつて、若日那には惚れてゐましたわ、その頃はまだ若日那も學生でしたから、お小遣ひだつて充分にありさうな道理はなし、隨分妾も苦勞をしましたわ、奥樣、察して頂戴よ。

お　芳。　まあ御馳走樣。

三代治。　あら、御馳走樣だなんて、それはないでせう。

お　芳。　でも、あなたのお惚氣を聞して戴いてゐるんですもの、それで亞頃でも矢張り會つてゐらつしやるの。

三代治。　え、妾こ若日那こが、冗談でせう。そんな仲でしたら嬉しんですけご、あなたこいふ美しい方が出來たのに、ごうして〳〵、妾は全く磯のあわびよ。

お　芳。　（態とらしく昂奮して）ぢや、本當に逢つてはゐるなんですか。

三代治。　え、本當ですこも。ごうして奥樣そんな事をお聞きなさるの。

お　芳。（一人言のように）それぢや外にまた女でも出來たのか知ちん。

三代治。　え、まあ、若日那が、外に女が出來たつて、何かそんな樣子でもあるんですか。

お　芳。　え、大有りなの。

三代治。　ま、素人、藝者。

お　芳。　え、ごうも藝者らしいの。

三代治。　まあ、驚いた、何處なんです、新橋、それとも赤坂。

お　芳。　それは妾にもよく解らないんですけど、時々女から電話が懸つて來ると、慌てゝ出て行つて泊つて來る事があるんですもの、妾だつて氣を揉むぢやありませんか、てすから多分あなたぢやないか知らんと思つてるたの。

三代治。　まあ、冗談でせう、本當に驚いたわね、若日那の浮氣つぽいのにも。

お　芳。　ですから妾は迚も末の見込もありませんから、あなたにでも奥樣になつて戴いて妾は家へ歸つた方が仕合せだと思つてねえ。

三代治。　まあ、若日那はあきつぽいなのが知らん？

其の時、上手よりお花出づ。

お　花。　奥樣——

お　芳。　何か用なの。

お　花。　あのう、志方さんのお嬢さんがお越して御座いますが。

お　芳。　え、あの嘉代子さんが。

お　花。　え、ごういたしませう、お通し申しませうか。

三代治。　まあ、志方さんのお嬢さんがるらしたんですつて、（周章しつゝ）あの妾それぢや歸りますわ。

お　芳。　え、何に構はない事よ。

三代治。　だつて妾が居つちや具合がお悪いてせう。

お　芳。　え、でも可いわ、あの嘉代子さんは妾が旨く買收してるるんですからね、もう大丈夫よ。お花通してお呉れ。

お　花。　はい、畏りました。

トお花去る。三代治は急に化粧臺の前に立つて、衣紋など繕ふ。

お　芳。　おほゝゝ、男のお客樣ぢやあるまいし、そんなに樣子をしなくても可いぢやないの、三代治さん。

三代治。まあ、でも——何んだか姿體裁が悪いわ。

お　芳。もうそんな初なお年でもありますまいに、おほ、、、。

三代治。まあ、お口の悪いこと、これでもまだ若い人が騒いで呉れるんですよ、おほ、、、。

お　芳。おほ、、、、まあ御馳走様、、、、

嘉代子出づ、この時お芳は寝椅子から下り、態度を改める。

お　芳。（嬉然として）あら、ゐらつしやいまし、さあどうぞ。

嘉代子。今日は、先日はどうも。

お　芳。先日は失禮しました。

二人は叮嚀に挨拶をして中央の卓につく。三代治はその後部に立つてゐると、

お　芳。あ、嘉代子さん、こちらは姜のお友達て、、、、三代治、え三代子さんと仰有るの。

嘉代子。あら、さうですか、姜志方嘉代で御座います、どうぞ宜しく。

三代治。え、始めまして、どうぞ宜しく。

嘉代子。姜こそ。

お花はコーヒを持つて出る。三人の前に置いて退ちうとすると、

お　芳。お花や。

お　花。はい。

お　芳。何か旨しいお菓子をね。

お　花。はい畏りました。

お花去る。

嘉代子。あのう、今日近代劇場の切符をお願ひにお伺ひいたしませんでしたか。

お　芳。え、先刻ゐらつしやいましたから、兎に角三十枚頂戴いたしましたわ。

嘉代子。まア、三十枚も。

お　芳。ほんの少々ですけれど。

嘉代子。いえ、少し處ですか、本當に結構ですわ、姜ステージマネージャに頼れて本當に困つて居りますのよ、今日も父や母には内證でその運動に歩いて居りますの。

お　芳。まあ、さうですか、それは御苦勞様ですわね。

三代治。え、お芝居の連中ですか。

嘉代子。え、さうなんですの、今度始めて組織された新しい劇團なんですけど、あなたもゐらして下

さらない。

三代治。新しいお芝居ご仰有るこ、あのなんでせう、外國人の眞似をして、理屈ばかり並べてゐる芝居でせう。

お芳。おほゝゝゝ、あなたのようにいはれちや、嘉代子さんもやりきれないわね。

嘉代子。えゝ。

三代治。（手を振つて）妾もうあんなお芝居は大厭ひ、歌舞伎座か市村座より、もう芝居は見ない事に決めてありますの、だけご切符は十枚や二十枚なら賣つて差上げますわ、本當に、、、、

嘉代子。は、有難う、ごうぞお願ひをしますわ。

お芳。あ、本當に三代ちゃん、十枚や二十枚なご、云はずに、百枚ばかり引受けてお上げなさいな。

嘉代子。本當にお願ひしますわ。

三代治。まあ、妾に百枚、それぢやあなたは千枚位引受けなくちや駄目ですわ。ねえ嘉代子さん。

嘉代子。おほゝゝゝ、全くですわ、佛蘭西歸りの貴婦人てゐらつしやるんですもの。

お芳。また、嘉代子さん、あんなこを云つて、そんな事を仰有るこ、もう引受けた切符もお返ししてよ。

嘉代子。（態とらしく驚いて）はい〳〵、もう申しませんわ。

其の時下手緣側より秀彌突然に姿を現はす。

秀彌。あゝ、餘り急いだものだから、すつかり草臥れて了つた。

ト獨言しつゝ室内に入る、三人の姿を見て、

秀彌。おやッ。（ト驚く）

お芳。まあ、あなた。

三代治。あら、若日那。

嘉代子。まア。

三人は身の遣り場もなく驚く、秀彌は尙更に意外の態度よろしくあつて、三代治を白眼視する。

この時上手より、お花菓子を持つて來て驚き、やがて慎しやかに卓の上に置いて去る。

三代治。（皮肉な語調で）まア若日那、そんなに難しい顏をなさらなくつても可いぢやありませんか。

秀彌。（お芳の方をちらと視遣つて）うゝむ、しかし、三代治、お前は誰の許可を得て此處へ來たのだ。

三代治。えゝ、誰の許可？

秀　彌。　うん、誰がお前に來いこいつた。

三代治。　え、妾、そりやあなたの奥樣のお許可を得て來たのです。

秀　彌。　え、奥樣の許可？

ト秀彌は二度屹驚してお芳を視遣る。

お　芳。　まあ、あなた可いぢやありませんか、三代治さんだつて昔はあなたの好い方だつたのぢやありませんか、今だつてもごうだか判らないのに、おほゝゝゝ。

秀　彌。　えゝ、お芳お前は何を言ふのだね。また何んだな、この三代治にお前は詭がれたのだらう。

三代治。　ちよいこ、若旦那。

秀　彌。　なんだ！

三代治。　まア怖わい顏をして——そんなに怖わい顏をなさらなくても可いぢやありませんか。

秀　彌。　お前なごに用はない、歸れ。人の家庭に不和の種を蒔くのも可い加減にしろ。

三代治。　なんですつて？歸れこ仰有りや歸りますが、もう一遍承つてから歸りませう。人の家庭に不和の種を蒔くなんて、あなた自身で作つてゐらつしやるぢやありませんか。

秀　彌。　僕がいつそんな種を蒔いた？

三代治。　何んですつて、若旦那！奥樣の前だこ思つて餘り立派な口をお利きなさいますな。

秀　彌。　何に、お芳にはね、お前こ僕この昔の事はすべて懺悔してあるんだ。僕は決してこのお芳に對して愧づる行爲はして居らんのだから。

三代治。　へんー知らないこ思つて大きな口をお利きなさるな。

秀　彌。　おい、お前は一體何を言つてゐるのだ。

三代治。　浮氣をなさるのも大概になさいこ言ふんですよ。またこの奥樣だつて妾を捨てたやうに煙草の吸殼でもすてるやうに、捨てゝお了ひなさるのでせう。あなたは女が幾人あれば足りるのでせう。

秀　彌。　馬鹿なここを言ふな。

三代治。　だつてまた新橋か赤坂あたりにでも、又新しいのが出來てゐるのぢやありませんか。現在奥樣のお口から言つてゐらつしやるんですもの、間違ひつこはありはしないわ。

秀　彌。　えつ！お芳がいつてゐる、おいお前はそんな（お芳に向ひ）詰らない跡形もないここを言ふ筈がないが、何か誤解して居るのぢやないか。

三代治。　何にが誤解な事があるもんですか、あなたは大體浮氣性に生れてゐらつしやるんですよ、いけ好かない。

秀彌。おい、人を馬鹿にするのも好い加減にしろ！

三代治。いつ妾が馬鹿にしました？

秀彌。現在馬鹿にしてるるぢやないか。

三代治。何を馬鹿にしました、ちよいと奥様何んとか言つて下さいよ、口惜しいわ。あなたが餘り温なしいからこんなに増長するんですよ、口惜しい！

お芳。あら、妾何も知らない事よ。

三代治。えつ。

お芳。妾がいつ、そんな事を云ひました。

三代治。まあ、現在あなたが妾に仰有つたぢやありませんか。

お芳。いえ。

三代治。ひえつ！それぢやあなたまでが妾を馬鹿にしてるらつしやるんですねえ。

秀彌。それ見ろ！お芳に限つてそんな事をいふ女ぢやないよ。

三代治。ちえつ！宜う御座んす！奥様餘り人を馬鹿になさるのもいゝ加減になさい。

お芳。いつ妾があなたを馬鹿にして。

三代治。まア何んですつて？イケ圖々しいにもほどがありますよ、あなただつて普通のねづみぢやない事は妾やちやんと睨んであるんですから。

お芳。それがどうしたといふの。

三代治。え、覺えてるらつしやい、この返報はね、きつといたしますから——

三代治憤然として去る、お芳は腹を抱えて笑ひ乍ら、

お芳。まあ、面白いこと、からかつてやつたら本當にしちやつて、おほゝゝゝ。

秀彌。お前があんな事をいつてかついだのかい。

お芳。えゝ、さうなのよ。

秀彌。冗談ぢやない、そんな事は止してくれよ。

お芳。だつて面白いぢやありませんか。

秀彌。お前は面白いか知らぬが僕は閉口だよ。

お芳。まあごうだつて可いぢやありませんか。

嘉代子。おほゝゝゝ、妾はよく事情は分りませんが、これといふのも、秀彌さんあなたが卑怯だからですよ。

秀彌。　え、何が卑怯です。

嘉代子。　え、卑怯ですこも、あなたは御自分の心で思つてゐらつしやる事を行はうこなさるのには、もつこ男らしく大膽でなくては駄目だこ思ひますわ、さうでせう。初枝さんこはお約束がお父さん同仕でおありなすつたにもせよ、あなたの信念がお強ければそれを破壞なさるのは何でもないぢやありませんか、あなたのお心が弱ければ弱いほご、初枝さんのお爲にも、また芳子さんのお爲にも不幸な影を增すやうなものですからねえ。つまりあなたは不正直で見得坊だから不可ないのよ、ごちらにもい、顏をなさらうこ遊ばすこ、そりや飛んでもない間違ひが起りますわ。

秀彌。　成程、そりや嘉代子さんの仰有る通りですね、え僕は何物にも打克つだけの決心があり乍らやつぱり躊躇心が凡てを支配して困る、あゝあ意志が弱いのか知らん。

嘉代子。　妾は意志の弱い人こ、事に當つて躊躇する人は大嫌ひですわ。

秀彌。　あはゝゝゝ、こりや恐縮しますね、だが、嘉代子さん。

嘉代子。　えゝ。

秀彌。　あなたは僕たちに味方するこ仰有いましたね。

嘉代子。　えゝ、さうですこも、ですから芳子さんこ結婚を遊ばせこお薦めして居るぢやありませんか。

妾の父や細川さんなごに遠慮をなすつてゐらつしやるこ、いつ迄經つても解決はつきませんよ。

秀彌。　まつたくです、その通りです。

ト秀彌ふかく考へる。その時上手よりお花慌たゞしく出づ。

お花。　あ、若旦那樣。

秀彌。　何んだね、慌て込んで。

お花。　はい、あの只今御本宅からお電話で御座いまして、若旦那樣が居られましたら、大急ぎでお電話口までこいふお話で御座います。

秀彌。　何に、本宅から。

お花。　はい、奥樣からで御座いますが、何んですか、大變にお急ぎな御用のやうで御座います。

秀彌。　うむ、さうか、嘉代子さん一寸失禮をいたします。

嘉代子。　さあ、どうぞ。

秀彌は急いで上手に入る。お花行く。

その時、突然下手より細川滿、令孃初枝、野村源兵衞出づ、二人いづれも駭然とする、その時早くこの時遲く、上手より秀彌出でゝ、三方に別れ一層驚駭の色を動かして少時沈默。

源兵衛は殊の外激怒を帶び。

源兵衛。おい、嘉代子。

嘉代子。はい。

源兵衛。お前は今日こゝへ何しに來たのだ。

嘉代子。は、、、、い。

源兵衛。唯はいだけでは分らん、お前はこんな不自由な別邸まで遊びに來る必要はないぢやないか。

秀　彌。いや、お父さん嘉代子さんをお呼したのは私です。

源兵衛。何に。

ト秀彌は卓の側まで進み、お芳に向ひ、

秀　彌。甚だ失禮だが、一寸話があるので、お前一寸あちらへ行つて呉れませんか。

ト お芳は默つて上手に行く。その椅子に滿、源兵衛、初枝の三人は腰を卸す。一同氣まづい思入れあつて、

源兵衛。秀彌。

秀　彌。はい。

源兵衛。お前の今日迄の行爲は殘らず分つて了つたのだ、俺を始め親戚一門を欺いて、お芳こかいふ女をこゝに圍つて居つたのだらう。

秀　彌。（決然として）お父さんが其處まで御存じなのでしたら、別段私をお訊しになる必要はないぢやありませんか。

源兵衛。うゝむ、そりや何んこいふ事を云ふのだ。お前にはな、初枝さんこいふ立派な許嫁のある身だこいふ事を忘れてはならんぞ。それを承知して居り乍らかういふ事をさせて置くこいふのは、第一お母さんにも罪がある。俺はこゝへ來る前にお母さんにも會つてその事を攻めて來たのだ、しかし何もう辯解をする必要はない、細川さんの前で今日は決然こした事を言つて貰ひたい。

秀　彌。ごう決然こするのです。

源兵衛。いや、初枝さんこ婚禮をして、あの女こは斷然別れるこいふ事を誓つて貰ひたいのだ。

秀　彌。（冷やかに）お父さん。

源兵衛。うむ。

秀　彌。僕は初枝さんの將來の幸福の爲にも、また僕自身の爲にも、何もかも率直に申上げて了ひませう。

源兵衛。うむ、それが可い。

秀　彌。初枝さんこの婚約は只今限りお斷りを致します。

一　同。えつ！

ト顔を見合はす。源兵衛は苦りきつて、

源兵衛。何、婚約を斷る。

秀　彌。はい、斷然お斷りを致します。

源兵衛。（大きな聲で）馬鹿!!

滿。まァ〳〵、野村さん、秀彌さんがその意志なら、こりや緣のないものこ諦めるより詮方がない。

源兵衛。いや、さうぢやありません、秀彌の我が儘です。おい秀彌、貴樣は何が不足で初枝さんこ結婚する事は出來ぬのだ。會社に取つては大切な、しかも野村家こ細川家こは昔し主從の間柄だつたのだぞ、今日野村合名社が盛んになつて居るのも、その源は矢張り先代の細川さんのお高庇による事だ。その恩も義理も忘れて、な、何んこいふ事を云ふのだ。

秀　彌。いや、お話はよく解りました。しかし、事業上の恩義こ、人の結婚は全然別物ぢやありませんか。しかもこの婚約は私が洋行中にお父さんでも叔父さんでも私の意志を確めないで、勝手にお約束なすつた事ぢやありませんか。

源兵衛。うゝむ。

秀　彌。親こ親こが約束しての結婚は、昔しから日本の古い習慣になつて居りますが、それは餘りに人間個人の自由意志を無視したものです、一生の配偶者は親の所有でなくて、子供の全所有なんですからねえ。

源兵衛。それでお前は自分勝手に好きな女こ夫婦になれば可いこいふのか。

秀　彌。はい、つゞめて云へばさうです。

源兵衛。ちえつ！呆返つてものも云へぬ。可し、お前がさういふ料見なら無理にこの初枝さんこ結婚しろこはいはぬ、その代り何んだぞ、お前を會社の副社長にする事も、また父子の緣も今日限りだ。

秀　彌。えゝ。

嘉代子。叔父さん、それや餘り叔父さんの勝手ぢやありませんか。

源兵衛。何んだ、おまへまでが横合から出しやばつて、お前なぞの關つた事ぢやない。

嘉代子。いえ、關はりますわ、叔父さんやまた妾のお父さんのその思想は、また妾共にも影響を來た

すこしは分り切つて居りますもの。

源兵衛。何が分りきつて居るのだ。

嘉代子。さうぢやありませんか、妾だつて今日にも縁談のお話があつて、父から自分の意志も確めないで、唐突に誰れと結婚をせよ！と仰有つても、そりや反對しますわ。

源兵衛。な、何んだと！

嘉代子。況して、秀彌さんは御自分の愛してゐらつしやる方があるのですもの、その心持を察して上げなくちや可愍さうですわ。

源兵衛。お前までがそんな料見になつたのか！

嘉代子。まあ、またそんな怖い顔をなすつて。

滿。まあ可い〳〵、初枝の事であんたの方まで内輪もめをせられては、俺が第一に困る。何もない線と諦めればそれで可いのぢや、しかし、秀彌さん。

秀彌。は、、、、い。

滿。わしの娘があんたの氣に入らなければそりや詮方がない、だが、この野村合名社といふものは、あんたのお父さん、それに志方さん、わしとこの三人が恰も一軒の家のやうになつて、何事も協

力一致ぢや、すべてはこの三人が賛同の上でなくては塵埃一つも勝手に動す事の出來ない、先代からの堅い家憲になつて居るのぢやから、あんたが氣に入つた女と結婚をしやうとせられても矢張りわしらの承諾を得ねばならぬといふ事を忘れずにゐて貰ひたい、尤も野村合名社を脱して、あんたが勝手な事業でも起さうといふのであつたら、そりやまた別問題ぢやがの。

秀彌。は、、、、い。

滿。これだけは念の爲に言つて置くのぢや、さあ初枝。

初枝。は、、、、い。

滿。お前は秀彌さんを望んで居つたのに、秀彌さんに氣に入られぬ爲に、夫婦になる事は出來ぬといふのは、つまり縁がないのぢや、昨日迄は楽んでゐたが、あゝあ、お前に對しても、わしは父として氣の毒なといふよりは、残念ぢや、さあ行かう。

初枝。は、、、、い。

ト初枝悄然と起つ、秀彌はつと初枝の側に行く。

秀彌。あ、一寸お待ち下さい。

滿。うゝむ。

秀彌。（初枝の肩を優しく撫でゝ）初枝さん。

初枝。はい。

秀彌。僕は決してあなたを厭ふの何のと云ふのぢやありません。あなたとの約束を一言僕が洋行中に聞いて居れば、決して僕は一方の女に夫婦になると誓ふのぢやなかつたのです、またあなたの幸福の爲にも僕がさういふ不純な心の影を刻れたものを、あなたのような純良な處女の方に、結婚後に到つて悲嘆をみせたくはないのです、可いですか、あなたのお心を尊重して、僕は一切を打明けてお斷りをする僕の正直な心を汲んで下さい、これは二人の幸福の爲なんですからね。

初枝。は、、、、い、あなたのお言葉はよく解りました。

秀彌。解つて下さいましたか。

初枝。はい、よく解りました。

その時下手より、志方重三郎、濠子の兩人出づ。

一同。おや。

ト意外さいふ表情。

重三郎。（細川に向ひ）いや細川さん、先刻は失禮をしました、おや、嘉代子も來て居つたのか。

嘉代子。はい。

濠子。餘り心配だつたものですから、直ぐ參つたのです。

滿。おや、さうでしたか。

濠子。まあ、嘉代さんも來てゐるの。

嘉代子。はい、叔母さん、今日は。

ト嘉代子は挨拶をして寢椅子に行つて扉を卸す。

濠子。秀彌。

秀彌。はい。

濠子。先刻電話で言つた通り、細川さんやお父さんには何もかも解つて了つたのです。

重三郎。秀彌。

秀彌。はい。

重三郎。この際わしは何もいはぬ、おつ母さんがお前が可愛いばかりに、あのお芳をわしやお父さんの許可も得ずにこの別邸に置いたこいふ事が仰々間違ひの原因だよ。だがお前もよく考直したらごうだ、まだ目色の異つた毛唐でも連れて歸つたのでなくつて、お前のお父さんも幾らか安心だらうが、

お芳さはどういふ堅い約束があつたかも知らんが、わしからお父さんには必ず内證にしてあの女に解るやうに話をするからの。家の爲にも、また細川さんの爲にも、初枝さんと結婚をして呉れい、うゝむ。

秀彌。　はい、尤もお父さんの許可も得ずに、お芳を連れて歸つたといふ事は、重々申譯もありませんん、だが、初枝さんはまだ立派な處女です、お芳はもう僕といふ者に、取返しのつかぬ傷をつけられて了つて居ります。一生外國の土になるといつた彼女を、遥々日本に連れて歸つて、しかも他の令嬢と結婚する爲にお芳を捨るといつたら、彼女は死んで了ひます、そんな殘酷な事は僕として出來ません。

重三郎。　それぢやお前はどうあつても、お父さんや俺の意志に背いてまで財産や名譽を捨てゝも、お芳さとは夫婦になるといふのか。

漾　子。　野村家のお前は一人子ですよ。自分の責任の重いといふ事もよく考えて呉れねば困りますよ。

秀　彌。　はい、しかし財産は努力の結晶です、人の力でどうでも出來ます、だが、人間の生命は人の力ではどうともする事が出來ません。

漾　子。　それぢやお前はあのお芳と其程までに堅い約束をしたのかい。

秀　彌。　はい、晴れて夫婦になる事が出來なければ、一緒に死なうとまで誓ひました。

漾　子。　まあ。

重三郎。　ふん！そんな樣子では俺もお父さんに執なしやうもない。

源兵衛。　おい漾子。

漾　子。　はい。

源兵衛。　秀彌をこんな馬鹿にしたのも、一つは、お前が甘やかしたからぢや、お前を恨む。さア細川さんもう參りませう。志方さん、失禮をします。

ト源兵衛憤然として起ち、嘉代子の側に行つて、

源兵衛。　さア、嘉代子、お前もこんなところに居つては不可ん、わしと一緒に歸んなさい。

嘉代子。　いえ、妾は勝手に歸りますわ、叔父さんの干渉を受けなくつても。

重三郎。　おい、嘉代子、お前は叔父さんと一緒に先きに歸れ、うむ歸れといつたら、歸らんか。

嘉代子。　はゝゝゝい。

ト嘉代子と源兵衛は捨臺詞にて下手に退場する。

重三郎。　いや、細川さん、今更何んとも申譯もない次第ですが、よくまた私共の方でも協議をして、追つて御返事を致しますから。

滿。いや、御心配には及ばぬ、本人がその心なら、こりや詮方のない事ぢや、唯わしは野村家の爲に、一時の出來心からあこで後悔のないやうになる、これは秀彌さんにお願ひをして置く、ごうもお邪魔をしました。初枝行かう。

初枝。はい、では失禮をいたします。

濱子。本當にお嬢さんにも申譯が御座いません。

初枝と滿は悄然と去る、濱子は下手まで見送る。

重三郎。秀彌。

秀彌。はい。

重三郎。お父さんはもうあの通りの立腹だ！お前がお芳こ例ひ夫婦になるこいつても、矢張り第一にはお父さんや、細川さんの承諾も得なければならぬ、將來の事もまたよく考へなければならぬぞ。

秀彌。はい。

濱子出でゝ、

濱子。あの樣子では、細川さんも、またお父さんも大變に立腹をして居られるようだが、まア本當に困つた事だわねえ。しかし、秀彌。

秀彌。はい。

濱子。お前がごうあつても、あのお芳こ添ひたいこ、それほごの決心なら、姿や叔父さんこでお父さんにお願ひをして、添はしても上げようが、しかし野村こいへば相當に人にも知られて居る家柄ですよ、あんまり身分の違つたものはお前の嫁には出來ません。あのお芳は本當に何處の娘で、生れはごんな家柄のものか、それに依つて考への仕樣もあるから、お叔父さんや姿の前で隱さずこお言ひなさい。

秀彌。はい。

重三郎。相當の家の娘であれば、何も世間に遠慮をする事はないのぢや、また何んこでも方法をつけてお父さんを說く事も出來るがいまお前の身に宜からぬ噂でも立つこ、それこそ取返しはつかぬ、大切な時だぞ。

濱子。まさかお前があの女の素性を知らぬ道理はあるまい。ね、ごういふ身分の者であるかそれを委しく云つておくれ、それに依つて、またごうこも方法はあるのだから。

秀彌。はい、あれは、あれはこの廣い世の中で誰一人手賴りにするものもない、愍れな孤兒(みなしこ)です。

濱子。え、これ秀彌二人一緒になれなければ死んで了ふこまで約束をした女の親の名も解らぬのか

い。

秀彌。は、、、い。

漾子。まあ、そんな謎げた話があるものですか。

秀彌情然と肯首れる。その時下手より藤田欽哉出づ。

欽哉。お、、矢張りこちらで御座いましたか。

漾子。まア、藤田さんですか。

重三郎。お、、何か急用でも。

欽哉。はい、御本宅へお伺ひをしたのですが、こちらにお出でだいふので、態々參りました。

重三郎。あ、それは御苦勞ぢやつた。

欽哉。實は今日工場の方へ、お芳さんの身軀を貰ひたいこいつて、隨分亂暴な事を申して參つた老人がありますので。

秀彌。えつ！

漾子。まあ、あのお芳の身體を。

重三郎。そりやまたどういふ仁ぢや。

欽哉。アテにはなりませんが、何でも親だこ申して居ります、本人を渡す事が出來なければ金を出せなぢ、云つて、却々承知をしないのです。

欽哉。名前を訊ねても申しませんし、多分強迫か何かだこは思ひましたが、しかしあァいふ風の男が詰らない風說を立て、歩いては、第一若日那の名譽に關する事ですからな、社長に早速申さうこは思ひましたが兎に角皆樣に御相談を致さうこ存じまして、急いで參つた次第です。

漾子。まあ、さうですか。

重三郎。ふうむ（ちツと考へて）それや何か深いわけがあるだらう、そして何かその男はもう歸つたのか。

欽哉。はい、今日のこころは宥めて歸らしましたが、あの樣子では何んこかしなければ何處まで附ねらうかも知れません。

重三郎。うむ、さうか、それに依つて、あの女の素性も知れるぢやらう。兎も角何んぢやわしはこの腰をかけて話すのはごうも嫌ひで、あちらの日本間の方で篤こ相談をする事にしやう。

欽哉。はい。

重三郎。さア、秀彌、お前も來るが可い。

秀彌。はい。

秀彌不安らしく一同と共に去つた後、お芳は縁側庭先に現はれて徐かに硝子戸を開けて、室内に悄然と入る。少時中央の卓に凭れて煩悶をする、頓て化粧壷の前に行つてトランプを取り出し、寢椅子に凭れ懸つて、獨り判斷をする、二三度やり直しても、尚且(やつぱり)と凶としか出ないので、お芳は兩手で額を押え、仰向けに倒れるやうになつて、

お芳。あゝあ。

ト嘆息を吐く。その時下手縁側の外に山崎一彦現はれ、

一彦。姉さん〳〵、姉さんはゐませんか。

お芳。えつ。

トお芳はハツとし、四邊を注意ふかく眄して、急いで下手にゆく、その時は一彦既に室内に來てゐる。

お芳。おゝ、一彦。

一彦。おゝ、姉さん、昨日來いといふお手紙でしたが。

お芳。靜かに！

一彦。えゝ。

お芳。(上手を一寸見て)あのう、今日は一寸都合が悪いんだが、お父さんやお母さんが見えてゐるのよ。

一彦。えつ、さうですか、(少時考へて)しかし姉さん。

お芳。えゝ。

一彦。こんな事は僕の口として云へた事ぢやありませんがね、この間から申上げて居るやうに、そんな無理をなさらずに、矢張り本當の生活に這入つて呉れませんか。僕は唯々姉さんがさうして、いつも脅された犬のやうに、不安な心に促はれてゐらつしやるお心の裡がお愁傷(いたは)しいのです、自由榮華をして、錦の衣に包れてゐても、姉さんのお心の裡は、明るみのない暗黑な影が宿つて居るのです、姉さんはいつも心に鬪つてゐらつしやる。心の鬪ひ、人間として大切な事でせうが、道を外れた鬪ひは終(しま)ひには破壞するばかりですからねえ。

お芳。一彦！

一彦。はい。

お芳。それはもう後生だから、今の妾には云はないで置いてお呉れ、妾はお前がいふやうな人間の

本當の道とか、眞面目な生活とかいふものは、もう迚も出來ないやうに、妾の身體は世間から虐げられて了つて居るんだよ。

一　彦。　それだから尙お氣の毒なのです。

お　芳。　お前が氣の毒だと思ふなら、どうか妾の思ふやうにさして置いてお呉れ、ながい間、世間を詐り、散々の苦勞をして漸く日本へ歸つたのも、何が樂しみで歸つたと思ふのだい。

一　彦。　、、、、。

お　芳。　妾やね、もう迚も自分の身體は諦めて居るのさ、せめてはお前やおつ母さんにだけは氣樂に一生を送らしたいと思えばこそ、この苦勞をして居るのぢやないか、少しは姉さんの胸の裡も察してお呉れよ。

一　彦。　え、それは有難く思つて居るのです、唯その道を考えて戴きたいのです。小道に溜れた米を拾つて生きて行く雀でさえも、樂しさうに囀つて平和な世界を作つて居るのです。姉さんの生活は虛僞と欺瞞に滿ちきつてゐるのです、どうぞその假面をぬいで、生れたまんまの姉さんに立還つて下さい、お願ひて御座います。

お　芳。　しかしね、妾や本當の自分に還つたら、それこそ生命はないかも知れない。

一　彦。　え、、何んですつて。

お　芳。　どうせ世間を欺いて通つて來た妾さ、姉さんの歩いた道は、正直や眞面目では通れなかつたのだもの、、、、幾人の男を欺して來たらう、どれだけ世の中を欺むいた事だらう、妾や有心がついて、親に見放されてから今日まで、眞實の事といつたら、一度だつて云つた事はない、皆な胡魔化して生きて來たのさ、そんな妾がどうして今更實直な道を考えられるものか、でも、お前にだけは始めて本當の事を打明けたのだよ。血を分けた弟のお前でさえ、妾の本當の事を云つた日にはその通り愛想をつかすのぢやないか、世間に本當の事を云つた日には、直ぐ捨られて了ふのは當然さ！

一　彦。　姉さん！淺猿しい事を仰有つて下さいますな、そんな世間からは捨られて下さい、捨られて下さい！　捨られた方があなたの爲めに幸福な道が開けるのです。

お　芳。　何を野暴な事を云つてゐるのさ。それぢやお前は姉さんの身體は捨られて滅びてもいゝといふのかい。

一　彦。　え、一旦は滅びても、必ず眞實の世界には復活をします、例ひ明日のパンに迫つても、寒さに凍えても、平和な生活は永遠の勝利です！　姉さん！！　私やおつ母さんの事を思つて下さるそのお心で、何故姉さんは自分の心の平和を求めやうとはなさらぬのですか！！僕の一生の御願です。

お芳。、、、、!?

その時下手にて「ご免よ〳〵」と聲がする、兩人ハッとする、

お芳。まァ何んだらう。

一彦。え、僕が見て來ませう。

と一彦下手に行き「どなた樣ですか」「え、俺やお花の父親ですが一寸逢はして戴きたいので」「あゝさうですか、一寸お待下さい」「いや遠慮なく上らして戴きませう」

ト影にて聲がして熊二郎と一彦再び出づ、お芳熊二郎の顏を見て駭然とする。

お芳。まあ、お前は。

熊二郎。へゝゝゝ、久しぶりだつたな、實はこうに花見の時にお前の姿をちらこ見かけたんだが、お前も久しく逢はねえ間に凄い手腕になつたなあ。

お芳。お前さんは何しにこゝへ來たのだい。

熊二郎。何しに來た、おいお芳！何處をごう潛つてこの野村の若日那を蕩したか知らねえが、なァ俺の眼の黑い裡や、手前ばかりに旨い汁は吸はしちや置かねえのだ、それよりか第一、つらかつた時に外の女まで引出したのは手前の仕事に違えねんだ、さァその方から先きに片をつけて貰ふかい。

お芳。妾や、もう昔しのお芳ぢやないんだよ。

熊二郎。何んだと、昔しのお芳ぢやなかつたら、ごうするこいふのだ！

お芳。だからお前さんに相手になつては居られぬのさ。

熊二郎。おい〳〵生云ふねえ〳〵、ふう、河童の民が追歸されたやうにや、この俺は歸らねえんだぞ、さァ第一お前が連れて逃げた女をこゝへ出して呉れ。

お花慌たゞしく、出づ。

お花。まあ。

一彦。お、お花さんか——

お花。お父さん、お前まァ何こいふ事をするのです。こゝの奥さんにお父さんが用事のある筈はないぢやないか。

熊二郎。お前なごの知つた事ぢやないんだ。お前の奥樣こいふこの女アはな、お前や阿母を東京に置いて、俺が平塚で料理屋を開いてゐた時分の養女なんだ！

お花。ひえつ！

熊二郎。止立しやがるこ、手前だつて其分にや置かねえぞ！

お花。　ごう謂ふ事情があるか知らぬけれど、お父さんは妾の奉行先にはもう決して顔を出さぬこいふ約束だつたのぢやないか、お父さんは何處まで妾を窘めるんでしやう。お願ひだからそんな事をいはずに歸つてお呉れ。今日はそれに本宅の奥樣も見えて居られるのだから。

熊二郎。　何に、奥樣が見えてゐる。

お花。　だからそんな事が聞えたら、第一妾が困るぢやないか。

熊二郎。　馬鹿言へ！奥樣の耳に這入れや、願つたり叶つたりだ、さア奥樣をこゝへ出せ、千住の熊が話をしてやらあ。話の分るまでは誰が來ややがつたつて一寸でも此處は動かねえんだ！

ト大聲に怒鳴る、この時、秀彌、重三郎、漾子、欽哉の四名慌たゞしく出づ。

一同。　えゝ！

ト驚駭の體、そのなかに、熊二郎のみは悠々さ寶をふかす。

欽哉。　おや、汝！こゝまで拗こく出て來たのか。

熊二郎。　へゝゝゝ話の解るまでは何處までも參ります！

秀彌。　おゝ、お芳！

お芳。　はい。

秀彌。　お前の親だといふのは、この男か。

お芳。　妾は決して親とは思つて居りません。

重三郎。　たしかお前はお花の父親ぢやないか。

漾子。　まあ、熊二郎ぢやないかね。

ト漾子は重三郎と顔を見合して不審の思入れ。

一彦。　いや、これは決して姉さんの父親でもありません、姉さんを誘拐して苦しめ通して來た憎むべき奴です！

欽哉。　え、お前は確か第三工場の東部に働いて居る職工ぢやないか。

一彦。　はい、職工の山崎一彦です。

欽哉。　ふゝむ、そうだつたか。

秀彌。　え、それぢやお前が口癖のやうに一人の弟があると云つたのは、この男の事か。

お芳。　はい、恩ひがけなくも、若日那の工場で職工をして働いて居りました。

秀彌。　えつ！

熊二郎。　へん、そんなやつさもつさは其方でするが可いや、奥樣！若日那!!

秀彌。　えゝ。

熊二郎。　かうなりや何も彼も申上げやすが、實は俺や今ぢや七年も前に、平塚在でちよいこしただるま茶屋をやつて居りやした時分、表向は養女こいつて、酌婦に抱えたのがこのお芳で、まア看板娘こなつて客が大騒ぎをやる時分にさ、この女ア他の女まで連れて何處かへづらかつた太えい女アでさあ。

重三郎。　え、お芳が酌婦。

漾子。　まあ。

熊二郎。　ごういふ縁で若日那を蕩し込んだか知りやせんが、俺の方の話が解るまでは、金をかけた養女を若日那の慰み者にさしちや置ねえんで、このわたりは決然こ此處でつけて貰ひませうかい！

秀彌。　それぢやお前はこのお芳をごうしやうこいふのだ。

熊二郎。　知れた事だ、連れて行くのさ！

秀彌。　何に、連れて行く。

熊二郎。　さうさ、さ、言分はあるめえ！

一同。　えゝ!!

その時下手より倉田惣吉出づ、惣吉此の狀を見て、さてはと感づき、ツカ〳〵と熊二郎の前に行き。

惣吉。　おい、貴樣は熊二郎ぢやないか。

熊二郎。　おゝ、日那ですか。

秀彌。　おゝ、倉田恰度いゝこころへ來た、この男がお芳を連れて行くこいつて承知をしないのだ。

欽哉。　いや、倉田君！今日工場へ來たのはこの男だよ、先刻僕が話をした一件の。

惣吉。　は、さうでしたか。

秀彌。　早く警察へ電話をかけてくれい。

惣吉。　いや、そんな事は双方の爲に不利益です。

秀彌。　何故？

惣吉。　何故つて、若日那にも似合はない、司法の根本は双方を取調べますからね。

秀彌。　調べられてもいゝぢやないか。

惣吉。　あなたがよければ可いですがね、しかしさうなつた曉には尙これ以上に皆さんが驚れるやうな事が起つてもいけません、まあ兎に角私に委してお置きなさい。

ト熊二郎に向ひ言葉優しく、

惣吉。お父さん、久しく逢はなかつたな。

熊二郎。へえ、また花見の時にはごうも色々お世話になりやして。

惣吉。あはゝゝゝゝ、あの時はいゝ氣げんだつたね。

熊二郎。えゝ。

惣吉。あはゝゝゝゝ、一つあの時の氣嫌になつて貰はうぢやないか。

熊二郎。何んですつて、旦那！

惣吉。うむ。

熊二郎。折角ですが、今日のこの話には旦那も手を引いてお呉んなさいまし。

惣吉。手を引くも引かぬもない、お前が歸れや、それで話は解つてゐるんぢやないか、默つてお歸りよ。

熊二郎。おい〳〵餘り馬鹿にするねえ、よう、唯の老人だこ思つてゐやがるのかい、下手に出て旦那こか何んこか云や、手前は俺を甘くなめてゐやがるんだな、まだ年はこつてもお前達になめられるほごもうろくはしねんだよ、さァごうしてくれるんだ!!

惣吉。おい！熊二郎！

熊二郎。何んだ！

惣吉。俺だつて汝がやるやうな仕事はな、十年も前に腐るほごやつて來たんだ。

熊二郎。何に！

惣吉。逃げられた女に因念をつけるやうな吝臭い惡黨にや相手にやなれねえ、同じやるなら、もつこ器用にやれよ、第一仕事が下手過ぎらあ、よう俺に任して置いて歸れ〳〵、これでも昔しは乾分の百や二百はもつた！

秀彌。しい！これ!!倉田。

惣吉。はい。

秀彌。昔しの生地だけは出してくれるな、第一會社の信用に關するからな、いゝか。

熊二郎。へえん、それぢやお前も一通りは潜つて來たのかい。

惣吉。そうさ！嘘だこ思えば警視廳へ行つて地獄帳を見て來い、千住の熊さんこア些こは極印が大きからうよ。

熊二郎。へゝゝゝへえん、（ト不審がる）

惣　吉。それだから今日は俺に任して歸んな、悪いやうにやしねえからな、それに、熊二郎、お前は自分の子の可愛さを知つてゐるのか。

熊二郎。えゝ。

惣　吉。お前はいつか花見の時に、雨の降るにつけ、風の吹くにつけても、思ひ出すのは棄てた悴の事だと、お前は泪を泛べて話したね、あの時の心持があつたら、このお芳さんの生みの親の心持も尠しは察してやるがいゝ。ねえ、熊二郎、お前は昔し捨てた子供に逢ひたいとは思はぬかい。

熊二郎。人情と商賣は別物だが――あゝ八王子へ捨てゝ來た悴の話をされちや、直ぐ意久地がなくなる、その話だけは止してお呉んなさい。

惣　吉。子を捨てた罪の報ひはさうなくてはならぬ。お前は養女のお芳さんと生みの子の捨てた悴とごちらが尊いのか、ごちらが可愛いのか。

熊二郎。そゝ、そりや悴が可愛いゝに決つてゐまさ。

惣　吉。さうだらう、それだつたら、さうだ三日のあいだ、このお芳さんを僕に預けて呉れ、さうしたら、お芳さんを返すか、それとも昔し捨てたお前の悴を連れて行くか、ごちらかにお前の氣の濟むやうにしてやらう。

熊二郎。え、悴をつれて行く。

お　花。まア、妾の兄さんを、倉田さんは御存じなのですか。

惣　吉。いや、そんな事はごうでもいゝ今日の處はその約束にして穏やかに引取つて貰はう。

熊二郎。こいつは面白い、だがそんな事を云つて、この場を遁れるんぢやありますめえな。

惣　吉。いや、僕も男だ、言つた事は必ず守る。

熊二郎。さうですかい、お前さんがさう仰有るなら、お前さんの顏を立てゝ、今日は歸りやすが、だが日那。

惣　吉。うむ。

熊二郎。俺の悴は二十何年以前のことですぜ、その捨てた子が無事にお前さんが連れて來られるなんて、まア天道樣が西から出りや知らぬ事、まアそれ迄は迚もアテにもなるめえいが。

惣　吉。若し連れて行つたら、お前はごうする。

熊二郎。まアその時にやお芳のこの仕事はお前さんに讓りやせう。

惣　吉。よし。

熊二郎。しかし、四日目の日がのうつと出たら、今度は俺とお前さんの話だぜ、ちつとは骨のありさ

うなお前さんだから今日はお前を買つて、默つて引取りやせう、しかしこの話が破れや、氣の毒だがお前と俺とは血を見るまでは納るめえ、解つたらうな。

惣吉。あゝ、大丈夫だよ。

熊二郎。ぢや堅く約束をしたぜ、ごうも皆さんお八釜しう御座いました。

熊二郎去る。

秀彌。しかし、倉田。

惣吉。はい。

秀彌。お前はあんな約束をして可いのかい。

惣吉。まア〳〵私に任して置いて下さい。

重三郎。しかし、秀彌。

秀彌。はい。

重三郎。この樣子では、お芳は思ひも寄らぬ階級の女らしいな。

滋子。華族樣の落胤だなんて、皆な眞赤な嘘だつたのだね。そんな賤しい身分の女はお前の妻には出來ませんよ。

重三郎。これでお前も眼が覺めたぢやらう。

秀彌。え、おゝ、お芳！

お芳。ゝ、、、。

秀彌。お前は、お前は何故この事をもつと早く僕にだけは打明けては呉れなかつたのだ。

お芳。それを打明ければ、あなたは妾を捨てたでせう、妾はそれが悲しさに、今迄あなたを欺いて居りました。今迄盡してゐた愛情も皆さんの御推察通り、倫落の女の詐つた手管であつたかも知れません。

一同。ひぇつ！

秀彌。お芳！何こいふ情ない事を云つて呉れるのだ、僕は兩親に捨られても、名譽や財産を捨て、も、お前を永遠に愛して行く決心だ。

お芳。それでは妾の身の上が解つても、あなたは本當に妾を愛してくださるのですか。

秀彌。聞けば聞くほど、お前を捨てるわけには行かぬ、戀ばかりは階級の制裁はないからな。

惣吉。成程、男こいふものは、時こ場合によるこ、ごんな淺猿しい經驗を經た女でも戀するものだこ、サツフオの小説にもあるが、此處のことかなあ。

一彦。若日那樣、それぢやあなたは僕の姉さんを眞實から愛して下さるのですか。

秀彌。うむ、愛するとも、人間の過古は皆な罪惡に滿ちないものはない、例ひお芳が不具者でも、罪深い女でも、そんなものに動される愛は詐りの愛だ！本當の愛ではないのだよ。

重三郎。おい秀彌、お前は氣でも狂つたのではないか、そんな女と夫婦になつて、この野村が立つと思ふのか！

秀彌。お父さん、おつ母さん！どうかお許し下さい！　いま僕がこのお芳を捨てたら、この上に墮落をして、一生を踏誤つて了ひます、僕より彼女を救ふものはこの世界中に誰もない愍れな女です、お芳と夫婦になるが爲に財產も渡せぬと仰有るのなら、それも要りません、（床の間の軸を見て）李伯の詩にも隨富隨貧且歡樂とあります、人間の一番尊いものは、金よりも名譽よりも心の財產が一番大切です！

重三郎。あゝあ、頭ががん〳〵痛んで來た、濠子。

濠子。はい。

重三郎。もうこんな話は聞くのもイヤだ、さア部屋へ行かう。

重三郎濠子の兩人憂はしげに顏を見合して嘆息をつく。

濠子。はい。

ト濠子は源兵衛を庇ふて下手に入る。秀彌はその後を見送つた後、決然として。

秀彌。お花。

お花。はい。

秀彌。お前には氣の毒であるが今日限り暇を取つて呉れい。

お花。ひぇい、妾にあのお暇を、まあ。

秀彌。うむ、（一彦に向ひ）また君も同樣、野村合名社の工場の職工は今日限り解雇する。

一彦。え、私を解雇なさる？

ト一彦はお花と向合つて悄然とする。

欽哉。若日那。

秀彌。うむ。

欽哉。それは不可ません、ごういふ理由か知りませんが、この職工沸底の際に、そんな事をされては甚だ迷惑です。

秀彌。いや、僕の妻たる弟に職工の弟は持つ事は出來ぬ、それと同時にお花も例ひお芳があの熊二

郎の養女であつたとすれば謂はゞ姉妹だ、あんな無頼な親を持つ娘を妹には持てぬ。

お花悄然と泣く。

欽　哉。　いや、それなら尙更の事だ、ナポレオンは一滴の雨の爲にウオーターローに敗れました、また徑路窄き所は一歩を止めて人に道を與えよといふ譬もあるぢやありませんか、御自分の勝手からそんな事をなすつては、これが大勢の職工に聞えて御覽なさい、どんな事になるかも知れませんよ。

惣　吉。　まあ、藤田さん、若旦那にも何か考えがあつての事だらう。

欽　哉。　いや、後で面倒な事が起らなければそれで可いのだ。

秀　彌。　おい一彦君さやら。

一　彦。　はい。

秀　彌。　お花。

お　花。　はゝ、、、、い。

秀　彌。　かうなつて見れば三人は不思議な緣で兄弟の關係を結ばねばならぬ、だが僕等の使用人をば直ちに姻戚關係さするわけには行かぬ、使用人さして一旦は暇を出しても、相當の時機を見計つて、今度は僕の弟さもまた妹さもして迎える事にしやう、それ迄はこの事は二人共に世間に一言でも口外

しては不可んぞ、いゝか決して君達の爲に惡いやうにはしないからな、解つたか。

兩　人。　はい。

秀　彌。　いや藤田君、倉田君。

兩　人。　はい。

秀　彌。　君達さは少し秘密に相談したい事もあるから、僕の書齋まで來てくれ給へ。

兩　人。　は。

三人上手に退場、お花ハラ〳〵と涙を流して、

お　花。　でも妾はお暇を頂戴したら、明日からはまたあの怖しいお父さんさ一緒に暮すのだらうか。

一　彦。　姉さん。

お　芳。　おゝ。

一　彦。　若旦那のお言葉も尤もです、職工風情の弟や、小間使のお花さんなどが、兄弟の緣に繼つては、自然姉さんの肩身がせまくつて、お二人の幸福を妨げる基でせう。これも皆な若旦那が姉さんを愛してくださる眞の言葉さ信じて、僕は嬉しくお別れをしませう。ねえ、その方が姉さんの爲には幸福です。僕は、、、、やつぱり獨りぼつちの淋しい人間になるのだ。

お芳。おゝ、一彦！

一彦。姉さん！

お芳。、、、、!?

お芳一彦の手を緊く握つて潸然と泣く、お花は徐かに泣震える。

—（幕）—

第四幕　中田熊二郎の宅

人物

一小間使　お花
一山崎一彦
一中田熊二郎
一河童の民治
一小泉準之助
一倉田惣吉
一刑事　山村幸雄

舞臺正面より上手寄に六疊四疊半の二間つゞき、屋根壁など可成に荒廢せる住居、六疊下手寄に一間の障子入りに、長火鉢、箪笥、水屋など雅致の處に置く。

家の下手に、木立五六本、井戸、破壊されたる垣根、木立のあいだより場末郊外の遠景見ゆ、上手には隣家の二階建裏手見ゆ。

夕闇の迫る春の暮れ方、暮明くさお花は井戸端にてシャツを洗濯してゐる。

湯つぼい三絃の音が上手隣家から響く。

お花。（洗濯しつゝ顔を上げて）お隣りの春ちやん、また下手な浪花節を始めたよ。

ト独り言して洗濯する。下手奥より山崎一彦出づ。

お花。まあ、一彦さん。

トお花は起つ。

一彦。おや、今時分洗濯をしてるるの。

お花。え、、明日はごうやらお天氣らしいものですからね、一寸手隙にお父さんのシャツを洗つて置かうこ思つて。

一彦。そいつは大變だね、時にお父さんは。

お花。今朝から仕事に出て、まだ歸つて來ないのよ、誰もゐないの、（ト手を拭き乍ら）まあお上んなさいな。

一彦。あ、有難う。

ト兩人中央に來る、お花は家に上つて坐布團を出す。

一彦。あ、もう構はずに置いて呉れ給へ、僕はもう直ぐに失敬するから。

お花。まア、遊んでるらつしやいな、あなたはいつ來ても直ぐ歸るこいふのは、あなたの十八番だわね。

一彦。その癖いつも尻が長くつて、お父さんに苦い顔をされるのにね、あはゝゝゝ。

お花。おほゝゝゝ、苦い顔なんぞ些つこもしやしないわ、お父さんは天性あんな怖い顔なのよ。

一彦。その怖い顔のお父さんに、お花さんのような美しい女が生れたもんだなあ。

お花。まあ、戯かつちや厭アよ、しかし一彦さん。

一彦。え、。

お花。あのあなたの姉さんは愈々若日那こ御結婚をなさるんですつてね、本當にまアお目出度いわ。

一彦。え、、僕も姉を何遍諫めたか知れないんだけこ、姉さんはごうしても僕のいふ事を聞いて呉れない、到淩若日那の奥樣になるんだが、僕は不幸な事だこ思つてゐるのだ。

お花。え、、まア若日那の奥樣になるのが、ごうして不幸なの、こんな幸福な話はないぢやありま

せんか。

一　彦。　しかしお花さん、よく考えても御覽な、野村さんと云へば紡績界ぢや鬼に角指折の金滿家だ。そんな家の若日那に、僕の姉が幾ら器量がいゝからつて、そんな事で成立つた結婚は、時が經てばきつと破れるに違ひないよ、破れた時の姉の悲しみを思ふから、僕は八釜しく言つたのだけれど、あんな意地の强い姉の事だから、迚も僕のいふ事などは聞入れやしない。

お　花。　まあ、そんな事は本當に取越苦勞こいふものだわ、全く氏なくして玉の輿に乘るこはこの事ぢやありませんか。

一　彦。　それが大體氣に入らないのだ、矢張り蟹は甲に似て穴を堀るこいふからね。

お　花。　さうあなたのように考えたらしようがない事よ、でも一彦さんは幸福だこ思ふわ。

一　彦。　何故？

お　花。　何故つて、あんな美しい姉さんがあつて、今に御覽なさい、きつこ何んですよ、あなたや、あなたのおつ母さんは、若日那の家へ引取らないまでも、あなたが望み通りの學校へ上れるように、若日那がきつこして下さるに違ひありませんわ。

一　彦。　厭なこつた。僕は金持から補助を仰いだり、姉の世話になつてまで勉强はしたくない、やつぱり勞働をして居つて自分の力で勉强をしたいのさ、人に手頼るなんて、そんな意志の弱い事は大嫌ひだ。姉は生れた時からないものこ諦めて了つた。

お　花。　まア、でもそんなにいふものぢやない事よ。しかし、あなたの姉さんが妾の家に昔しるらしたなんて、本當に小說みたいな話だわね、そしてまたあなたこ妾がこんな仲になるのも、全く因緣こでもいふのでせうか。

一　彦。　うむ、その事を思ふこ、お花さんの前だが、僕はあなたのお父さんが怨めしい、あなたのお父さんの手に懸つて姉はあんな思想を抱くようになつたのですよ。もう姉は心の慰安を得るよりも、物質上の充實した生活をして、それで自分の重苦しい悶えや惱みを胡魔化さうこしてゐるんですよ、尤も近頃の人間は大抵そんな風になつてゐますがね。しかし、お花さんだけはさんなに苦勞をしてもそんな考へはもたぬようにして下さいよ、これだけは僕が本當に頼んで置きます。

お　花。　えゝ、大丈夫ですこも、例ひあなたこ夫婦になつて、一升買ひをしても、乞食をしても、妾や厭やしませんわ。しかしね、妾心配な事があるのよ。

一　彦。　何が。

お　花。　あのう、妾はこゝの今の處では一人子でせう。

一彦。うむ。

お花。あなたも一人子ですわ。

一彦。そうだよ。

お花。困るわねえ。

一彦。何故困るの。

お花。何故つてさうぢやありませんか、あなたを養子に娶ふわけにも行かぬし、また幾ち妾のお父さんが無頓着だつて、妾一人ではなか〳〵嫁入りなぞに出しやしませんわ、妾それが心配でならないの。

一彦。うむ、それもさうだな、しかしお花さんの兄さんとかいふのはまだ歸つては來ないのかね。

お花。えゝ、その兄さんが本當に早く歸つて來て呉れると可いんですけどね、この間倉田さんがあなたの姉さんの話をしに來て下すつた時、兄さんは東京に達者に働いては居るんだけど、或る目的を達する迄は會ふ事は出來ないから、その目的を果した曉まで待つて呉れとの言傳だつたのです。

一彦。目的？　どんな目的だらう、夢のように暮す人が多い世の中に、目的のある人は生々してるて頼母しいな。

お花。え、お父さんも言つてるるんですよ、捨られた子ではあるし、大概やくざになつてるやうから、一人前の人間にどうにかなる迄は父子の對面をしたくないんだらうつてね。

一彦。ふうむ、捨られた？お花さんの兄さんが？

お花。え、さうですつて、妾のお父さんも隨分酷いのねえ。

一彦。うむ、僕の姉と同じような運命の人ですね。

お花。えゝ、本當にさうですわね。

一彦。僕たちの身の周圍はどうしてかう不幸なんだらう。親から子に傳はつて行く血汐までが、どす黒く鬱んでるるような氣がする。

お花。妾はその兄さんが歸つて來て呉れたら、永いあいだじめ〳〵してるたこの家が、まあどんなに陽氣になるだらうと思つて、樂しんでるるんですよ。

一彦。え、僕も姉さんに會ふ迄は、お花さんと同じような事を夢見て、樂しんでるましたがね、會つて見ると、僕は益々世の中の暗い影を見せられたような氣がする、あゝもう考へまい〳〵、飛んだ事からすつかり無駄話をして、洗濯の手を休めさしましたね。

お花。いえ、可いのよ、明日着て行く代りはあるのですから。

一彦。それでも、今日はこれで失禮をしやう、これから夜學に行かなくてはならないから。

お花。あ、さう、ぢや惡止めしない方が可いわね、しかし一彦さん。

一彦。えゝ。

お花。約束をした事はきつと守つて下さいな。

一彦。あ、大丈夫だとも。

ト二人は堅く握手あつて、

一彦。ぢや左樣なら、

お花。え、もう行くの。

一彦。うむ、學校が違いんだもの。

お花。さうねえ——まあ折角勉强をして下さいな。

一彦。あゝ。

お花。ぢや左樣なら。

一彦下手に行く。お花少時見送つてニッコリして、シャツを絞り上げて横手の棹にほす。下手家の奥より熊二郎、竹の皮包みと一升徳利を下げて歸つて來る。

熊二郎。お、、お花、歸つたよ。

お花。あ、お父さん歸んなさい。

熊二郎。あゝ、草疲れた〳〵、今日は亀井戸の方から、淺草あたりまで廻つたので、ごうも疲れて了つた。

ト熊二郎は家に這入る、お花が褌鬼を出す。

お花。まあ、そりや大變だつたわね。

ト言ひつゝ熊二郎は腰引帶をぬぐ。

お花。（徳利を見て）まあお父さん、またお酒。

熊二郎。知れたこつたい、終日歩き通して疲酒の一升位飲まなくちや第一身體が續かないよ。

お花。だつてそんなに飲んぢや毒だわ、お父さんは此の頃野村さんから奥樣の身代金が來たものだから、本當にいゝ氣になつてるんだよ。

熊二郎。笹樽奴！あの時はまアあれで納つてやつたが、雀の涙位の金を貰つて、默つてゐられるかい、仕事はこれからだよ。

ト熊二郎火鉢の前に坐る。

お花。まア、お父さん、まだそんな料見てゐるの、本當にそれだけはお止しなさいよ。

熊二郎。ま、可いや、愚圖々々云はないで、早く酒の燗でもしろ、それからな、こいつァ鮪の意氣のいゝ奴があつたから買つて來た、ねぎまにして呉んな。

お花。はい〳〵。

お花は竹の皮包みと酒徳利を持つて奥に行く、下手より、刑事山村幸雄出で、四邊を念しく眺して、垣根の側に來り、

幸雄。おい、こゝへ今誰も來なかつたかね。

熊二郎。へえ、誰つて、お前さん全體何んですよ。

幸雄。うむ、僕は役所のものだが、三十四五の中肉の男で、洋服を着た男は見かけなかつたか知らん。

熊二郎。へえ、一寸お待ちなせえ、お花、お花一寸來て呉んな。

お花。はい〳〵。

お花出づ。

お花。何に、お父さん。

熊二郎。あの、父が酔つて來る迄に誰も來なかつたかい。

お花。え、來たわ。

幸雄。え、來た、そして何處へ行つたか知らんか。

お花。え、あのう夜學へ行つたんですよ。

幸雄。夜學へ行つた?そんな馬鹿げた事はないがな。

お花。まあ、夜學へ行つて勉強をするのがごうして馬鹿げてゐるのでせう、隨分妙な人だわね。

熊二郎。おい〳〵、お花、お前は誰の話をしてゐるんだい。

お花。え、山崎の一彦さんの事でせう。

熊二郎。違ふよ、こちらの訊ねてゐらつしやるのは。

幸雄。いや、三十四五の洋服を着た男は來なかつたかといふんだ。

お花。あら、そんな男は見かけませんでしたわ。

幸雄。さうか、ぢやもしもさういふ風の男が此近邊に潜伏でもしてゐたらすぐ最寄の派出所へ知して貰ひたい、いやごうも邪魔をした。

熊二郎。いえ、ごう致しやして、ごうもお氣の毒樣で。

刑事は下手奥に駈けて行く。

お花。おほ、、、、隨分聞て者ね、あの人まア何んだらう。

熊二郎。私服に極つてらアねえ。

お花。ちよいと、私服つて何に？

熊二郎。お前知らねえのか、お巡査さんだよ。

お花。ま、刑事？

熊二郎。うむ、さうだよ。

お花。まあ厭だ、何だつてあんなことを聞くんでせう。

熊二郎。大方、追込み者でもあるんだらう。

お花。追込み者つて何に？

熊二郎。煩さいな、さア、早く仕度をして奥んな、腹が減ちやつた。

お花。あ、もう直ぐですよ。

ト花奥に行く。下手より島田民治出で、横手入口より覗込る、奥の間にて。

お花。まア民さんかい。

民治。おゝ、父はもう歸つたか。

お花。あ、家だよ。

ト犬がする。

熊二郎。（寢をふかし乍ら）え、民が來たのかい。

お花。え、さうよ。

熊二郎。こつちへ這入れよ。

民治。あゝ、また浪花節をやつてやがるな。

ト民治出づ、火鉢に向合つて、

熊二郎。おゝ、丁度いゝ場所へ來たな、實は何んだこれからねぎまで一杯やらうこ思つてるこよ。

民治。そいつは有難いや。

熊二郎。おい、お花、早くしろよ。

お花。（奥にて）あ、もう直よ。

民治。時に兄イ。

熊二郎。うむ。

民　治。　實は今日到逐やつて來てやつたよ。

熊二郎。　何をやつたんだい、ごうせ手前の事なら碌な事ぢやあるめえ。

民　治。　まア、さうけなしたものでもねえや。あのそらこないだアから捜してるたお芳坊の亭主だこか云やがつて俺を酷い目に遭しやがつた奴な。

熊二郎。　うむふむ。

民　治。　あいつァお前何んだな、不良少年の頭取してやがつた奴で、感化院を何遍脱走しやがつたか知れねえ奴だ、横濱でも散々悪い事をして、何處かへ高飛したこ見えて、久しく會なかつたが、先達あのお芳をつけた時、仕事の邪魔をしやがつたその敵討にふき込んでやつたんだ。

熊二郎。　何んだ、そんな事かい、馬鹿々々しいや、それよりか、逢つた時、ウンこゝつちめてやるが可いんだよ。

民　治。　こころが彼奴は、馬鹿力のある奴で、迚も俺達の手にやおえねえ。

熊二郎。　そりや手前が意久地がねえからさ、俺らなら本當に捻り潰して呉れるんだ、あはゝゝゝ。

民　治。　いや、彼奴ばかりァ千住の熊さん、幾ら力んだつて叶はねえかも知れねえぜ、まア、さうでもねえが、しかし是からは何だらう、あのお芳さえ、大切にして置きや何んだなあ、金に困る事はね

えよ、それがお芳にあんな野郎がついてるた日にや、謂はゞ俺達の仕事の邪魔ぢやねえか。

熊二郎。　さういや、まアそんな理屈になるかな、しかしごうしてお芳にはそんな野郎がついてるるんだらう、些つこ釣合ねえ話ぢやねえか。

民　治。　そこだよ、兄イ、お芳だつてお前ごうせロクな事して來て、野村の若日那を丸めたんぢやねえにや極つてら、大方あの野郎こ共謀になつて、これからでけえい仕事でもやらうこいふ目論見だぜ。

熊二郎。　ふうむ、さうこしか思えねえな、黒幕がなくちや、幾ら器量がいゝからつてあれだけの凄い手腕は一寸出ねえからな。

民　治。　さうだこも、だがあの野郎が明日にも昔しの兇狀が暴れや、投込れるのは知れたこつた、俺らの仕事はそれからの事だよ。

お花お勝に酒、れざま鍋を持つて來る。

お　花。　ごうもお待遠樣。

熊二郎。　よし來た、あこを途切れねえように燗をするんだぞ。

お　花。　え、よう御座んす。

民　治。　お花さんも大きくなつたな、ごうだい情夫の一人位は出來たらうな。